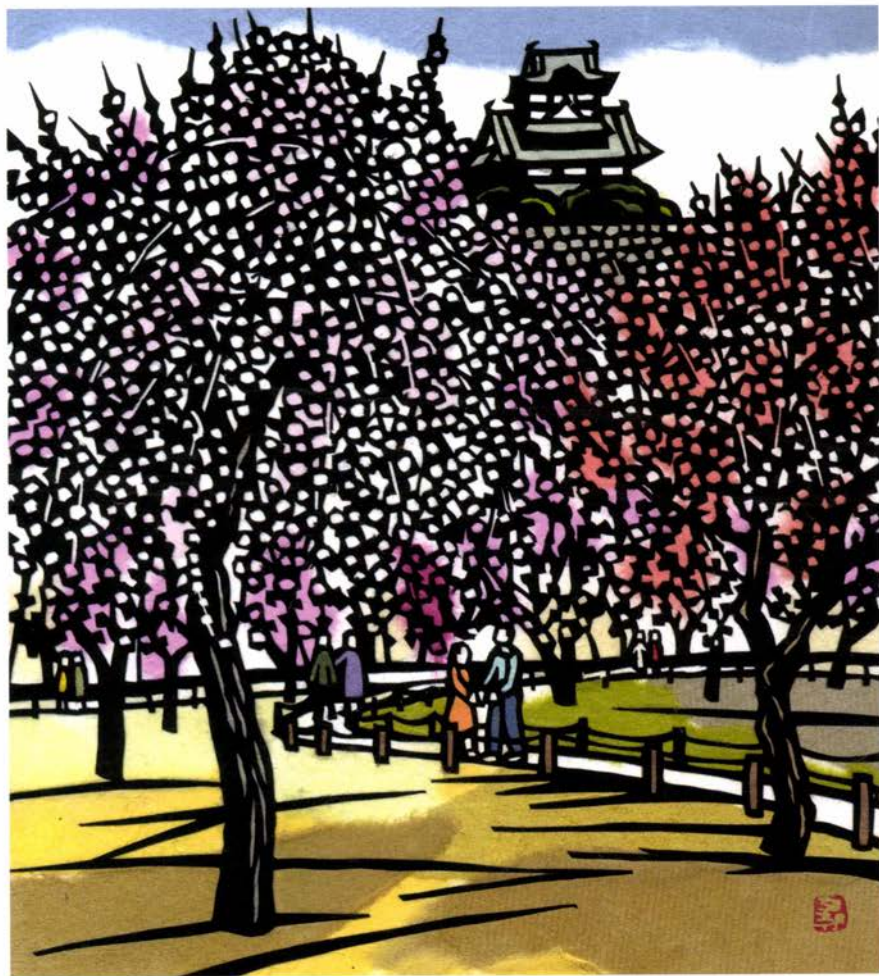


川柳塔

平成二十九年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇七八号



日川協加盟

No.1078

三月号

『川柳雑誌』『川柳塔』通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5判

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

(三刷発行) (三刷刷)
発行 〇〇〇〇年〇月〇日

目次

麻生路郎アルバム

麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」

麻生路郎文集・麻生路郎語録

麻生路郎物語（東野大八）

麻生路郎の人と作品

麻生路郎作品「福寿草」

麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜

麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201号

電話 06-6779-3490

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>

静水さん50年です

小島 蘭 幸

山内静水竹原川柳会会長の紹介で、私は川柳塔創刊号から誌友になりました。近作柳樽への初投句は、昭和40年11月号（川柳雑誌改題第2号）です。10句出して4句入選でした。選者は西尾葉、松江梅里のお二人が担当されています。

ラブレターすきスキ好きと書いてなし 和幸

最初こそ4句入選でしたが、以後は1句入選が続きました。蘭幸と改名した時も1句入選でした。そう蘭幸は1句入選からスタートしたのです。

ある日、19歳になったばかりの私に静水会長は、「蘭幸が20歳になるまでに、川柳塔社の同人に推薦したいんじゃないか、どうか」と言われたのです。私は躊躇なく「ハイ」と答えました。昭和42年6月号に、奈良の村上春巳氏と一緒に新同人として紹介さ

れています。推薦者は静水会長と清水白柳先生です。私はこの時、川柳塔社同人は、何があっても止めない、生涯同人を貫くという強い決意であつたことを覚えています。

もめている二人と知らず鹿が来る 春巳

昭和43年1月、第18回新年交歓36題川柳大会が広島市で開催されました。そこで私は36人の選者の1人に指名されたのです。その時のことを静水会長は、川柳たけはら2月号に次のように書いておられます。―広島36題新春大会に竹原から舊居、蘭幸、一路、静水が参加、七十余名の盛会、選者36名中、最年少者、川柳塔社同人小島蘭幸（19歳）は全参加者に深い感銘を与えたものと信じる―。

軽い気持で引き受けた選者でしたが、今思うと、広島川柳会会長をはじめスタッフの皆様の熱い思いに胸がいっぱいになります。選者は川柳塔社の同人になったばかりの私へのエールだったのです。

川柳塔と生きた半世紀が重い 蘭幸

6月になったら静水会長のお墓に、「静水さん同人になって50年です」とご報告したいと思っています。

座右の句

あなたにも僕にもきつとある翼

(蘭幸)

私の句

大阪弁酒も話も丸くなる

上田和宏

川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「大阪城梅園」

■巻頭言 静水さん50年です

大切なこと

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌 ⑩

自選集

句集の森

■ショートエッセイ 冬の蝶

温故知新

水煙抄

新川柳鑑賞 ⑥1

橘高薫風句抄

誹風柳多留一二篇研究 45

愛染帖

檸檬抄「手頃」

小島 蘭 幸 …… (1)

竹治 ちかし …… (2)

小島 蘭 幸 選 …… (4)

木津川 計 …… (45)

三好 専 平 …… (48)

三好 専 平 …… (49)

西出 楓 楽 選 …… (50)

麻生 路 郎 …… (70)

麻生 路 郎 …… (71)

新川柳鑑賞 …… (72)

誹風柳多留 …… (74)

愛染帖 …… (75)

檸檬抄 …… (78)

北野哲男・安土理恵共選

大切なこと

竹 治 ちかし

鳥根県のある新聞では隔週、紙面を大きく取って連歌が掲載されている。今頃では川柳を凌ぐような勢いをも感じさせて来ている。その中にはもちろん川柳作家も多く参加し、活躍しているようだ。その連歌の師(鳥根大学名誉教授)が曰く、「最近の川柳は昔から持つ良さを忘れ、詩的な川柳だとか、又解ったような解らないような句などが多くなり、面白味を失って来た。だから自分は川柳を止め連歌をやっているのです」との事。

このことで何かを考えさせられました。芸術とは迷い悩みの道なのかも知れません。絵画、書道、華道等すべての芸術をとつてもしかり、伝統の上に立つての今があるものであり、やればやる程奥の深さに嵌り込む。そしてその中で保守か改革かを迷い悩み、その結果その道から逸脱したようなものも出てきたり。文字と言うのには程遠い書だったり、これが活け

英語 de Senryu ⑥3 吉村脩久代 (81)

一路集「わびわび」 吉村久仁雄選 (82)

「ブーム」 紫しめの選 (83)

初歩教室「やれやれ」 居谷真理子 (84)

川柳塔鑑賞 片山かずお (86)

水煙抄鑑賞 亀岡哲子 (88)

■句集紹介 奥 時雄著『苦句八十一歳』 水野黒兎 (89)

インスピレーション・ナビ 印象吟 大西泰世 (90)

せんりゅう飛行船 ⑦5 新家完司 (92)

二月本社句会 岩崎眞里子 (97)

句会燦燦 各地柳壇(佳句地十選/福土慕情・山本希久子) (98)

第41回 全日本川柳2017年札幌大会案内 (111)

三月各地句会案内 (112)

柳界展望 (114)

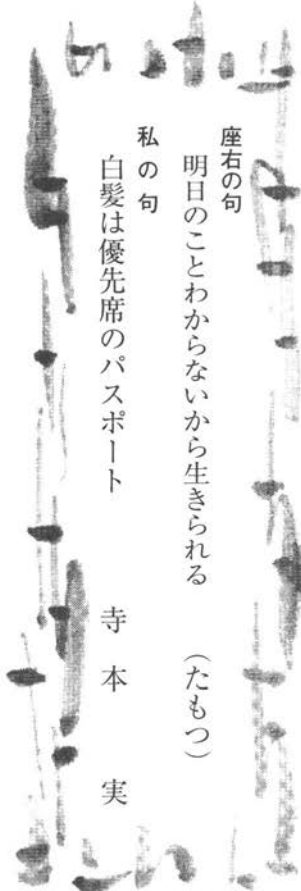
■編集後記(ひとこと/澤井敏治) 朱夏・まつお (116)

座右の句

明日のことわからないから生きられる (たもつ)

私の句

白髪は優先席のパスポート 寺本 実



花かと驚かされるような作品だったりします。そんな作品に出合うにつけ、知らない者は迷ってしまいます。関係ない者が見て理解出来ないところに、その良さがあるのかも勘ぐったりもします。

以前大木俊秀氏の川柳初心者講座では、「作者が何を詠もうとしているのか、第三者である読者に十分理解してもらえ作品でなければならぬ。」と述べていました。私はこれが芸術の基本ではないだろうかと思っています。

アンデルセンの童話「はだかの王様」のなかで、王様のはだかを見抜いた子供の素直な目に、今一度返ってみることも大切なことではないかと強く思う昨今であります。

しかし一方では、難解なピカソの絵、前衛的な書の榊莫山、詩の「冬眠」の草野新平などの作品は、一見普通の人には異常に見えるものの、彼等は正道を踏んで来た上での作品であるという事も知っておくべきでしょう。それらをそこまで到達していない者が真似てみても、木に竹を接ぐようなものになるのは当然な結果であり、つくづく芸術は難しいと思っています。



小島蘭幸選

大阪市 古今堂 蕉子

人間を斜め切りしている噂
友達になれそう同じ十二色

あなご寿司食べたら亡父が現れる
笑うのも泣くのも無料ですどうぞ
笑うたび一日寿命伸びそうだ
鹿せんべい買った途端にマークされ

松江市 石橋芳山

愛という狂気を毎夜研いでいる
創作の限界嘘も底をつく

国家主義この世は黒がよく似合う
また俺を踏みつけ闇は濃くなる
気づかずにいたのか夜に囲まれる
サバイバルナイフを抱いている闇夜

犬山市 金子美千代

クリスマスだけ関係ないおでん
手の届く範囲と決めた大掃除
爆買いは楽し年末なればこそ

一夜飾りはダメよと亡母の声をする
組板を新品にしてお正月

咲ききって召されたシスターの笑顔

堺市 栗原道夫

元旦の電柱という光りよう

マスクしてる方がかわいいからマスク

姉さんに持たされているりんご飴

猫の眼に見透かされている度胸

抽斗にニチャニチャしてるものがあり

コンパスと定規で描いた冬景色

米子市 吉田陽子

飲まず嫌いだっただようです酒旨し

寒の入り喪服の下のちゃんちゃんこ

一般焼香は無伴奏だった

句碑めぐりしばし暗誦して忘れ

笑っても泣いても老いるなら笑う

一芸が最後の最後味方する

和歌山市 木本朱夏

人肌の酒ホロホロとほろほろと
柚子風呂に寝釈迦の如く伸びにけり
誰も来ぬ窓に並べるシクラメン

初春の空を見ている白い猫
落葉降る街旅人の目差して

越冬の金魚に名前などつけて

鳥取市 森山盛桜

とりあえずハートに欲しい力瘤

無敵とも見える寒椿の赤さ

風船が萎んで芸人が消えた

違和感が無いスーパールの無精髭

目力で押さえ込むのは難しい

パワーならここにM1グランプリ

弘前市 高瀬霜石

年金を貰えばシニアなのですか

信号は赤 その間に準備する

世界平和を願ってやまぬ千鳥足

口止めをされているから喋りたい

就活に追われのつべらぼうになる

洗濯にしてもきれいにならぬほく

堺市 奥時雄

帰去来の夢盃に浮かべおり

友と飲む定量越えに目を瞑る

セクハラも酒で許したあの時代

現役は無理横文字が多すぎる
東京へ片道切符とめどない
共存はでき共栄は難しい

吹田市 山本希久子

気分転換するにはもってこいの空

春を待つ薄むらさきのカーディガン

泣きたいとき笑う一芸持っている

さよならがきつぱり言えたことがない

落ち椿小さな秘密抱いたまま

脳内システム昭和のままである

大阪市 谷口義

生年月日が真つ直ぐに立っている

封印を解いたら後期高齢者

父の話をすると水が流れる

アポなしの老後さてさてどうするか

元気かいとさくらが母かも知れぬ

生き延びて去年のさくら今年のさくら

枚方市 海老池洋

陽が昇る今日もやるぞという野良着

世の移り東海林太郎とピコ太郎

核は外豆まきしたくなる地球

老友の今年限りという賀状

神様の真正面に立つ祈り

円空仏の笑みに亡母の温かみ

桜井市 安土理恵

やつぱりと思う答えの返る干支

七草の七つ揃わず七回忌

風邪ひいたけれど体重変化せず

寒肥はもう充分でございます

何もかも許せば私の負けになる

みんな許して春の服でも買おうかな

鳥取市 福西茶子

短足の特技開脚スクワット

三歳と体力勝負トントンド

三十年前なら行つた百合子塾

蟹汁の無料の列へ並べない

半世紀前のアナタは光つてた

柵の中であがいていた昭和

岡山市 永見心咲

受話器から出雲訛の御慶くる

生き方は群れず靡かず諦めず

ピーマンがふと虚しさを口にする

ロンドンで教わる風呂敷の利点

リバイバル婆もキラキラネームです

ちちははが時々降りてくる仏間

河内長野市 山岡富美子

人間に逢いたくなって祭りの輪

都市の畏無人改札自動ドア

オンオフはできぬ家計の液状化

吹雪く夜の被災地おもう友おもう

アバウトでないと渡れぬ橋もあり

心地よいお世辞段差を踏み外す

岡山市 藤成操江

諸々を越えて新年ありがとう

マナーモード戻し忘れてまる二日

欲得はまだあるらしいシニアの輪

約束を確とはくれぬ葉包紙

験のいいひとつ向こうのポストまで

老いてゆく話に戻る午後のお茶

岡山市 工藤千代子

見知らぬ街角で迷い猫拾う

暇だなあ欠伸ばかりしている手帳

なんだかんだと一年が始まった

プライドを落して腰は低くなる

煩惱も脱け殻さえもある便座

目と声の届くあたりに神はいる

横浜市 菊地政勝

百までの自信持つてる粗衣粗食

なるようになるさ貧乏神と棲む

強がりはやそうよ神に笑われる

善人にされて動きがぎこちない

想い出をたどるレールが錆びてくる

折り返し下りだけとは限らない

大阪府 米澤 俣子

マンネリの雑煮二つの餅で足る
鼻の差を競う人生もう止めた
限りあるいのちにごくり寒の水
年金と呼吸合わせているいのち
ところとなるまで煮込む話しあい
握力低下ペットボトルの固い栓

尼崎市 山田 耕治

びかぴかの机家族が取り囲む
世話掛けぬつもりいつまで独り住む
父さんとキャッチボールは痛かった
春来たかほったらかしの梅が咲く
よい雨と思う疲れているのだな
わたくしの個人消費も伸び悩む

大山市 関 本 かつ子

トランプの口に身構える世界
日溜まりで寝そべる猫もお正月
意気込んでカルタ持参の孫が来る
平成の日の丸立てるのも僅か
徳積んだ人にも病という重し
拝殿の行列だけは苦にならぬ

松山市 宮 尾 みのり

巧成り名遂げたお方の家族葬
知る人は誰あれも居なくなり長寿
踏台が要らない孫の手を借りる

スクラップアンドビルド私の現在地
内向的でないが出歩くのも嫌い
核分裂肉身の情薄くなる

神戸市 細 川 花門

人混みが人混みを呼び街師走
仕舞い句座忘年会は付録なり
自尊心だけではパズル解けません
夜なべする妻の影さえ古稀を越え
永久の愛いままティファニーラブリング
ころろ新た一月六日初句会

紀の川市 辻 内 次 根

身を低くして元旦をやり過ぐす
残り火の中の若さがそそのかす
作り物ですな綺麗に見えるから
世相との段差に足を引っ込める
貧乏に夢がわくわくしてた頃
時雨空一輪挿してある窓辺

米子市 成 田 雨 奇

年の瀬の家磨きには無関心
出すよりは貰うのが好き年賀状
元旦や先ず水虫の薬塗る
缶ビールトイレ休憩したあとで
年食ってやつと他人が見えてきた
老いの句は詠まない後期高齢者

松江市 藤井寿代

ドロップを覗くわくわくする明日

6Bで私の空を探してる

温もりが欲しくてキミと手をつなぐ

シルエットだけの心が匂い立つ

夕焼けに軽い約束してしまふ

透明な水には棲めぬあめんぼう

堺市 坂上淳司

金剛の峰より届く初日の出

家族皆元気で祝う屠蘇の杯

鶏澄ましの雑煮で祝う酉の年

賑やかに孫らが踊るお正月

内海を見下ろす露天風呂で春

何年も取り置く直筆の賀状

竹原市 岩本笑子

一月一日朝刊のちと重い

干し柿の甘さ太陽の甘さ

炬燵から駅伝を見る青春よ

地蔵様無事に年が明けました

正月は寄せ鍋もよし集う顔

明日の顔信じて悔いは残さない

堺市 村上玄也

だんだんと急勾配の八十路坂

年寄りの自覚が出来てきた八十路

行きつけの医者も床屋も歳をとり

切った胃の残りが痛みだして鬱

短距離走のように一年駆け抜ける

基準変えられても僕は高齢者

三田市 堀正和

ジイちゃんの鼻唄株のせいだろう

大寒の星と遊んでいる露天

砂風呂で十日間ものダイエット

頓堀で今日も走っているグリコ

本棚へまた増えました入門書

あと一歩平均寿命目指さんか

鳥取市 中村金祥

ひな壇の中程にある心地良さ

喫茶店無口な二人スマホ繰り

くつがえる事はないのが一票だ

人間はしたたか予言くつがえす

天皇は退位総理は延長か

修羅の海渡れば明日が見えますか

羽曳野市 安芸田泰子

一年の命預けて初暦

水仙に荷が重すぎた雪の嵩

雛ばかりの孫へ曾孫の鯉のぼり

締切りがないので遺言まだ書けぬ

足腰が私の指示に従わぬ

新元号私の余命思案する

さいたま市 星野 育子

アルバムで古き佳き日が甦る

断酒宣言した都知事の本気度

夏五輪再度都知事のクールビズ

常識に当然と最低がある

場所毎に新星現れ大相撲

東京都 川本 真理子

こわれてもまた始めから積み上げる

おとなりの庭師とならび枝を切る

スープ煮る 多分幸福な一日

地球から宇宙へ住まい替えるだけ

魂になったら世界一周を

東京都 まえで とよこ

忘れた漢字忘れたままに年をとり

足らん足らん妻からもらう「おこづかい」

いまはむかし許しあう日の真珠湾

海あおあお不戦の誓い帆をたてて

真珠湾首相は眼つむりしまま

富山市 島 ひかる

丹田の力ゆるんで知る病

心まで病まず元氣を取り戻す

点滴三日薬三日の病み退治

家庭医の気転に大事救われる

再発の二割抱えている元氣

可児市 板山 まみ子

風邪ひいて正月休み棒にふり

手抜きでも元旦だけでよいお節

ひと口の屠蘇で初春下戸一家

夕方の三割引きを待つ刺身

喜寿過ぎていつまでできる草テニス

愛知県 早川 遯行

高級車には近付かぬ駐車場

チャンバラへ現実逃避の三時間

出世する酒と出来ない酒があり

ブーメランは返るが息子帰らない

ノーベル賞貰ってやったボブ・ディラン

京都市 清水 英旺

透析の妻を見送る酉の朝

いやな世だ疑り深い人つくる

朝ドラは物わかりよい人ばかり

ええ度胸赤信号で渡らはる

待合室人間観察して飽きぬ

京都市 三宅 満子

餅五つ食べた元氣はどこへやら

古釘を探し黒豆炊きあがる

一病の守りをしながら生き延びる

マスク眼鏡防犯カメラにVサイン

ぬるいのでゆつくり浸る袖の風呂

京都市 榎本宏子

さし芽したバラにしめしめ命の芽

うつの日はピンクピンクで攻めておく

暑い寒い泣いて笑って季は巡る

ケアハウス元美男美女万華鏡

顔のパーツいびつは神のユーモアか

長岡京市 山田葉子

気分だけ若返ったね高齢者

横顔になら眩ける自己主張

振り向かない影がどんどん遠ざかる

宇宙の彼方星の産声響いてる

大きなマルひとつ描かれてる踏み絵

八幡市 今井万紗子

迷わぬよう母が使った父の杖

着服れて豆を煮てます寒の月

プロポーズ答えは一つ決めてある

介護の森正しい答え見当たらぬ

仏間から母も覗いている月夜

大阪市 池上清治

成人式孫の晴れ着に目がうるむ

初詣好きなおみくじ持ち帰り

今年までと書かれた賀状多くなり

年始め揃って屠蘇器回し飲み

紅白に選ばれた曲真似てみる

大阪市 井上昌紀

アメリカより困惑してるのはジャパン

今年また足が鉛にああ初出

第二月曜成人の日がありがたい

楽しんでやり過ごしましょうか寒波

肝臓がゆつくりとフォアグラになる

大阪市 内田志津子

ご無沙汰を詫びつ師走の墓洗う

世智もなくさ迷う闇や五七五

凜として足元照らす寒椿

身の丈に合った歩幅で今日は晴れ

紅葉マーク肩身の狭いドライバー

大阪市 宇都満知子

正月だけ朝湯朝酒してた亡父

カレンダー夫婦の絆備忘録

愛ですな痒いところに手が届く

ネットより触れてこの眼でお買物

乾燥気味喉もハートも加湿器で

大阪市 江島谷勝弘

元氣ですか大丈夫かと子がメール

兎小屋広く思える老い二人

なんとなくきこちない真つ新の靴

好きなことしてるから妻には勝てぬ

生三杯飲めば全没なんのその

大阪市 榎本 日の出

ただ前へ前へがとともむずかしい
ネジ一つゆるめて飛んだ年おんな
おことわり冷たい顔を準備する
新しい年だが気持変わらない
頑張れといわず一緒に歩く影

大阪市 榎本 舞夢

七度目の干支穩やか弾みたい
みくじ一番大吉心引きしめる
好天気年賀回りが多くなる
早七日七草買いにしかけてる
屠蘇気分横に追いやり五七五

大阪市 大川 桃花

美辞麗句多くて心計れない
訂正してから胸が騒ぎ出す
背の縮み竿がちよっぴり高くなり
サイレンに慣れる都会に住む怖さ
討入りの舞台に積もる紙吹雪

大阪市 大治 重信

辿り来た地図振り返る金婚日
誰とでも喋ってみたおでん酒
残金は消えて余命は未だ残る
七人の敵何処に消えたかクラス会
取り敢えず愛していると言っておく

大阪市 奥村 五月

やりくりは慣れていますと大晦日
軍備費のゼロの世界に飢餓は無し
学歴と妻子も捨てて青テント
晴れた日も気分は沈む休肝日
芸人になると出た娘はネオン街

大阪市 笠嶋 恵美

後ろ向きに階段下りる手があった
自転車修理やめるかどうか決まらずに
コンサート聴いて優雅なクリスマス
お年玉やれる幸せかみしめる
角とれてみんなまあいいお正月

大阪市 川端 一步

捨て石は無視されようとされまいと
ルノアール買えぬが妻が側にいる
そう言えば素足で土を踏んでない
春叙勲わが家は妻に感謝状
ああ嫌だ二階になんで来たのやら

大阪市 熊代 菜月

ダイエット忘れ雑煮のうまさかな
わが娘あの日の自分の歳になり
我が胸の想い届けよ星空の人
紅白を今年も見ます一人でも
仏前でさしつさされつ飲むお酒

大阪府 桑田 ゆきの

門前に甘酒の列仏心濃し
わくわくと赤い服着て紅を引く
七草のバックスパー列にする
介護椅子七日の粥を吹き冷ます
時々は百歳体操声黄色

大阪市 小谷 集 一

生き甲斐はバトンを渡す人がいる
労りの言葉に反骨心軋む
弱点を晒すと消えたわだかまり
ユーモアがまだあるうちに五七五
道連れがいて幸せな旅続く

大阪市 近藤 正

ルールなきトランプゲーム飽きがきた
風しだい頭を垂れる風見鶏
台湾は脱原発をよう決めた
つぶやきが要求になり花開く
万博はカジノ呼び水だったのか

大阪市 坂 裕之

人に言う前に自分はどうだった
新人に講義をしたが自分とはと
待っていると良いことみんな逃げていく
失敗も一夜明ければ真つ新に
こちらから声かけてみる初対面

大阪府 佐藤 忠昭

新年はビールを止めて妻の酌
新年の誓いはブル週三度
新聞に投句するには未だ未熟
新年会ファミリー集め大騒ぎ
初孫が新成人でお振袖

大阪市 田浦 實

八十路の春ここまで来たら弥陀まかせ
想定外毎日だから老い多忙
仏壇に手を合わせるのも増えました
折り合いも妥協もうまくなつて来た
生駒山一期一会の初日の出

大阪市 津村 志華子

鳳凰が舞うてるような白い雲
春を待つわすれな草もわたくしも
母は子を子は母思ふ夜半の雨
柏汁でぼつと心を温める
鎌の月その厳しさといとしさと

大阪市 津守 なぎさ

抽子たわわ五衛門風呂へ惜しげなく
賀状出す赤いポストは玉手箱
温泉の裸同士も各国語
福袋買うに勇気のいる傘寿
バイキングどっさり並び老いの箸

大阪市 寺井弘子

元旦の決意日記に一句なす
血統書天下を取っているペット
妻と酒どちらも好きと屠蘇祝う
永遠に残す手紙も断捨離に
ボランティアやる気満満手弁当

大阪市 寺本実

物忘れしないサブリを飲み忘れ
裏の顔表に返す遺産分け
ねちねちが怖くて黙る妻の前
棺よりも狭い書斎で寝転がる
もめ事を論吉の束が和ませる

大阪市 栃尾奏子

手懐けるにはまだ塩が足りないか
殺意まだ蓄のうちに別れよう
大根の白さで一日を洗う
花ことは信じて待っている岬
虚も実も愛したのだな花が舞う

大阪市 中井萌

あめ玉をくれた貴方の手が温い
好きだった夫の癖が目障りに
未体験パチンコ店や立ち呑み屋
ハンサムな医者のおまし痛み止め
何か変車に乗ってジム通い

大阪市 原田すみ子

肝っ玉体に比例していない
フルスイングして自分を叱咤する
大吉へ小さくガッツポーズする
おばちゃんは褒められるのに慣れてない
おばちゃんも夫と会話続かない

大阪市 平賀国和

除夜の鐘聞きつつ気持ち切り替える
酉年だ僕も脱皮を志す
新しい知識を学ぶ趣味の会
世界中波乱の予感酉の年
植民地主義の付けかもテロ難民

大阪市 藤田武人

よれよれの亡父のコートが暖かい
鞭打ってあと何年と指を折る
そよ風のフェザータッチで目を覚ます
いつまでも互いに背を流して
カタカナと英語に弱い知恵袋

大阪市 藤原千恵子

足踏みで毛布を洗い老いを知る
ブリン下げボーナス出たか息子来る
第九聴き私の猿年暮下りる
彼出来た独身通す友が言う
チャンネルを切り替え掃除熱入れる

大阪市 升 成 好

かかわらぬその易しさと難しさ
昨日より今日が確かな正誤表
堂々と老い堂々と酒を酌む
居酒屋で打つ一日のピリオッド
背もたれが何もさせない日にさせる

大阪市 山 本 加お里

食欲も量より質へ変化する
今生きるこれから先はケセラセラ
逝く日まで笑いの蓋は開けてます
ほろ酔いで別の自分が見えかくれ
夢で遇う父はいつでもすましてる

大阪市 吉 内 タカ子

晴れ始め世界平和を祈る年
初みくじ大吉だいて夢も抱き
生かされる恩を忘れぬ米寿路
カタカナ語あかず辞典に好奇心
雨の中托鉢修行むねを突く

大阪市 若 本 安 代

会いたい別れの合図だった通夜
喪のハガキまた薄くなる住所録
犬の名も家族と並ぶ年賀状
箸袋来ぬかも知れぬ子の名書く
良い年になりそう富士がくつきりと

堺市 柿 花 和 夫

冗談が心の闇を突いてくる
揺籃から差がついている不公平
花名刺ごときで妻は動じない
ペテランの笑顔に油断させられる
風待ちの港で齢かさねてる

堺市 加 島 由 一

まだ現役勢いのある年賀状
正月のたび日本人らしくなる
爺ちゃんを不良長寿と命名す
七草がゆ成人式と走り出す
朝寝朝酒株競馬癌治療

堺市 源 田 八 千 代

孫からの初めて貰うお年玉
三箇日避けても人出太鼓橋
段取り良く進む亡夫のお蔭かも
ジーンズのポケット和柄のアクセント
過労死が後の祭とならんよう

堺市 齋 藤 さくら

柏汁がとても美味しい冬の膳
吐く息の白さやっぱり冬なんだ
喧嘩する元気はあるねお父ちゃん
簡単にあんた好きやと言え歳
その日まで休まず羽をひろげる気

一日一生大事にていねいに

堺市 澤井敏治

濁世に鬼のかたちの影法師

リハビリに通いきのうを取り戻す

雪おんないから好きな雪の森

片足は輪に入れておく風見鶏

堺市 遠山唯教

人間の傷や汚れが価値になる

大吉に出足がいいぞ年男

骨折の妻いじらしく頑張ろう

凜として孫が殊勝なことをいう

自転車を離すさびしい予感あり

堺市 内藤憲彦

健康は妻の苦心の料理から

酒とろり好きなだけ飲む三が日

少年を男に変える向かい風

ケセラセラ種も仕掛けもある世間

最期まで心の虹は消しません

堺市 矢倉五月

花あふれさせて柩に眠る顔

娘の拳式出たかったねとまた涙

九十五娘の旅立ちは知らされず

亡父さんがきつと迎えてくれるから

華奢な手に遺骨の壺は重すぎて

老いるのも幸せ物語る長寿

齢ゆえと曆に区切りなどつけぬ

華やきが淋しさ誘う何故かしら

あれやこれ未完のままがよさそうだ

喝采はいらない真実がすべて

和泉市 横山捷也

しんどいと言いながら畑には通う

世渡りの上手な人が持った趣味

トップにはなれず二流で出る吐息

髪だけが目立つ成人式の孫

頑張れと言う立場が逆転した

茨木市 島田誠一

七回忌父のゲンコが語り種

二時間半待たせブーチン悲びれず

負けて勝つ分かつちやいるが至難です

財布にも孫にもうけて廻る寿司

押し入れに引き受けさせた不意の客

茨木市 藤井正雄

応接間装飾品のご解説

酒蔵は五代続いた白い壁

アイディア出てこぬ眼鏡拭くばかり

吊り橋でにこにこせよというカメラ

後味のよい汗を拭くお立ち台

具塚市 石田 ひろ子
ウォーキングエールをくれる枯木立

平穩を空気のようになる怖さ

今年の夢入れる抽出し空けておく

東京の孫ぶたまんがお気に入り

大阪弁に馴染んだ頃に帰る孫

河内長野市 植村 崑代

朝食パン幸せだなあと思う

何もしてやれなかった私が病んだから

この先は娘一人にぶらさがり

両親を失った孫もガンバツてるよ(小二)

娘逝き夫逝き今年こそよい年に

河内長野市 大島 ともこ

このやる気続けるコツはないですか

さつぱりと涙も見せぬ離婚劇

晴れ渡る日には気ままに風まかせ

春一番スギも出番を待っている

割に合わん白旗いつも僕が持つ

河内長野市 梶原 弘光

孫が来るインフル注射急かす妻

さつと席立ちそよ風になる少女

勝手やが朗報だけを待ってます

止め方を習っていない直滑降

全員が強打者ばかりだと脆い

河内長野市 木見谷 孝代
遅い芽へあせらずじつと待つてやる

人生は自分磨きで未だ石

わざわざの知らせに出番熨斗袋

初釜の着物選るのももう仕舞

一期一会別れのお茶はほろ苦い

河内長野市 黒岩 靖博

小つぶでも芯のぶれない社は生きる

今もなお宝の山を探す日々

足かせにならぬと後期高齢者

幼なじみと遅い恋路はお茶の友

翔平が二足の草鞋大暴れ

河内長野市 谷 久美子

一粒の米を大事にした昭和

狎れ切って大事な地球汚してる

あの世への旅は天使に導かれ

手付かずの棚田案山子も淋しかる

車座で戯れ元氣古希米寿

河内長野市 辻村 ヒロ

おばちゃん達無口似合わぬ河内弁

自己紹介無口ですがと名調子

奮発の靴が心も弾ませる

デイケアにジムの積もりで若返る

そこそこの暮らしに感謝片えくぼ

河内長野市 藤 塚 克 三

お互いの心段差にけつまづき

赤い糸俺とお前の命綱

記念日は作り笑顔で疲れます

欲の手が掴み取りでは反り返る

口下手も金の無心は板につき

河内長野市 山 室 光 弘

亡き妻に雑煮供えて事始め

やがて会うどんな人だらゝ閻魔様

真珠湾で始め広島で終る

モノクロのトーンで落ちるばたん雪

噂話員になれない更衣室

岸和田市 岩 佐 ダン吉

火を放つもう振り返ることはない

よく迷う君は優しい人だろう

あの時は無駄な汗だと思つてた

一言もはさまず聞いてくれはった

枯れはったなどとは言われたくはない

岸和田市 雪 本 珠 子

八十路まで生きているのが夢のよう

今もって試行錯誤の八十路坂

主語のない話通じる老い二人

定年後図書館ほくの憩いの場

潮騒のパラード聞いている落暉

四條畷市 吉 岡 修

雪月花どうあろうとも美しい

浅からず深からずですおつき合い

どこからが本論ですかそのお説

平服と聞いて気軽に來てみれば

汗出した順で金から銀と銅

吹田市 太 田 昭

ポケットに鼠火花を飼っている

日の丸を久久に見た路地の裏

パスポートあと十年は取られまい

波風のたたぬ家族で泣き笑い

賽銭の倍返しまで願わない

吹田市 木 下 敏 子

千両を活けて八十路に春が來た

あたたかい手書きの賀状恩師から

足と腰支えてくれる万歩計

年初め今年こそはと墨を磨る

初夢を見るの忘れた慌て者

吹田市 須 磨 活 恵

旧友が久しく揃い八十路会

花も嵐もふみ越えて來た笑顔

知恵袋上手に使う年の功

まな板で独りの春を料理する

諦めよう諦めきれぬから悩む

吹田市 野下之男

大変が顔に出ている総理です

判らない美人都知事のカタカナ語

真珠湾覚えています六年生

あの人が売り場には行きにくい

まだですか会誌待ってるテレビです

高石市 浅野房子

一人正月雑煮おせちも乗り切った

エアコンも夜昼付けるから疲れ

ネガティブを止めて今年はアクティブで

届いたよ又赤飯だうれしいな

痛い痒い一人相撲を取っている

高槻市 井上照子

かえりみて腹にしみこむ除夜の鐘

おめでとう年玉ねらう曾孫来る

眉きりり学ぶからには奥深く

成長を曲げて盆栽評価する

たとえ話ちくりと耳が痛くなり

高槻市 指宿千枝子

年の瀬に新聞だけは読むゆとり

忙中もしっかり食べる朝ごはん

ボンコツの意地白寿まで生きてやる

ボンコツのミシン我が家の歴史です

ゆずられる席へ素直にかけている

高槻市 片山かずお

見回せば熟女ばかりの昼の街

箸だけは右に直した左利き

歳のせい坐るとすぐに眠くなる

ありがたくシルバー割引を受ける

アナログ派紙の手帳を手放せぬ

高槻市 島田千鶴子

断捨離の計画またも年を越す

絵馬堂に未来の願い溢れてる

蜜入りの林檎は恋を語りだす

古希も過ぎまだときめきの薄化粧

じわじわと迫る老いなど背負い投げ

高槻市 初代正彦

我流でもめりはりつけてウォーキング

今だから老先生の聴診器

寡黙だった父も遺影の喋りそう

花マルに孫よりずっとハイになる

鉄棒にぶら下がるのもいる勇氣

高槻市 杉本義昭

決着を一喝でする天の声

円満というベールの中の脂汗

スビーデーに行かぬ廃炉の後始末

真っ直ぐに生き真っ直ぐに歳重ね

貧しかった昭和どっこい生きて来た

高槻市 左右田 泰雄

前向き自信に満ちた腕のさえ
やわらかい心で支え合うくら
しひびき合う形で支え合う暮し
拾われた石が知ってる手の温み
まっすぐの心にや何の影もない

高槻市 富田 美義

メタ腹に昔の艶は見当たらず
いにしえに稼いだ残で細々と
積ん読の罰かお脳の錆び進み
ほどほどに謎解くワイフ居て平和
悠々の余生を壊すガン告知

高槻市 富田 保子

この空気一個の飴が笑顔開け
わが家計サギの的から外される
この辺が手頃と探す墓地墓石
気忙しい人ほどチャンと仕事する
いい人と言われ余生も気忙しい

高槻市 原 洋志

ライバルもアキレス腱にテーピング
年変わるだぶだぶの服着たままで
懐メロも二番になるとララララ
じいちゃんのポケットにある防腐剤
原画には戻れぬ被災地の涙

高槻市 松岡 篤

数秒のお参りに待つ一時間
新雪についた足跡千鳥足
健康と嗜好を行き来する煙草
気が付けばエレベーターを探してる
シャッター街いよいよお化け出て来そう

高槻市 安田 忠子

お正月に生まれめでたい祝膳
戦争で父を知らずに古希迎え
露天風呂赤ちゃん見れば皆笑顔
土壇場で友の一言難逃れ
口下手が何時の間にやらリーダーに

豊中市 池田 純子

六十年こらで私リノベーション
付箋付け今日の私を覚えとく
何事もまあくしちゃう悪い癖
和の心勢揃いしてお正月
年賀状色んな酉が飛んで来た

豊中市 藤井 則彦

何とかなると思えば湧いてくるゆとり
惜敗と言うて自分を慰める
十五年風邪を引かないのも寂し
神棚に子から貰ったお年玉
読み上げて生前整理しておこう

豊中市 松尾 美智代

昔々私にも母おりました
叱られた事誉められた事覚えてる
童話読んで寝かせた孫も二十歳です
成人式一緒に祝うお赤飯
明日は雪少し心が弾みます

豊中市 水野 黒 兔

一月はみな幸せでいてほしい
歯が疼く外は真冬の風の音
活けられて生き生きとする枯れすすき
最後には雑炊となる冬の鍋
振り向けばどんな時にも妻がいた

富田林市 片岡 智恵子

人間愛がどこまで詠める命かな
弱みは見せぬ火中くぐって来た昭和
埋もれ火の中へ忘れた女の香
ほんとうの私鏡の裏へ伏せ
壁ドンなら受けていたかも遠い恋

富田林市 関 よしみ

真っ白な唇に予定外光る
干支とんどまさに火の鳥糞を打つ
ゆつくりと父と話した目が温い
ここからは触れてはならぬ父の海
計画が仕切り直して狼狽える

富田林市 中井 アキ

欲ばると行く手は白くなるばかり
卒寿を歌う佐藤愛子に憧れる
皆去んで独りに残る白い風
お年玉貰う立場も悪くない
リハビリに少し元気を貰うとく

富田林市 中村 恵

唐突に受話器が予定告げている
励ましの声がどんどん追いつめる
謙遜はせぬが取り得の無いわたし
狼の証が満月に踊る
見詰め合う二人いつしか睨み合う

富田林市 山野 寿之

陽だまりを探して歩く寒い朝
大声が正論になる場の恐怖
土砂降りの妻の小言に困子虫
崩しては積んで夫婦のよいとまけ
食卓の絆手料理てんこもり

寝屋川市 籠島 恵子

思い違いで咲いてしまった寒ざくら
春一番の奇跡を待っているのです
ラッキーカーラーせてハンカチ持ち歩く
母さんの都合が続く鍋続く
二七物を選ぶフトコ口具合です

寝屋川市 伊達郁夫

ご苦労さん熱燭つけて鯔二匹
クリスマス写真に私見当たaraぬ
確信があるから語尾が崩れない
マドンナの取扱いの説明書
大声で誘うと象もついて来る

寝屋川市 富山ルイ子

柚子風呂に南瓜もたいている冬至
産土神に家族揃って初詣
お年玉娘婿にも同じだけ
金柑の甘露煮入れて荷を作る
賀状来る一言添えてありうれし

寝屋川市 平松かすみ

役所から世帯主だと指名され
実印も銀行印ももう無力
トランプで占うトランプの政治
毎日が勝負服です都知事さん
学問の神様ですよ途中下車

寝屋川市 森茜

海添いをマラソン風を切っていく
はるかなる風景いとおしい故郷
楠に太古の祭り眠るなり
なにげない仕草に薫るダンディズム
想い出に会う祖父いつも笑ってる

羽曳野市 宇都宮ちづる

えべっさん済ませ作句に取り掛かる
ミニ門松飾り神様お出迎え
中吉の孫に伸び代期待する
おせちには見向きもしない孫がくる
無意識の溜め息孫が真似をする

羽曳野市 徳山みつこ

極上の声でひとりの電話口
三つ四つ故人に絆いただきぬ
霊柩車去って現実に戻る
今はどのあたりなんだろ余命表
トランプ一枚ニッポンどう揺らす

羽曳野市 中川ひろ介

煩悩をリセットさせる除夜の鐘
初富士へ不戦決意の光さす
朝六時戎へ走る福男
苦笑いやがてしみじみさせる句だ
理屈じゃなく情だ飲めば分かるだろ

羽曳野市 永田章司

幼な児の笑顔に託す初日の出
イスラムに般若湯は無いのかな
手作りのお節今では貴重品
禁酒とは書かず節酒と書きました
危険ですアジテーターに人気出る

羽曳野市 藤原大子

今年こそ八起き目めざし初日の出

曲がり角も味方に人生楽しまん

免疫力落ちたか風邪が忍び寄る

どの辺りが私のありのままだろうか

携帯が待つということ忘れさせ

羽曳野市 三好専平

愛される軍隊なんて嘘でしょう

じゅんさいや言われてるねんけど好きやねん

たに川の座敷に遊ぶ冬鼓

ラガーマン一癖も二癖もある面構え

宇宙にも監視カメラの街ができ

羽曳野市 吉村久仁雄

お互いが掘出しものと笑い合う

タブーにも触れて議論を深くする

いやな顔されても過去に会いに行く

かみ合わぬ会話で妻と通じ合う

おしゃべりが過ぎて幸せ煮こぼれる

東大阪市 北村賢子

合掌の思ひ瓦に名を記す

ささくれたころ潤す温いお茶

映像で豪華クルーズしたつもり

寂しさへ尚更凜と背を伸ばす

やさしさに触れてところが風いでくる

東大阪市 佐々木満作

山頂のきりりと拝む初日の出

算段がつかぬ寿命の家電品

主の居ぬ部屋は朝日を浴びて静

込み入った漢字ルーベに頼る日日

登下校見守り隊の愛の背な

枚方市 小林わこ

右へどうぞ私左が好きなので

譲りたいが譲れないもの一つある

もうないと思える意地がまだ少し

免疫力もつと上げたいよく笑う

二度と来ぬ今日一日が宝物

枚方市 丹後屋肇

ちはやぶる神社の杜に鳴るスマホ

玉砂利を踏めば願いが叶いそう

恋敵 月とスッポン謂われても

鳴き砂を踏んで郷里に溶けている

寝た切りへ年賀はがきが気を遣う

枚方市 寺川弘一

人生は喜怒哀楽とそして愛

闘ったピンチの頃が華だった

青黄赤と融通効かぬ信号機

今一度後戻りして渡りたい橋

花盛り見られないけど樹木葬

枚方市 二宮 山久

日溜りを集めてボチと昼寝する
この一年幸せだったと日記帳
一年があつという間にお正月
今日生きる為の朝食がっちりと
一年の始まり大地に根をおろす

枚方市 二宮 紫鳳

水仙の香りほのかに淡路の湯
吉報を待ちてほころぶ梅一輪
青空を一人じめしてボチと行く
手を浄め光の中を初詣
おふくろの味を囲んで子ら集う

枚方市 藤村 亜成

無職無収妻の笑顔に救われる
鈍感力裏目裏目にへこたれず
真剣に神の声を聞く祈り
落着かぬ椅子で場違いを悟る
新しい毎日旧くなる毎日

藤井寺市 伊藤 アヤ子

貧困も工夫次第で生きられる
ゆく年も来る年も見て勇気づく
楽しみは八十の手習い続けてる
伊勢えびは無いが家族で舌つづみ
あの空の御先祖様へ合掌

藤井寺市 太田 扶美代

大夕陽父のはなしが聞きたいな
やさしい神さま失敗また許す
まぼろしに会いたくなつて小さな旅
入門書余生へ弾みつけている
ヒヤシンス咲くたびわたし歳をとる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

春の音ばかり集めて遊びたし
腹立てて見てる浮世のワイドショー
転んだ傷を見せる勇気をもっている
行き過ぎた言葉の端が結べない
口紅を変えて春の彩を着る

藤井寺市 鈴木 いさお

酒飲んでいますかお浄土の友よ
咲き方も散り方もみな個性なり
わたくしを煮込むとコクが増してくる
燃え尽きる前にひと言ありがとう
いつまでもわが息子たれ娘たれ

藤井寺市 高田 美代子

飯の世と思えど忘れがたい人
あのとときの輝き今も身を焦がす
美しい母だったなと思う時
外でも鍋家でも鍋で暖まり
二割引きと言うけど税はついてくる

藤井寺市 田付絹枝

喪中だが我が悔い詫びる初詣
傷跡を袖湯じりじりノックする
おみくじで一喜一憂する若さ
初夢も通り過ぎたな茄子を炊く
貧しさに耐えた証の床飾り

藤井寺市 吉田喜代子

灰皿に余った花も生けてよし
赤い手帳心新たに待つ出会い
駅伝に親子で繋ぐ襷掛け
傘寿過ぎ少し暖色足す事に
風邪ぎみにレトルト粥の有り難さ

藤井寺市 若松雅枝

帰省の子花を手折って連れて来る
両の手に一家支えた跡がある
おせちに飽き夫が作るライスカレー
やがて来る春樂しみに菜を洗う
温かい友の手握り暖貰う

松原市 森松まつお

お出掛けの妻に豚マン頼んどく
妻からのメールは実に素っ気ない
ボロボロにやられた夢にうなされる
反撃をしたいが夢はままならず
夢ぐらい強い私を見せてくれ

箕面市 大浦初音

薄目あけ果報を待つて日が暮れる
口を出た言葉は後へ戻らない
ほどほどにしておかないともたぬ歳
十八歳進路選挙に迷う時
ずけずけと言ってライバル多くする

箕面市 酒井紀華

夢を追う父がせつない馬券舞う
鈍行で一句をひねる独り旅
時わすれ至福の時間古書めぐり
わたくしの心の内に母の部屋
まるごとの宇宙をつつむ花畑

箕面市 出口セツ子

子は自立生活リズム合いません
両親の気持が解る年齢になる
退院後夫初めて独り旅
ご馳走に中性脂肪だけ上がる
賀状忘れ友が心配して電話

箕面市 広島巴子

初春の雲よ天晴富士の山
流行語帰省の孫に教えられ
ジム通い始め友の字遅しく
全員の無事に乾杯クラス会
肉筆のぼっちゃりがいい志功展

八尾市 内海 幸生

誰がためにこの鮮やかな花の彩
今聞けぬ水琴窟が耳の奥

気が軽くなるから極楽有りとしよ
薬事法違反のくすりと知らなんだ
仏像の瞳にも怖い日優しい日

八尾市 高杉 千歩

鬼さんに顔を見せてと豆をまく
一日が有難うですぐ昏れる

断捨離の爽快感より虚脱感
九十を過ぎて歳には拘らず
仕残しへ日付けが変わる老い気まま

八尾市 寺川 はじむ

今年こそ飲みたいトラの祝酒
ロボットが人を侍らす近未来
微酔の美女についつい注ぎたがり
人様の身の弱点を突くサブリ
おとぼけで場を和ませる老いの味

八尾市 宮崎 シマ子

嘘を掻きだし胸がさつぱり
忘れるにもあまりに濃い姉妹愛
和服着たら足が纏れて歩けない
お雑煮も七草粥も手抜かぬひとり
子供でてくる学校が始まって

八尾市 村上 ミツ子

毎日が休みけつこう忙しい
お雑煮をこはんに戻すのは四日
眠れない夜にも夢をみるものが
おさい銭ちよつと奮発初詣
おみくじが何と出ようと気にしない

八尾市 山根 妙子

新年を祝い赤飯小さき幸
時代感疑問符もあり年が明け
めでたさの年賀に添える生一本
高齢の基準が上がる複雑さ
日を捲る音するように小正月

神戸市 上田 和宏

おろおろと命乞いする冬の蠅
朝の光神も一緒に降り注ぐ
大阪はええとこでっせ寝正月
句読点付けると味が飛んでゆく
川柳はなぜかフランス語が似合う

神戸市 奥澤 洋次郎

勝ち負けにこだわり道を踏み外す
ふる里を守る人いるクラス会
木枯らしを蹴って一人の子が帰る
とっくりの形おもしろき夫婦酒
中天へ置いた我が身の泣き笑い

神戸市 富永恭子

世話好きが過ぎて自分をないがしろ

老眼をかけて君だけ見つめてる

茹で過ぎたブロッコリーよ君は今

黒豆煮手間ひまかけた艶やかさ

バッテリー上がり気分は急降下

神戸市 能勢利子

夢いっぱいあり過ぎ悩む五歳の子

断捨離は業者任す死んでから

おでんカレーは娘の家でご馳走に

ぽっかりの穴を埋めてる五七五

親スマホ子供ゲームで家静か

神戸市 松井文香

初詣で神に浄化をされました

お名前ではのほの笑顔うかぶ人

流行にはついてはいけず個性的

恋かしら見るもの全て輝いて

少しずつ不安のつる世の流れ

神戸市 山口光久

ただ無心手を合わせてる手術室

リハビリの妻にせがまれる散歩

お互いが欠点認め五十年

並でいいほったらかしで子を育て

どの顔もストレス浮かぶ縄のれん

神戸市 山口美穂

味いろいろ同居してますお重箱

初詣八十路ゴールをよろしくと

初夢は日記に書いて内緒です

バアバの青春話せば子等は訝し気

年毎に賀状が減って空を見る

明石市 梶谷和郎

息抜きにいつでもどうぞ非常口

青春の扉は老いを拒まない

しがらみをほどくと無垢に還る古い

うっかりをあちこち置いて今日も閉じ

ひとつ前の駅で噂のケーキ買う

芦屋市 黒田能子

ボランティアの助け真心届けられ

ぶらり生きぶらりぶらりと去るつもり

百年後の君へみどりの樹を植える

親ばなれ子ばなれ役目終えました

一歳の脳細胞に負けそうだ

芦屋市 竹山千賀子

合掌をすると心が寄って来る

ふる里の夕日のんびり落ちていく

「ちゃん」付けて酌み交う酒のうまいこと

年賀状律義に届く墓石屋

いい顔で旅立ったよと便りする

尼崎市 市坪武臣

喜寿迎え心の穴を趣味で埋め
妻の料理偶にはほめてブラボーに
羽生結弦やつぱり君も神つてる
見つけなら簡単だけど句が詠めず
レントゲン曇りが無くて安堵する

尼崎市 加川靖鬼

腹割って話そう酔いの醒めぬうち
泥水を漉すレンコンの穴の数
一線を越えヒロシマと真珠湾
ツブヤキに慌てふためく風見鶏
ゆっくりとネジ巻き直す八十路坂

尼崎市 藤井宏造

美術館ほっこりさせるルノアール
堂堂とすればいいのに昼の月
ゆっくりと飲めば五臓に沁みる酒
いつの間にか旗振り役にされていた
古稀ですが恋はまだまだ活火山

尼崎市 藤岡りこ

初詣で深呼吸してみくじ引く
強面の兄ちゃんに席譲られる
少しくらい天然ボケが愛される
会員権未練がましく手放せず
初めての家庭訪問花活ける

加西市 金川宣子

年の瀬もいつの間にやら通り過ぎ
認知症宇宙さまよい帰れない
食べ放題やつてしまった三ヶ日
すぐそこに十年先のダイヤ婚
半世紀同居してると情も沸き

川西市 大坪一徳

青空に丹頂の舞う賀状来る
八十路までゴルフしたくてジム通い
我慢我慢囲碁もゴルフも人生も
迷ったら厳しい方が正解だ
懐を大人は少し空けておく

川西市 山口不動

穏やかな皆来て帰る三箇日
年玉を交換し合う子連れ客
インフルの注射をしたし渡り鳥
火の鳥となつて飛びたや彼岸まで
寒い朝布団の中は小宇宙

篠山市 北澤稠民

初詣孫の合格ただ祈る
沈む陽に両手を合わせありがとう
有難う新聞受けに朝の音
お人柄一緒に届く贈り物
腕組んで水の流れに身を任す

篠山市 酒井 健二

吹き溜まりシートベルトをしてたのに
年取って健康学にしがみ付く
反面の教師に危機を救われる
リストラの二人は記事にならないんだ
巡礼と言うには足が軽すぎる

篠山市 酒井 真由

イルミネーション点滅まやかしの街で
おだやかな風にかすかな火の匂い
酔いつぶれてもよいかと今はまだ素面
まずは一献今宵お相手仕る
おだやかな日和賀客を待つばかり

三田市 足立 つな子

事始め花を手向けてすっきりと
親族に百歳二人息を呑む
うまいもんだね慣れた手つきで鮓を取る
帽子買う若くみえると煽てられ
ありがと一言えて一日つつがない

三田市 石原 歳子

私より背丈の高い枯れ芒
知らぬ間に歳とり餅が好きになり
餅一つ入れたお雑煮食べてみる
七種のお粥のことを忘れてた
七種粥一日遅れて食べました

三田市 上垣 キヨミ

新住所遊びに来いと書いてない
年賀状出してから来た計の報せ
心配と安堵確かめ合う帰省
光る物見つけて親は子を育て
被災地も仮設にも来るお正月

三田市 上田 ひとみ

知らぬ間にどっかり冬の中に居る
一人にはひとりの涙よく似合う
私を励ますような霜柱
新しい水をたつぷり飲んでから
ふいに抱きしめてくれた青い月よ

三田市 尾崎 一子

風邪引いて厄を払った風の神
孫と住み正月飾る家長役
人間のこころ善と悪の橋わたる
母さんと沢山呼んで下さいね
子も孫もよく似た笑顔幸あれと

三田市 北野 哲男

餌買って鱈の干物を釣って来た
アルプスの水を自販機から落とす
頂いた商品券で神戸牛
まだ元氣犬の介護が出来る喜寿
歎待の味に酔ってる安倍総理

三田市 久保田 千代

何気ないその優しさに包まれる
言い勝って負わせた傷を思いやる
不問に付した傷の重みがつきまとう
幸せな人だ涙をよく流す
声援をバワーに変えてゴールまで

三田市 多田 雅尚

猿も良し然れど飛ぶ鳥期待する
絵馬に貼るシールで見えぬ願い事
お賽銭小銭要らんと神が言う
留守宅に先に届いた不在票
マンションで半数も無いしめ飾り

三田市 野口 晶子

鷹巢立ち夫婦鳶の寒い夜
凍る滝紅葉動けず燃えるまま
大地枯れブライドだけで立つ案山子
残した罪リセットですネ除夜の鐘
神様に吐いた本音を皆が知り

宝塚市 田中 章子

両の手に力が入る初日の出
来年も三代で山登りたい
凶を引くこれから上げ潮だと思ふ
お年玉たし算出来たと得意顔
穿鑿をしたがる人は苦手です

三田市 福田 好文

欠席し存在感を増す男
象さんのしわ見て覗くコンバクト
マスコミもニュースにしない汚染水
肝臓が元気で取れぬ休肝日
一日中貴方あなたと小うるさい

西宮市 秋元 てる

アキラメと言わず悟りの一歩前
萎えた脚地続きの故郷さえ遠い
近いで軽く見て居た名所多々
89歳と90歳にある大差
老体にも使える部品二つ三つ

西宮市 緒方 美津子

いいもんじゃいちゃんがいって屠蘇を酌む
まだら呆け百人一首詠じる
新年に鉛筆少し尖らせる
春ですぬ涙いっぱい要りますね
何もかも節約してる寝正月

西宮市 亀岡 哲子

妻なのよおばあちゃんとは呼ばないで
ムコ殿のおかげで弾むバーベキュー
ありがとう父が蒔いてた飯の種
ああ彼もいい爺さんになっていた
結局は生きる話と死ぬ話

西宮市 西口 いわゑ

初句会みな輝いて覇氣をみせ
新しいノート今年の顔にする
熱燭と後期高齢など忘れ
晴天のようにはいかぬ人間は
冬の天に無言の愛を頂きぬ

西宮市 福島 弘子

ロケットより銀河鉄道予約する
オーロラは天女の羽衣だと思ふ
一本の扇子高座を盛り上げる
雪の日は外に出るなと子の電話
男手を頼むや否や孫も来る

西脇市 七反田 順子

あの世にも凡人の橋かけておく
ハワイ行き果たせなかった母に詫び
アモーレと今さら夫には言えません
うちに来た犬ブラボーと吠えず
カジノ来て美しい国とは言えず

姫路市 古川 奮水

新年のお言葉拝聴ガラス越し
適量の銘酒に詩吟新春長閑
のんびりとしたのか髭は伸びている
留守番を引受け電話受けません
平和でも発着練習する空母

南あわじ市 萩原 狸月

I Qを誇る二十歳の恋知らず
恋愛が面倒臭いは領けず
成長をして可愛さの違う孫
将来は任せと成人式の顔
振袖に包む未来の無限大

奈良市 阿部 紀子

祝い事ない三月で拍子抜け
棚飾る一刀彫りのお雛様
傘寿祝これが最後か同窓会
草ぬきにはめた軍手に指輪みつ
真実を言えばギクシャク戻らない

奈良市 大久保 眞澄

鴉にもアホウ呼ばわりされている
一揆ほどの迫力はない政治デモ
レジの早さ並ぶ数では決まらない
年賀欠礼翌年賀状もらえない
ゴムの伸びたパンツが好きらしい夫

奈良市 加門 萌子

日脚伸びそれがわたしに嬉しいの
兄達は元氣四つと八つ上
二人ほど賀状が来ない無事であれ
年玉の額も増えてく孫成長
薄味につとめて二人寿命まで

奈良市 辻内 げんえい

ぬしと呼ばれたのは昔 今好好爺

減塩も外食をして台無しに

日本中老若男女恋ダンス

断捨離で真贋知らぬ家宝捨て

今どきの風幼な子だつてすぐ上がる

奈良市 山本 昌代

動よりも静へ傾く我が身体

除夜の鐘ようやく脱いだ割烹着

ゆつたりとカメやウサギになり傘寿

切ないなあ月を見上げて友のこと

海の色違つて弾む散歩道

奈良市 米田 恭昌

子は子なりの忙しさもある年の暮れ

孫からの仮名の賀状の応援歌

回る寿司皿積み上げる食べ盛り

妻の愛あつさり味に慣らされる

この歳でステップ弾む「恋ダンス」

生駒市 飛永 ふりこ

愛と慈のフォーク千春の四十年

久しぶり同期で囲む笑い皺

葉牡丹も薔薇も大笑いの年に

団塊の物故者多く今を生き

誉めすぎを笑い飛ばすもいる気合

香芝市 大内 朝子

春まだき夢の蕾と目が合った

新しい電池を入れて春を生く

琴線に触れる言葉にある魔法

盆栽の梅が窮屈言うてはる

大食いの裏チャンネルに飢餓の子等

香芝市 山下 純子

いのししの残りですがと芋貰う

顔ぶれは揃ったけれど知恵が出ず

ホツとする台本持たないバスガイド

ほどほどの恋が栄養クリームに

顔ほどに悪い人ではなさそうだ

橿原市 居谷 真理子

おあいにく私ラグビーボールなの

ときに憎みときに愛して息を吐く

シネコンで泣いた見知らぬ者同士

白髪が並んだ宝くじ売り場

二人とも同じ咳して冬ごもり

奈良県 安福 和夫

干芋の夢見た頃を思い出す

難民の救済いずれ担う日も

トランプ風吹き方次第混乱も

オバマ氏のハグと折り鶴無にするな

党派超え支持得る知事に応援歌

奈良県 谷川 憲

万葉の歌碑をたずねて龍田道
煩惱を抱えたままで鐘終わる
お参りが落ちついて来た三回忌
わが近影知らぬ間に歳とついでいる
颯爽とスポーツバイクお年寄り

奈良県 渡辺 富子

木枯らしへ身辺整理せかされる
ドアの向こう孫の羽ばたく音がする
残照の余白へ咲かす夢がある
脳天へ一直線に来る太鼓
無表情な群れとぶつかる老いふたり

和歌山市 磯部 義雄

お年玉想定外の孫も居る
就職の孫から嬉しお年玉
今年から上る大きな八十路坂
身の丈に合った手頃な家族葬
今日からは傘寿新年からやる気

和歌山市 上田 紀子

コツコツと働きこつこつ税取め
一言を欠いて淋しい隙間風
敗者復活信じて今日も暦繰る
水瓶の底に沈めてある誠
アメリカの風邪がその内日本にも

和歌山市 柏原 夕胡

抱き枕抱いてまどろむ春の宵
春になるあの世も春が来たらうか
泣けるだけ泣いたら春がやってくる
しとやかにそつと芽を出す露の臺
桜咲く命のかぎりさくら咲く

和歌山市 喜田 准一

考えてないと言うからある選挙
買った翌日半額という不運
節くれの指は家族を守る手だ
こだわった視野の狭さが気に掛かる
暖かい日射しが春を呼んでいる

和歌山市 楠見 章子

HBが消えて和やかペンケース
鉛筆を握りスイッチ入らない
鼻の高さに嘘ある鉛筆画
悪い冗談左の耳を通過中
投書欄みんな迷っているらしい

和歌山市 坂部 紀久子

三ヶ日晴れ晴れはれと初日記
欲張りません今年も元氣だけ願う
やり切った顔晴れやかに厳かに
酉年の息子も白髪ちらほらと
門限は自己責任の一人者

和歌山市 武本 碧

老骨を煽りブームに乗ってみる
価値観は違うがいつか無二の友
時々休ませておく軽い口
鮎一つ貰って近くなるあなた
三猿を守ればこころ冬になる

和歌山市 玉置 当代

新年を迎え抱負が湧いてくる
人情と澄んだ空気に里帰り
お見合いがすんで空気が和みだす
ヨイドン兎は亀に負けたとき
正月が過ぎて平素の貌になる

和歌山市 土屋 起世子

初鏡美人になれと呪文かけ
生きてゆく答真摯に受け止める
無になってゆつくり人に溶けてゆく
旅にゆく仏壇開けて留守たのむ
締切り日悩んでなんかいてられぬ

和歌山市 古久保 和子

正月の胃がお茶漬けを所望する
番組も普段通りに小正月
デッサンのりんごは大人にはなれぬ
SLが今ジオラマのトンネルへ
帽子掛けで帰らぬ人待つ帽子

和歌山市 堀 富美子

おみくじがまだリタイアをさせぬらし
拍手の中に今年の欲がある
誰からも指される事のない余生
食欲と喋り当分行けそうだ
生きる限り明日へ夢を追うている

和歌山市 松尾 和香

年金でちよつとリツチな一人旅
胃カメラに終わりの治療今日退院
入院中娘の誠意かみしめる
泣くまいと心に決めた我が病
我が命みんな支え生かされる

和歌山市 松原 寿子

気分転換小粋に帯を締めて春
遠き日の手紙十指と揺れながら
ゆらゆらと空気を読んでいる紫煙
寒すみれの眩き風が奪い去る
乾杯のあと切り替えるウーロン茶

岩出市 藤原 ほのか

わだかまり解けて流して晴れやかに
集まれば尽きぬ話題は父母のこと
ストレスを拾い集めて天の川
酌み交わし今年の運を引き寄せる
友逝きて感謝を胸に歩き出す

海南市 小谷 小雪

紀の川市 楠原 富香

自分ばかりしゃべり黙って帰る道

初日の出心身元氣ありがとう

厳しさの病魔ねじ伏せ仁王立ち

せせらぎに心の凝りをほぐされる

折り鶴の羽根に平和が詰められる

海南市 堂上 泰女

毎夜する電話情けが欲しくって

夫との会話に手話が交じりだす

兄夫婦無事か寒波に耐えてるか

若いねと小学生のうまい世辞

ちよつと休憩石庭のよな友の庭

紀の川市 宇野 幹子

復興の夢満天の星ひかる

シクラメン燃え元旦が動き出す

一翼で飛べる氣力を鍛えよう

半眼の大仏様はお見通し

煮崩れて阿吽の森となる夫婦

紀の川市 北山 絹子

生き方を変えて女のひとり旅

示談よりはるかに重い後遺症

訳あって鬼の目からも出る涙

正論を吐く鬼がいて救われる

引き受けた話だんだん怖くなる

紀の川市 山東 日出男

溜息を吐きながら夜汽車が走る

バリウムを飲んだその日の不快感

自己主張空き地の草のせめぎ合い

約束のように地球が回ってる

両耳で善と悪とを聞き分ける

田辺市 岡本 昇

身も心も小綺麗にして老いに勝つ

凜とした背筋八十路を馳け抜ける

祖母元氣おせちの味が変わらない

酉年だ歳を忘れて羽搏こう

手作りの賀状肴にうまい屠蘇

橋本市 石田 隆彦

逆らえどどんどん攻めてくる老化

悠悠と笑いの余生送りたい

記念樹に背も風格も先越され

冗談が真に化けて歩き出す

自信あった目と齒が先に黄信号

鳥取市 池澤大鯰

ラッキーだ死に目に会えて安堵する
彼女から賀状今年も届いてる
不器用を売り物にして世を渡る
農家には軽トラひとつ必需品
ブームにはなぜか反撥したくなる

鳥取市 加藤茶人

正月は飲んで食わせて主婦忙し
結納と一緒に付いて来る介護
血圧も糖も油断ですぐ上がり
似なくても良いのに遺伝とは怖い
その昔良妻賢母居たらしい

鳥取市 岸本宏章

ブーチンにあっさり負けた安倍総理
雪のない正月がいい雪の国
夢に出る我が家はいつも古いまま
バス停へ徒歩一分という我が家
乗りたくはないな自動で走るバス

鳥取市 岸本孝子

年女の親娘を祝う初春だ
あっさりと負けるが勝ちの口喧嘩
老夫婦二人でひとりほどの価値
今どきの花嫁さんは俯かぬ
前向きに生きてる人は福相だ

鳥取市 倉益一瑤

大笑いして呼びこんでいる運氣
古稀の恋ばなイヤハヤなんと愉快なり
消しゴムを山と使って生きてきた
風見鶏あなた信じていいですか
仏壇にぶちまけている不発弾

鳥取市 坂本とも湖

核兵器ゼロの地球を願いたい
百歳を生きてサブリに用は無い
スマホ漬け日本の未来封じ込め
おとこ遍歴包み隠して嫁にゆく
殺生はするなとアラうなぜ説かぬ

鳥取市 棚田大

自己中が我がままだけは封じない
サンタまで少子社会の策を練る
人工知能匂づくりする世来るのかな
女偏嫌な漢字と好い漢字
今日もサブリがぶりと飲んでスタートだ

鳥取市 谷口回春子

悔悟の涙ぼつんと一つ膝の上
好きですと言っても嫌う女もいる
聞き飽きたもつと聞きたい次のこと
描くたび次々変わる妻の顔
天候がファッション変えるキーワード

鳥取市 永原昌鼓

合格の電話待ってた頃が華
赤電話消えておののく老いもある
満ち潮も引き潮もある人の運
一年のけじめ重たい年賀状
携帯の機能こなせぬ我が機能

鳥取市 夏目一粹

言いたいことを飲み込んでお正月
かたつむりスロースローの自己主張
虹に会いなんだか鬱が躁になる
首一つ斬られる覚悟して背く
躓いて転んだ石を撫でてやる

鳥取市 西川和子

目に見えぬ魔物が僕を躍らせる
混乱を静めてくれる子の電話
日常が出来ないままに今日が終え
混乱に気持沈める句を探す
私の五体が宙を泳ぎ出し

鳥取市 平尾菜美

アウンの会話日に日にずれてくる
後出しのじゃんけん嫁にかぶと脱ぎ
止まり木の鳥よ人として仮りの宿
価値観の同じあなたと笑い転け
許容価値広い海だねぐつとくる

鳥取市 前田楓花

下駄箱のハイヒールもう過去のモノ
他人様見てはならない開かずの間
「オタガイノタメニ」オバマにありがとう
西年に母の名言語り継ぐ
天候で決めてしまった初詣

鳥取市 山下凱柳

トランプブーム乗って損失取り返す
五年日記三ヶ日だけ書いてある
友人の喪中ハガキが増えてきた
ラッキーとアンラッキーの狭間生き
やり残した夢を追っかけ生きる日々

鳥取市 吉田孔美子

岩塩で育ったにちがいない頑固
無菌室見えないものと戦する
容姿似ても姉の文字には及ばない
梨の手間親類縁者だつて老う
名産の名に潰される梨農家

鳥取市 吉田弘子

ワntenポ鈍い反応もてあます
客扱い一泊二食丁度よい
無人駅にぎやかな頃高校生
リズム良し歌詞は尚良し演歌好き
大自然地図を持たずに鳥の勘

鳥取市 両川 無限

にんげんの情けを包み込む和音
親馬鹿と他人に言われたくはない
泣きながら女は先の先を読む
風向きが変わり本音を仕舞い込む
も一人の僕に変身する雅号

倉吉市 猪川 由美子

被災して心は折らず句をば折る
戦々恐々トランプ世界変えまくる
立腹はエナジীর無駄止めにする
役者ブーチン一枚上で歯が立たぬ
もっともとの過酷な試練神の意か

倉吉市 牧野 芳光

オムライスの柔らかさにも物足りぬ
キャベツ畑にいる青虫は嫌われる
好きという嘘と嫌いという嘘と
エンドゾーン辺りで幸せに気付く
木枯しをたどれば深い深い闇

倉吉市 山中 康子

同居でもしほりたくない嫁姑
気付いたか眉間のしわが笑いだす
慕い合ってるに通じぬもどかしさ
今日の事仕上げて軽くなる明日
親は子の子は親のアリガタサ知る

米子市 後藤 宏之

紙入れは不要なのは小銭入れ
寒いけどいいこと呉れる冬將軍
おはようとごめんなさいがある空気
ワインでは本音なかなか引き出せぬ
初氷冬との勝負ゴング鳴る

米子市 後藤 美恵子

足の裏洗い新たな一歩踏み
賀状届く急死の友の太い文字
鏡開き老いの庖丁齒が立たぬ
目の粗いざるで砂金が掬えない
舞台メーク写真の我に誰だっけ

米子市 竹村 紀の治

あした目が醒めなかつたらグッドバイ
怠けなさい頑張りなさい使い分け
妙薬の飲み過ぎ叱る処方箋
おめでとう年の始めは診療所
新薬にマウスの屍累累と

米子市 中原 章子

新たな年へ羽ばたく一ページ
メリットがなくても側を離れない
欲が減り生きるガソリン減ってくる
そのうちに力抜くこと覚えます
期待して待つ楽しみのある老後

鳥取県 石谷 美恵子

日に一度じつと手を見る爪をみる

邪魔なこと百も承知で長電話

双方へ言葉を濁す板ばさみ

事なかれ主義で大声など出さぬ

振り向かぬ背なの憎さよ紅葉散る

鳥取県 斉尾 くにこ

こころこころこころやわらかなボール

大人買いはがき百枚まとめ買い

ブルーシートの屋根ですずめのピクニック

スーパールのカート家族の顔がある

字余りが直せず延ばす散歩道

鳥取県 竹信 照彦

氏神へ歩け歩きの初詣

ニワトリになって鳴きたい初句会

オスプレイ飛ばすなと県飛べと国

沖縄は日本の国わが同胞

初日浴びヤンバルクイナ飛ぶ構え

鳥取県 鳥越 鬼一

願い込め「平和」にしたい新元号

瑞雲が湧いて大山千三百年

年金減医療費増で終活苦

相性は良くないけれど金婚だ

訪ねたい元祖混浴露天風呂

鳥取県 西谷 悦子

相性は合わせて生きるものとする

友情を築いてずっと続く辛

夕ご飯夫のおしゃべり聴く時間

汚染した大地でも草よく伸びる

自家製の野菜おいしい気分する

鳥取県 細田 裕花

歌合戦知らない歌手が多すぎる

予言だったかもきれいな虹を見た

オリンピック アスリートより資金繰り

あなたとは違うんですとカタカナ語

花咲かす力を溜めている読書

鳥取県 松川 行男

呆けている家族に言われ先ず耳鼻科

朝三粒夜は忘れて酒が効く

酒の瓶開けてしまえば恵比須顔

爛冷ましお開き頃にどつとくる

冬の月眺めて兄へ香を焚く

鳥取県 山下 節子

はじめはどちらが先か愛と憎

子育ての一幕にある糸電話

悪戯っ子一喝されて散り散りに

ぴちぴちのチアガールに見とれます

開発の大地戦場にはするな

処方箋安心貰う薬飲む

松江市 小川 注湖

百均で手頃揃うね妻が言う

ハイヒールふふの気分この高さ

伊勢エビも父も真つ赤だ喜寿祝い

我慢してまた我慢して春の空

松江市 松本文子

ルビ振ってあるから読める般若經

オレオレ詐欺孫を他人にしてしまふ

挑戦状の様な名刺が置いてある

幸せの窓は夕日が立ち停まる

人は人どうぞお先に春の道

出雲市 伊藤 玲子

鳥の影障子に跳ねて朝の唄

手あぶりの火鉢が聴いた内緒ごと

一束にされて行儀のよい薔薇だ

喪に服す女のうなじ美しい

春なのにシャンソンに泣きジャズに泣く

出雲市 岸 桂子

ほどほどの欲で私はわたしの灯

逆縁の鳴咽が空気重くする

転んで起きて今ラッキーマの中にいる

背かれて生涯バラは棘をもつ

地球温暖徐々に方程式変わる

生かされた命へ今日の捻子を巻く

出雲市 小白金 房子

即吟を綴るわたしのはし袋

4Bを武器にわたしの詩心

墨つばに大工の技がしまっている

お日様の笑顔ふっくら布団ほす

雲南市 菅田 かつ子

生かされて心しずかな初日の出

大根の白さ畑に眩しすぎ

三代代いろんな客が来てくれる

そんな事もあるわでじいちゃんすまされぬ

オバマさんがやはり立派と立ち話

雲南市 松本 昌

マイペース追越し禁止後続車

人間はそんなものだと言者は言う

老妻の知恵押し売りを撃退す

日本食七草粥に教えられ

このままの姿で生きるマイペース

雲南市 松本 はるみ

肩の手は君の優しさ風の中

孫曾孫ときの流れのおもちや箱

まっすぐな道より曲がる道が好き

鳩が飛ぶ平和ばかりと言いきれず

見逃して次の負担が倍になる

岡山市 丹下 凱夫

歳晩のカラスはどこへ帰るのか
猫飼つてないのに猫が好きになる
虚栄心だけでは咲かぬ胡蝶蘭
記憶力たしかか呆けていないのか
マンシヨンの上に初日の出を拝む

岡山市 前田 恵美子

水仙を活けて正月花とする
院展も馴染みの画家ももういない
ペランダの干し芋味見イヌとする
車の音聞いて出迎え家の猫
畑まで歩いて会えた野菜たち

笠岡市 藤井 智史

黒ひげも飛んだ人生エピソード
痛覚を持った立派な生物だ
わたくしを独占できるもう大人
叱責の耐震強度日々上がる
底辺の意地と菌形をつけておく

岡山県 池田 たか子

孫嫁ぐ日までと願うスクワット
お見舞の軽い別れが悔やまれる
咲き誇る老梅苦節秘めている
前向きに暮らす手立てをさがす八十
新年の抱負やっぱりに描く

岡山県 高岡 茂子

ひらめきを葉袋にしるす朝
ケイタイも財布も鍵も首にかけ
下見かね友を見舞に行くホーム
ジーパンが振袖を着て父ウルル
自炊する孫に教える玉子焼

岡山県 田中 恵

今朝もまた踏ん張るための紅を引く
大声で田舎育ちの癖が出る
鬼瓦自慢話を聴かされる
言い訳は要らぬと月が言っている
迷ったら父の轍を踏みに行く

岡山県 紫 しめの

メール不信やっぱりに紙にハンコ押す
本当に大事なことは耳打ちで
寝てしまう歌会始の声長く
ライバルの賞は無かったことにする
つぶやきで世界も株も動かせる

岡山県 山縣 のぶ子

土壇場で嫁の甘酒温かった
情熱の塊なんだ雪だるま
追憶にひたる夜半のバイオリン
甘えん坊と言ってくれるも人情か
成人式母の簪さす晴れ着

広島市 岸 本 清

よく笑う家族に風邪は寄り付かず
冬の日光をたつぷり浴びてチャージする
書き初めは「カ舞吼」と決めて腕まくり
メールでの謝辞は絵文字でやわらげる
三世代楽しくもあり忍耐も

宇部市 平 田 実 男

なごやかに飲んで語れるクラス会
愛妻の杖心にも体にも
メガネ買い替えたら皺が増えていた
直筆のとは二度読む年賀状
味方より敵が多いほうに賭け

防府市 坂 本 加 代

日本のサイフは一つ国と県
父の血が濃く流れてる趣味ばかり
まだ分かる老母に顔を見せに行く
ししとうもストレス受けて辛くなる
引越して荷物断捨離ダイエット

東かがわ市 川 崎 ひかり

短いが情にあふれている祝詞
お祝詞が短くほっとする料理
燦燦と初日浴び建つ薫風碑
世界地図今日も亡夫と夢旅行
桜咲くただそれだけのメール待つ

松山市 栗 田 忠 士

自分の顔をまだ見たことがない自分
杵で搗く餅に昭和がまだ残る
一行が添えられている温かさ
如月の月に一声吠えようか
泥水も飲んで人間らしくなる

松山市 古 手 川 光

年末年始美空ひばりが飛んで来る
わたくしのことだ夏痩せ寒細り
一度メタボになってみたいと痩せ蛙
福は外言った覚えは無いけれど
多くの妻立派な左官塗装工

大洲市 中 居 善 信

茶と黒と主義も主張も持たぬ色
ややこしい物に大人の腹の芸
運不運当たり外れのあるジャンボ
まだ赤に執着のある傘寿です
物忘れ父さん覇気が無くなった

西予市 黒 田 茂 代

正確に脈しばらくは大丈夫
気が付けば自然に歳をとっている
ちよつとした齟齬から波長ずれてくる
能装束の誇り最高級の絹
シテの舞光らせるお囃子と謡

外国の平和を祈る初日の出

高知市 小澤 幸泉

太箸に孫の名前を書き加え

何処より妻七草を集めけり

雑踏にトランペットの社会鍋

山茶花のひとつ淋しいボクの庭

唐津市 坂本 蜂朗

二回目の三年日記手に傘寿

おぞましさをばかり湧き出てくる座禪

かけちがい互いに耐えて五十年

年金と込みで感謝をされている

またテロかだんだん慣れてくる恐怖

唐津市 山口 高明

注文書母にかかざる紀伊の梅

むしゃくしゃで人刺す短慮いて困る

揭示板貼られた美女は指名犯

責任を取らぬシャチハタ押す都庁

決断の時か晩餐招かれる

熊本市 杉野 羅天

トランプ指示へとアメリカのジレンマ

触れ合い一瞬一期一会の切なさよ

師の墓地在廢墟と化した震源地

お葬式お経ハモッて寝てしまひ

爪楊枝小指を立てた勘違い

御来光ガラス拭きふき立って待つ

自句唇受ける嬉しさこそばゆい

病院の梯それぞれ訳がある

県警から迷った財布受け取った

交通難午前の受講中止する

沖縄県 森山 文切

葬式へ向かう自動車道に霧

浴びるほど酒を飲んでも卑怯者

辱められたトマトのへたがある

週末は重たい蓋になっている

腰椎が主張してくる座談会

札幌市 小沢 淳

丸腰の外交握手と笑顔だけ

義理堅い台風不意を突く地震

昭和一桁無い知恵しほりしたたかに

四コーナー転んでならぬ歳になり

ご祝儀相場も七千万のマグロ

札幌市 三浦 強一

富士山も応援箱根路のドラマ

妻元氣今日も舌鋒冴えている

始末書の字を褒められたことがある

四コマ目ハッピーエンド模索する

幸福という幻影を追って老い

黒石市 相馬 一花

中東の血を血で洗う死の臭い
少女等に声掛けをする紳士像
男性は美女に特別気を遣う
いつ見ても微笑んでいる猫被り
眠っても美女の胸から離れない

弘前市 浅田 隆樹

「あ」が妻で「うん」が私の二人旅
七十がまだ若いよと言われてる
節酒する国庫にすまぬと思いつつ
厚化粧いつそお面をつけましよう
末期には冷たいビールか水よいか

弘前市 稲見 則彦

バッテリーが切れて思考も闇の中
花便り追伸にある国訛り
友の乗る列車は揺れる雪の中
クラス会おほほアハハで名前出ぬ
雪掻きと越冬隊を重ね見る

弘前市 岡本 花匠

どか雪の見舞もなくて七種粥
妻がいて安堵の暮らし人生譜
茶柱が立ち歓悦の散歩する
棒グラフわが本質を垣間見る
気が付けば師の句碑の雪溶けていた

弘前市 今 愁女

ブーチンが遅刻魔だとは知らなんだ
島返還 廃炉までには星になり
シクラメン外は白黒 冬景色
息の日課施設の母へ顔見せに
鏡餅子らの施設におしるこで

弘前市 須郷 井蛙

アリバイを監視カメラに見せておく
腹八分脳も八分にしておこう
今日誉める言葉を入れて家を出る
三分で出来る料理で寂しい日
筆筒預金即引き出せる安堵感

弘前市 高橋 洋子

歩数計健康寿命延伸中
晩学や電子辞書にも歯が立たぬ
しがらみも生きる糧だと受け止める
今が旬今が花だと遣る気出す
さくら咲く心の憂さを晴らすよに

弘前市 福士 慕情

十三年寝たきりの姉黄泉へ発つ
闘病を褒めてやりたいデスマスク
降りしきる雪は冥土の花吹雪
化粧した姉が微かに照れている
父母も姉弟も仏の座

第159回 大阪川柳の会

日時 4月4日(火)

午後1時開場 午後2時締切

会場 大阪市北区梅田 駅前第二ビル5階
大阪市立総合生涯学習センター
第一研修室

宿題 (各題2句)

「攻める」 渡辺 信也 選
「切る」 阪本きりり 選
「卵」 安土 理恵 選
「場所」 森中恵美子 選

席題なし

会費 1000円 欠席投句(切手82円5枚同封)

4月3日到着分まで 会員に限る

{会員募集} 年会費 1000円

会報を年6回 奇数月にお届けします。

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

本田 智彦 宛

絵馬の中に溶けて深くなる祈り
きつと来るお一人さまのシャボン玉
物凄い音たて大物が死んだ
そしてまた右脳左脳が立ち上がる
容赦なく進む後期の鳩時計
待ち入りの日に散髪の素浪人
満月と気づく師走の十四日
喪中はがき胃がん七十読み返す
風呂を出た裸の孫に抱きつかれ
家もない本籍地だが墓がある

(前月分) 堺市加島由一

青森県 松山芳生

久津抄

(つづき)

初詣で無病息災お祈りを

孫からの年賀メールを読み返す
はばたいて運氣取り込む全身で
襲名の歌舞伎三代神つて

沖縄県 禰

キヨ

古稀迎え白寿の坂を仰ぎ見る

沖縄県 島村 つばき

お年玉年端と共に価値を知り
返納で運転できずひきこもる

川柳の継続誓い雅号つけ

沖縄県 宮すみれ

信じてた内緒話が跳ね回る

時に晴れ時に曇って時に揺れ
時とまれあの顔仕草声聞けず
鏡餅どこから見てもああメタボ

(前月分) 岩国市 上村 夢香

筆を持つ別の自分が動き出す

きりきりと友の言葉は染みしてくる
はいということばの裏にある想い
毎日の積み重ねだというけれど

川柳塔の

川柳讃歌

(147)

上方芸能評論家 木津川 計

ゼロ番線から蝶一匹が発つ

松山 芳生

明らかに安西冬衛の「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った(詩「春」)」を踏まえ、別世界を描いて成功している。萩原朔太郎は「ちょうちょう」と読むな、「てふてふ」だと言った。古代「ちょう」は「てふ」だったから。芳生さんは蝶一匹の出立をゼロ番線に見たのだ。仮にも三番線だったら韃靼海峡を閤門海峡に置き換えるに等しく、詩は死ぬ。おどろおどろしい韃靼海峡をあえかなてふが渡るように孤立無援のゼロから蝶一匹が発つ。

無職とはこんな忙しいもののなのか

川端 一歩

志村喬一世一代の名演技が「生きる」だった。役所の無責任体制とことなかれ主義、何もしいないことが地位を守る最善策という今日に通じる欠陥を痛烈に風刺した黒沢明の傑作だった。主人公の市民課長は忙しそうに見えるが、

本当は何もせず時間をつぶしているだけ。無駄なお役所仕事の中で意欲や情熱を全くすり減らしてしまったのだ。一歩さんの元職もそんな所だったのでは。無職とはいえず、やる気が生かされるから一歩さんは忙しい。

新米に感謝して案山子にも礼

緒方 美津子

懐かしの唱歌「案山子」は差別の歌と言われた。歩けないのか「一本足の案山子」と歌い、弓矢で威して力んでも鳥にかあかと笑われる。「耳がないのか山田の案山子」が障害者を傷つけると。が、私たちを嘲っているのではないとの障害者側の声に差別談義は消えた。こういう談義が逆に差別を生産する。唱歌の案山子を僕は「ホメラレモセス／クニモサレズ」のデクノボーと思っていれば美津子さんに教えられた。案山子は新米の守り神だったのだ。

此所からが勝負泣きたい時笑う

中井 アキ

昨秋、僕は富士正晴記念館で講演した。演題を「泣く間があったら笑わんかいー大阪とはどういう都市か」としたのもかつて富士さんが「上方芸能」に書いてくれた題だったからだ。働き者の多い大阪は明るい。だから悲劇の多い文楽ははやらす、新喜劇に漫才や落語が栄えるという主旨だった。アキさんも勝

負に出たのだ。相手はここで泣くと踏んでいたのにアキさんが笑ったから驚いた。その胆力に敗退。おんな城主直虎が川柳塔にいる。腕組みを解いたら隙だらけの男

森山 盛桜

鹿兒島空港すぐ前の西郷公園で腕組みした隆盛の銅像を見た。太い腕、ぐっと睨んだ大きい目、正に偉丈夫である。腕はむき出しでも手の内は見えない。見えないのは高知は桂浜の坂本龍馬像でも、左手は袖の中に右手は懐に入れてから諸説が生まれた。短銃を握っている。万国公法を持っている。銭を数えている。腹を掻いている。腕組みを解き、手を見せたら、案外西郷も龍馬も隙だらけのチョロコイ可愛いもんよと盛桜さんは笑う。

一人より淋しいこともある二人

奥澤 洋次郎

庄野潤三の文壇デビュー作が「舞踏」だった。「夫は妻を愛し、妻も夫を愛しているが、それでも夫は一人きりの気楽な生活を夢想すること多く、妻はまたつねに故知らぬ孤独感に苦しんでいる」のだ。夫が19歳の娘に恋しているのを察した妻の苦しみと夫の脅え。亀裂の夫婦が繕おうとして巴里祭の夜、自宅でダンスをする。偽れる盛装である。夫婦の深淵を庄野潤三のように洋次郎さんも見つめる。

自選集

小島蘭幸

志功展の余韻とひとり珈琲と
情熱を志功の眼鏡からもらう
鷺栖図男は孤高だと思ふ
ふわりという良寛の書と志功の書
ここしかないところに押してある雅印

板尾岳人

熱燗でちびりちびりと飲む妖精
妖精とデートしたことありまんねん
妖精は六白金星射手座なり
妖精はバナナ踏んでも転ばない
妖精は千早赤阪村に居る

奥田みつ子

人様のやさしさ解る八十五
人様の有難さ知る八十五
自分のこと解らず八十五
世の中を何も知らずに八十五
川柳川柳言ってるうちに八十五

川上大輪

不満などないが爪まで伸びてくる
悪いこともしていないのに老いてくる
転ぶのは止めよう誰も見ていない
夢はもうパッチワークになっている
忘れ物取りに行きます去年まで

小西雄々

哲学書読むと頭痛がして困る
大山に登り書きたい絵を思う
三度目の離婚で人気でたスター
年わかく見えても白寿もう近い
久し振り都鹿はなれて皆生の湯

斉藤 劼

輪をつなぎつなぎ五輪という絆
飛びながら豊饒祈る津軽風
一輪車すいすい両の掌はつばさ
負け鶏の動悸を抱いている暮色
ポケットで腕きはじめた種袋

新家完司

霊園のように静かな僕の町
隣とは匂いが違う台所
終点が見えた貯金はもうやめた
翔び回る翼に孫がまといつく
情熱は尽きずまたもや片想い

津守柳伸

松竹梅活け本年も祈る幸
横文字で届くハッピーニューイヤー
初旅は姉妹のんびり車椅子
潮騒とぼんやり過去がよみがえる
鯛めしが本命三ヶ日にらむ

都倉求芽

初詣最短距離を選んでる
指と手はまだ動かせる年賀状
大声が続かず妻と妥協する
おぼつかない足タイルの継ぎ目にも
億劫にまた邪魔された好奇心

土橋螢

花いっぱい植えて寿命と根くらべ
長生きをしてもよいかと飯を食う
野垂れ死にするのにちょうどよい緑
年金をもらい徘徊癖がつく
寝たきりにならないようにドッコイショ

西出楓楽

家業継がぬ孫頼もしく悩ましい
もし亡夫居たらと思う冬の底
老いの坂段差も落とし穴もある
眠られぬ訳は枕のせいならず
運否天賦いつそ呆けたら楽なのに

仁部四郎

相談は来ぬが耳と目あけている
相談があればとも云う選挙カー
御婦人を入れての相談長丁場
相談はしてあるはずののし袋
床の間の隅の相談役のつもり

前たもつ

嫌なこと忘れて眠る8時間
明日のことわからないから予約する
町の真ん中余生移した妻の冴え
動ぜぬ物心に持っている強み
人間に神の仕業がわからない

三宅保州

ああ生きているなと思う年賀状
句会日は赤丸つけるカレンダー
楼門に額づく僧の白い息
日銀は今日もお札を刷っている
背負うものが増えて体力つきました

宮西弥生

老人になるまい葉はほどほどに
ロソクは誤算がなくてよく燃える
寝込んだら世間の風が遠くなる
少女期の写真わたしの若返り
たった一步退けばやさしくなる笑顔

両川洋々

声を上げねば徴兵制が目覚ます
コーヒーが冷めても離婚切り出せぬ
冤罪を神が見逃すから恐い
地鎮祭活断層の上らしい
意外や意外奴が豈の上で死ぬ

八木千代

過労にはお薦めします深呼吸
宇宙とも通える肺という器官
ふうーっと吐く私の冬をほぐすため
ゆうるりと息継ぎしようティータム
川渡るまでは寝息もしますの

予 告

第23回 川柳塔まつり

とき 平成29年10月7日(土)

ところ ホテル アウイーナ大阪

4階 金剛の間

森の句集



福壽草

麻生 葭乃

十七字我等の国語なるぞかし
福壽草松にしたがいそろかしこ
揚花火散った姿の曼珠沙華
お帰りにならず 刺身も色かわる
夕立ちは小気味よし 君が叱咤も
一生に自分の部屋というが欲し
浴槽へずらり立ったは皆わが子
男の世界覗く眼鏡はこちらです
揚雲雀 わが魂を持って行け
君の青私の青と違うなり
こおろぎよ私も蚊帳で起きている
十合 大丸 帯一本にくたびれる
野の百合を見よと予算のないくらし
まぼろしであつたか死んだ児の裸
墓に水かけに 海越え山を越え

(昭和三十年七月一日川柳雑誌社発行)

「もうこれ以上飲んできたら診ない。あと一年しかもたんやろ」と主治医。むらむらと反骨精神が湧く。

「そうか、あかんか。ほんだら、とことん飲んだる」

病名は、W P W 症候群。不整脈を伴う頻脈発作。心臓突然死の一因という。

亡くなった菅原文太と同じ年である。戦後の若い頃、パチンコをして、ジャンジャン街で毎日のように飲んでトラになった。三、四軒居酒屋のハシゴ。新世界花月でおもろない漫才を聞き「かえれ」。ストリップの特ダシに夢中になり、通天閣地下の将棋会所にへたりこみ、揚句の果、動物園のフラミンゴとラブラブになった。

「お前みたいなアホ、酒やめられへんわ」

また反骨が燃え上がる。「よっしゃ。ほんならやめたる」自分のためにやめるのに、やつぱりアホや。「川柳みたいな、あんなものに凝ってどないすんねん」

「あんなもんでなんや。あんなもんで。あんなもんやけど」反骨の鬼に化ける。

考えてどうにもならんことは、考えることにしてる。

「偏屈ぢやうん？」

家の近くのさびしい御陵に蝶々が飛ぶ。

美しう百年舞うや冬の蝶

専 平

温故知新

『たかすききゅう高杉鬼遊川柳句集』から

忠魂碑 父よあなたは強かった
スナックのめざしは美女で姿よし
まっ白いハンカチ妻がいてくれる
みの虫も考えながら生きている
またしても大きい声に妥協する
世の流れ踊る阿保になつてみる
夫婦茶碗の一つが欠けてどつと秋
木のほとけ石の仏もあたたかし
戦友よ遠い話はもうよそう
手に職をつける大きなべんと箱
低い屋根 妻とちいさな灯を守る
ヒロシマの雲を子孫へ語り継ぐ
朝刊を一番先に読む夜警
肩ぐるま父には父の愛があり
敗戦の日から明るい夜ばかり
今年来る数が気になる渡り鳥
たこやきで親子の絆たぐりよせ
自分史のゲラを柩の中で読む

水煙抄

西 出 楓 楽 選

沖繩県 高 良 秀 光

好奇心潜在力を呼び覚ます

そばにいる近くて見えぬ青い鳥

綺麗な字逢ってみたいなその人に

間に合うかポストへ走る締め切り日

ストレスは誰にでもある通りゃんせ

ありがとうその一言で踏んばれる

塩竈市 木 田 比呂朗

マル印日ごと増え出すカレンダー

万歩計意気込みだけは変わらない

球春の記事に早起きさせられる

腰痛に三寒四温言い聞かせ

偏頭痛原因だった締め切り日

胸張って今年も書けた申告書

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

陽だまりで八十路集えばまだ昭和

書道展よめないままで褒めてくる

プランターの花芽に元氣もらう朝

成るようになれと思えば気も軽い

飽食のつけか人情飢えてくる

水車舞うむかしの民話動き出す

ひらがなの子にひらがなで返事書く
箕面市 中 山 春 代

ポストまで引つ掛けて行くちゃんちゃんこ

レンタルの着物華やぐ二年坂

夕焼けに光る鉄棒廃校舎

朗読の足を引つ張る国訛

着ぶくれて十日戎の鈴を振る

倉吉市 大 羽 雄 大

夕べまで持てぬ起きがけの決心

すつきりとせぬ気にかかる夢を見る

始めてる古い活抽出しの整理

震度6のお陰ガラクタ始末する

手の平に乗って素直になつている

出していない人の賀状に迷いだす

尼崎市 永田紀恵

ガラケーとスマホで差でる同窓会

富士山に冠雪なくば只の山

晩節を全うできぬ恋病

穴あると覗きたくなるDNA

生き仏様の宴会通夜の席

同様に育てて来ても子に出る差

奈良市 森中博一

八十路では鍛えるよりも維持でよい

現状を維持するために筋トレだ

歩数計ついたケータイ離せない

終活の手始免許返納す

シルバーは百円引きと散髪屋

ひ孫抱く昔の孫と同じ顔

倉吉市 宮田風露

嬉しやな孫と過せた三ヶ日

新年だ背すじ伸ばして歩調とる

若水が薬と共に胃に届く

年賀状届いて友の顔並ぶ

有頂天ケータイ川ヘダイブした

屋根修理すっからかんの懐に

奈良市 高橋敬子

スクープ記事広告ほどの事書かず

中吊りのスクープに得る話すねた

忙しと世間に倣い言う師走

一番鶏時間ですよの初日の出

雪原に丹頂舞って水墨画

賛成派もはらはら見えてるトランプ氏

和歌山県 森下よりこ

食べたい物食べたい時に食べる幸

延命はいらぬと子等に言っておく

炊飯器にも高い安いがあるこの世

鳥社会では殺処分ですインフルは

たっぷり寝溜めましたお正月

豪華旅毎夜楽しむテレビです

伊丹市 延寿庵野鶴

人の機微しかとペン胼胝切ってくる

ドン底で揉まれ度量がでかくなる

もいだ手でキュウリを齧る至福時

ありがたい空気を吸って生きている

人間の裏まで見えぬレントゲン

走りながら考える見切り発車

川西市 日野岡和之

熱燭とひととき天下人となり

草に寝て宇宙のパワーひとり占め

騙されたままの幸せだつてある

生きているのは下手でいいんだ天の声

赤ちゃんも借金おんぶ予算案

どちらでもどうぞ直球変化球

横浜市 川 島 良 子

蹣いた過去を肥やしにする飛躍
胴上げも爽やか箱根三連覇
ひと仕事終えて大きく息を吐く
七合目あたりでしょうか今わたし
呆気なくリバウンドした三ヶ日

福井市 伊 藤 良 一

まあいいか眩き軽くする心
気がつけば父の病みたるところ病む
友達は良いもの年を取るほどに
健やかに越えて安堵の父の年
おむすびのゆるさに母の老いを知る

豊橋市 西 郷 紀美代

滑らかな空気となつて雨上がる
野の花を生けるセンスの暖かさ
カラオケに資本をかけた歌を聞く
休んでも疲れるのなら店開く
参つてゐる息子が見える嫁の口

豊橋市 藤 田 千 休

カナリアも唄いたくない変声期
たつぷりの脂肪で阻む寒気団
出会い系晩生の稲の世話をやく
紅白がもう欲しがらぬ歌唱力
義理チヨコに愛の欠片が見当らぬ

大阪市 高 杉 力

電気屋を呼ぶと調子が良い家電
予約後にさらにお得なバック旅
現地通貨慣れた頃には旅終り
居酒屋で記念日祝う仲になり
待ち合わせ今来たとこと言ってくれ

大阪市 田 中 ゆ み 子

ストレスと加齢で終わる聴診器
主夫力を試されている妻の風邪
元氣良くラジオ体操事始め
山眠る喜怒哀楽を説きふせて
正月が来た寅さんに会いにゆく

大阪市 柴 本 ば っ ち

その日暮してきた大阪すきでした
良かったね美人でなくて貧乏で
無理したなあ腰へ言うてるコルセット
風邪ですねん家族五人が玉子酒
風邪ひいて静かに寝てて肥えました

大阪市 梅 里 南 天

銀色の師走の街をふらふらと
トランプもシウもゲームの相手です
おやじさん怒る夢見て墓参り
蟹踊る鍋の底からNew Year
又寝して悪夢で起きて眠り損

大阪市 平井美智子

五枚組だった昔を語る皿

言い訳を添えてカレーが置いてある

Mサイズばかりだった福袋

おたふくのお面で隠す氏素姓

飴ちゃんを貰った 福がやって来た

大阪市 森廣子

雄鶏も権力で啼く縦社会

花束の奥に隠した軽い嘘

生きてさえ居れば明日を輝かす

雪の降るはるか遠くで亡母の声

天牛に思いもしない本がある

池田市 上山堅坊

失敗でようやく悟る自分の非

世界中手を繋ぎたいテロ封じ

二次会もあつて続いている句会

みんな敵みんな友達趣味の会

失言の後悔消えぬ床の中

池田市 太田省三

オレオレとマスクをはずすクラス会

靴音のきれいな人が付いて来る

女子会になつてもつづくクラス会

時差よりもテロが気になるハネムーン

かやぶきの屋根に外人ワンダフル

貝塚市 吉道あかね

穏やかに古稀の夫と初日の出

古稀迎え欲は健康だけになる

四十五年鶴戸神宮へフルムーン

日本丸で今宵私はシンデレラ

子や孫はないが船旅する至福

交野市 田岡九好

お誕生日日下ますますいいお顔

その日までをよく味わって生きてゆく

手の平もおいしいという湯呑かな

応仁の乱なる本を読み居たり

又吉の俳句鋭くわれを刺す

河内長野市 原熊知津子

カレンダー笑う予定で埋まつてゐる

永遠の少女になれたサ克蘭ポ

垣根越え雑草ゲリラ暴れだす

ピリオドを打てぬ二人の春続く

春よ来いシフォンの裾を揺らし待つ

河内長野市 森田旅人

お日様に朝のあいさつ薄化粧

新しい誓いを胸に屠蘇器拭く

小さい芽を見つける人のいて育つ

やき芋の香り昭和の路地にとけ

沈黙で解散ファンの声聞かず

堺市 梅木 澄空

高槻市 三谷 白黒

それからの場面を焦らすコマーションシャル
私の鎖骨メダカ二匹は飼えるかも
揉み手して見え見え謝罪じれつたい
振り込みに慌てて走る今日期限
酒進む彼女のしぐさ艶っぽい

堺市 小林 若芽

豊中市 上 出 修

美しく老いる素敵な言葉だが
奥の手も角も出さずに過ぎた日日
人間だないつも誰かと手をつなぐ
腐葉土になるまで落葉燃えている
過ぎ去った冒険だった夫婦船

堺市 近藤 治子

豊中市 貝塚 正子

ママの膝絵本それからそれからと
深呼吸おいしい空気まだ無料
すっきりとした部屋に居る三が日
剪定を終えた庭木がかしこまる
無料には引かれるけれど気をつける

堺市 羽田野 洋介

富田林市 小出 修三

歳重ね味わい深いお人柄
柄にもなく照れる姿が可愛嬌
口先と手先器用に使い分け
人数が減って存在価値が増え
気がつけば自分も古い仲間入り

可哀そう子の成績は親次第
捨てるもの一つ見つけて満足し
大掃除毎年手抜き増えていく
捨てられず時間がかかる大掃除
着る物と面の皮とが厚くなり
白寿までお取り置きする運とカネ
裏表どちらの顔でいきますか
ありのまま書くふりをする私小説
ブーチンの甘い言葉に首相酔う
懐にすきま風吹く年の暮れ
半分は自慢するよに謙遜す
エレベーター見知らぬ人と居る不安
助手席に乗る父さんは肩がこる
取説をじっくり読んでギブアップ
軽い風邪長居をされて迷惑な

これからは健気な妻にぶら下がる
厚化粧は見て見ぬ振りをする
友達と筋脳トレを競い合う
見守り隊のおじさんがいる登下校
肩の凝りエクササイズで治してる

寝屋川市 岡 本 勲

簾竹でわたしの未来見えますか
口先のテンポのよさがわざわいし
妻のスキ突いたつもりが倍返し
玄関でみんなの靴が笑つてゐる
来世も一緒とうたがわらない夫

箕面市 寺 井 柳 童

食卓に並ぶ御節は和洋中
和服着て背筋を伸ばす三ヶ日
福袋主婦のささいな投資です
ゆらゆらと火影おだやか和ろうそく
厚着より薄着で過す老いの意地

八尾市 前 田 紀 雄

錆付かず摩れ切れないで共白髪
薔薇と鬱未だ未だ書ける脳達者
多数決だんだん世間きな臭い
軍事費が増えて年金カットされ
中流が崩れ貧富の差が進む

大阪府 小 栢 こずえ

行つた気でテレビ楽しむ美術館
借り物の命大事に恩がえし
見る位置を変えると気づく今日の幸
捨てる神拾う神ある有難さ
十人十色同じ道は歩けない

大阪府 神 野 千恵子

おみくじに結婚運とある八十路
宝船貧乏神も乗り合わせ
断捨離でまずは捨てたいこの痛み
目指してる平均寿命また延びた
聞く耳と喋る口とは別ジャンル

大阪府 畑 中 節 子

新玉の平和を願う絵馬をかく
料理誉め器もほめて古都巡り
紅梅の花びら風に恋し舞う
牡丹雪喚声あげる孫二人
七草の粥ほのほのと箸すすむ

神戸市 玄 番 美恵子

もしかして恋の芽生えか優しい目
ショーウインドーしばしリッチな夢を見る
幼き日母の背で見た夢無限
踊りの輪意外な人と手をつなぐ
新しいページに夢をふくらます

神戸市 輿 水 弘

目と鼻の位置はどなたが決めたのか
いかついが心優しいつもりです
タマが居る单身赴任暖かい
ついてこい割り勘ならば行きません
嫁ぐ娘にいつでも帰って来い言えず

神戸市 近藤 勝正

三田市 谷口 修平

正月は子らの声する隣保にも
正月は孫ひざに乘せ屠蘇を酌む
夢を追う人でいたいな喜寿の春
追憶の地雷よけつつ枯葉道
散り敷いた枯葉に心とじ込める

尼崎市 清水 久美子

新年の決意が鈍る偏頭痛
夕暮れと夜明けが同じ貌で来る
電線に三つ編みをする鳶の蔓
ライバルの運勢しかとチェックする
寒の明けまで冬眠をするつもり

伊丹市 西川 富士雄

喜寿まぢか残る宝は減った友
空いた椅子探す自分が厭わしい
気がつけば五感すべてに診察券
あてにした妻のへそくり断られ
喜寿すぎてひたすら妻をたてる日々

篠山市 永井 かほる

何時とても睦まじやかな両陛下下
薬よりやさしい笑顔胃にとろり
菜園の生き生き野菜甘い味
食べて寝て正月三日もうあきた
亡夫の分今年も生きて年賀書く

金ピカが消えて深みを増す仏
出る杭も届かぬ杭も叩かれる
全力は学業よりもアルバイト
鰻井の座を脅かす鯰井
どっしりとしていないのが代理です

宝塚市 太田 としお

何があつても卑怯なことはいしたくない
日本に不足している政治力
本を読み歩行しましょう中高年
勉強は生きてるかぎり続けたい
感謝する気持思わず手を合わす

奈良市 尾畑 なを江

諦めて老眼鏡の世話になる
愚痴ひとつ分析してる風呂の中
カリカリと煎餅の音猫のエサ
年金日せめて好物ゲットする
拓植剪定男児の頭刈るように

和歌山市 北原 昭枝

それなりの楽しみがある冬日差し
この齢でちははの恩しみじみと
戻らない日を懐かしむ冬ごたつ
寒椿じつとたえてる花咲く日
ちぎれ雲会って別れる冬の空

和歌山市 平田 元三

した筈が増えて高齢自覚する
寄る年が冬の着衣を重くする
煙突がないのにサント来たようだ
別嬪が味よいわけでない苺
水仙の蕾を探す狭い庭

倉吉市 中村 毅

あれもこれも期待をさせる春を待つ
寒稽古見ている方も震え出し
人間も魚も疑似餌には弱い
駄伝のタスキ選手に喝を入れ
予知連に鯰採用しませんか

米子市 伊塚 美枝子

スマップと嵐くらいは知っていた
冬晴れにご近所さんの声はずむ
お年玉孫に与えて子にもらう
おせち食べ年の初めの太りぞめ
認知症予防に唄う下手な歌

米子市 野川 宣子

喉鍛え一番どりが出番待つ
とりがらになってもエキス絞られる
老いの身のため息ふえる年はじめ
老いの影そろりそろりと私にも
これからは老いと上手に向き合おう

米子市 見山 温子

気忙しく口では騒ぎ動かない
霜柱ザクザク崩すウォーキング
口答えしては悔恨床の中
今日はみぞれ気兼ねなくする炬燵番
悪い事いい事あつて暮れる年

鳥取県 児玉 規雄

来て欲しく無い誕生日高齢者
古稀という言葉その内死語になる
優先席譲られ気付く己が年
自分から年は名乗らぬこととする
あと何駅終着駅は分らない

鳥取県 橋谷 静江

新しい年へ明るく動きだす
ここに居るだけで重石になる夫
返事して立ち上がるまで時間要る
身長も縮み洗濯干し辛い
老犬と老夫婦での一族

鳥取県 橋本 整

孫娘からの卒寿祝は松葉蟹
ふるりの空が心をなごませる
口下手な人だが強い芯がある
肩の荷を息子に譲り美味い酒
足腰に老いがつれる赤信号

松江市 中筋弘充

人生いろいろ島倉さんの言うとおり

試着室の鏡上手に服を売る

誇大広告の疑いがある美人の湯

紅白にサブちゃんが出ぬ寝てしまおう

とりあえず遺憾なことと言う首長

瀬戸内市 東 榎 ますみ

鍵穴をするりと抜けていく時間

引くすべも覚えて友の輪に溶ける

ルンルンと春へくり出すスニーカー

ドッコイショさあ一日が動きだす

古本の葉の位置が気にかかる

広島市 松尾 信彦

気紛れと我儘放つ一人旅

駅裏は愚痴の花咲く秘密基地

相槌が知ったかぶりを煽りたて

挫折から増えたる友の絆かな

父の背が役に立たないデジタル化

尾道市 小畑 宣之

張り合えば思わぬ力湧いてくる

緊張の時こそ笑顔ゆとり湧く

待ちかねし冬至明日から日が伸びる

捨てがたし昨年の佳きカレンダー

お互いに傷を舐め合う忘年会

竹原市 土井 輝恵

後手のボタンが無理と言っている

倦怠期何故か夫の風邪貰う

挨拶の次は痛いとのこと話

この腕に曾孫抱くまで脚で立つ

寝たきりもありがとうだけ言える幸

三原市 鴨田 昭紀

しがらみが取れぬわたしは日本人

寅さんの顔も並んでいる露店

ポロポロと喧嘩相手が欠けていく

年金に縋って息をする余生

ふる里が丸ごと並ぶ道の駅

三原市 笹重 耕三

爺ちゃんも付いてゆきたいお年玉

歳などはどうでもいいと言うお歳

本年もよろしく等と書く日記

オレオレと言って無心にくる息子

縁側が好きでお喋りまで好きで

三次市 伊藤 寿子

末期ガン姉を見守るだけの我

神よ仏よ姉が悪事をしましたか

お義兄さん迎えに来てと姉を看る

義兄さんの命日姉は息を止め

あの姉にして妹がここに居る

山口市 青木 隆子

千両が今年も床の間で笑う
気まぐれな天気家計を締めつける
だんだんと身丈に合った願い事
幸せも八分位が丁度いい
物忘れ脳にあげたい顔の皺

山口市 中前 幸子

百態の風に甘えて惰眠する
騙し絵の中で楽しい迷い道
夜の香水は魔性の匂いする
花びら占い少女のようにときめいて
まほろしだった電飾の街明かり

松山市 神野 きつこ

鶏鳴に大志を抱く初日の出
パソコンが応答なしとよく拗ねる
成人の日ゆとり世代に雨が降り
産み育て母も一皮剥けました
寒波襲来星を見上げて露天風呂

松山市 柳田 かおる

濃い記憶にみんな貧乏だった頃
人生の一コマあれが土台かも
マスクして今日はすこうし人嫌い
体力と気力に誤差がありました
想定外に対処できないのは事実

西予市 西田 美恵子

仏も神もみんな大好き祭り好き
干涸びた恋はお湯に漬けても戻らない
鑑定に私を出してみてごらん
スパイスで居ようあなたを引き立てて
仕舞風呂ゆつくり今日の灰汁を抜く

福岡県 本田 さくら

日本晴どこかで戦あろうとは
タマは良い毛皮一枚着たままで
近頃のテレビまずいと夫嘆く
老い二人孫が帰ってホッとお茶
病んだタマ食べておくれと背なをなで

唐津市 岩崎 實

虚しさが元気をみんな吸ったのか
差し向かい和尚の箸の早きこと
聞きとれぬ言葉うなずくことにする
妻残すのこらず金は嫁かぬ娘へ
自分の字何を書いたか読めぬまま

佐賀県 真島 久美子

淋しさがまた発火した鎮火した
どっちでもいいよ天秤持つてない
ポケットの底には放棄した権利
罪全部預けて楽に生きなさい
笑い声聞こえる姉ちゃんの迷路

那覇市 前川 真

過ちを時折り責める影法師
取りあえずここに居ますと立ち泳ぎ
ポケットの本音と嘘を選り分ける
葉箸であなたの嘘を掴み取る
鍵の鈴僕の歩みの背中押す

沖縄県 島尻 卓

恐い世だお互いさまが死語になる
オーバーなお世辞に腹が立ってきた
客ボツリこれが並んだ店なのか
並ぶこと出来ない彼が出世した
迫り来る老老介護覚悟決め

シドニー 坂上 のり子

満天の星それぞれにある命
宇宙への夢を追うより先ず地球
米口中物騒な世に進みそう
お徳用めつたに使い切れもせず
親の庇護抜けて旅するヨーロッパ

札幌市 斉藤 宏子

クリムトのようなカップル平和な世
バラの花独りで祝う誕生日
下駄の音昭和の香り散歩道
骨休め昼寝明日へのエネルギー
泣き声で幸を振りまく新生児

札幌市 富永 恵子

再会にドラマ顔出すいい仲間
雪の嵩北国魂汗に濡れ
ボブ・ディラン一節だけの君に問う
廃止線決まってからの旅支度
迷わないゆっくり休養明日のため

男鹿市 伊藤 のぶよし

無駄だらか賽銭箱に聞かす音
絶頂も想定外もひとつ貌
アドリブのひとり芝居はお手のもの
何処までが私スツキリしない胸
頑な蕾も咲かす花図鑑

松戸市 山下 明子

真白なるスケジュールでも心満ち
曲り屋の白馬愛しく遠野たび
当選です振り込め詐欺のアラカルト
冬將軍吐く息白く身はかたく
初麻雀孫子と過ごすお正月

八王子市 川名 洋子

焦る程分からなくなる目的地
泣いた跡見せぬ女の愛おしい
逢えそうで遠回りする散歩道
振り向いて欲しくて少し拗ねてみる
笑う顔練習してもすぐ忘れ

弘前市 高森一吞

まず賀状みてから年始始め
年賀状友のくせ字で顔が見え
元気です年に一度のご挨拶
柳友の年賀の一句生きている

白河市 鈴木たけし

万歩計連れて五七五を拾う
一月四日どつと車が溢れ出る
残葉と曜日が合っていて安堵
ライバルにばったり残り火が燃える

上尾市 中村伸子

はつはるとしよしゅん漢字は同じでも
すみませんテレビ画面で初日の出
テレビ体操呼吸止めずにするのです
花いちもんめ取り残された子の心

東京都 高岡弥生

毎年のおせち料理も飽きてくる
ドキドキのスターウォーズを待ちわびる
救急車ビポビポ子供大騒ぎ
幼稚園サントも鬼も同じ人

横浜市 巖田かず枝

お代わりの声が嬉しいお味噌汁
煮豆なら若い人には負けません
子等が来てワクワクはつとがっくりと
大勢で食べればそれがご馳走に

佐渡市 高野不二

利子の高い銀行聞いてバスで行く
血糖血圧丁度いいものはない
只の出血のつもりで受診する
ガンですとあっさり言われ眠られず

静岡市 渡辺芳子

雪衣ピンクに染めて明ける富士
認めたくないけど末期高齢者
スローしか歩けぬ足にご苦労さん
ちよつとした風邪も笑顔で居坐つて

沼津市 鳥沢無午

人生を編集すれば三時間
抱き合つて一本の樹になる二人
百均で売つていそうなバラエティー
家族つていいねすき焼食べられる

江南市 脇田雅美

物置で猫が五匹も子ども産む
渡り鳥病を連れて飛んで来る
お互いに耐えたと思う夫婦仲
蓋乗せて剥いた里芋煮炊きする

鈴鹿市 小河柳女

災害時多分うろろするだろう
霧が立ついやな話を聞く時に
味噌田楽食べる昔のうす明かり
おいしいものあふれ虚ろな世の中に

大阪市 磯島 福貴子

優先席立つ人無視のスマホ族
三代目同時襲名高麗屋
レンジの中一晩寝てたお惣菜
朝一番口角上げて笑み作る

大阪市 横山里子

人見る目あると思つた身の不覚
金あれば揉めずに済んだわだかまり
嫁ぐ気のない娘と二人飾る雛
今年喜寿生き恥なんて気にしない

大阪府 高木 道子

泉大津市 助川 和美

古寺のナンジャモンジャに陽が差した
大吟醸ワイングラスも手懐ける
私め改めまして准高齢者
食欲にストップ辞さぬ腹時計

大阪市 前川 善之

河内長野市 中島 一彌

初詣で頼む賽銭五円玉
国債を増やして減らす知恵がない
今年の運有馬記念をゲットする
美人でも年を取つたらおばあさん

大阪市 松田 聰

河内長野市 穂口 正子

他人事と思つてないか車事故
病にうち勝つた友達いい笑顔
葉ボタンを飾るゆとりに福が来る
墜落を不時着とよぶオスプレイ

大阪市 宮村 満寿恵

岸和田市 宮野 みつ江

西どしはまめにバタバタ良くうごく
遺産なく揉め事もなく和を保つ
コマーシャルなればトイレに行く不思議
鮎と鞭使い分けてる母の愛

乾ききりカサカサ音のする心
一口の清水浮かれた心臓へ
故郷の水よ今でも優しいか
湯上りの体を巡るコップ水

堺市 松永庄三

影だけが黙って俺について来る
手遅れと言われ神さま仏さま
晴天に傘持つて出る杖代わり
小児科はアンパンマンを膝に置き

堺市 大和峯二

子や孫に贈れるものは笑顔です
いい電話心ぬくもり元気得る
聞く力發揮していく生きていく
友人の死でめぐらせる我が余生

豊中市 荒木郁子

年の瀬は妻が指揮棒振り回す
末っ子の甘え上手は得意技
流行に敏感すでに花粉症
暖かい陽射し心もふわふわに

豊中市 荒巻夢

わたしの鼻が納得しないトランプ氏
電飾をきれいきれいと能天気
あんこ好き親子の証明無事果たし
ラッパ吹くように水呑む白い喉

豊中市 源田啓生

新しい羽根が生えたぞ飛び立てる
この生の為に爪髪日々新た
痛い夜は背中丸めて眠るだけ
今年こそ心の脱皮遂げたいな

羽曳野市 磯本洋一

地震国それでもやりか再稼働
地酒飲む孫の手酌で至福時
帰省する祖母のお節を舌が乞い
ソプラノを聞いているみたい妻の愚痴

羽曳野市 仲谷真一

正月に家計簿をつけ始めたが
今年こそ同人となり精進す
春場所のチケット予約取りました
健康でこの一年を過ごしたい

羽曳野市 安本美喜

新春のエプロンスリッパ皆あらた
孫とハグ元気に居てねおばあちゃん
飛行雲上を見上げて歩こうよ
戎さん特選狙う句作練る

枚方市 坂本ミヨノ

重詰の七色五色母偲ぶ
晴着娘大輪の花笑顔よし
神参り綺麗な巫女に見惚れてる
初日の出時つげてエト駆けて行く

枚方市 山口弘委智

初絵馬の願い大きく重たそう
背伸びして画いた夢はすぐはがれ
鏡には映らぬころもてあます
アフターは愚痴ふところに縄のれん

八尾市 田 邊 浩 三

加西市 山 端 なつみ

自由ってこんなに不便妻旅行

のんびりとしておれないぞ年金者

待たすのも待つのも嫌い江戸っ子だ

欲しかったゆとり手を焼く定年後

八尾市 山 川 寧

新年会また同じ人愛燦燦

初個展同窓会か飲み会か

高級なお菓子大袈裟な包装

憎まれる覚えもないのに無視される

大阪府 木 藤 こみつ

来訪者とくれないけどお正月

ひとりぼっちの私にもくるお正月

仲間うちヒソヒソ言うて感じ悪

福袋に福があるとは限らない

尼崎市 藤 田 雪 菜

忘れない味古里の水の味

初日の出今年も山で手を合わす

認知症くい止めようとガムを噛み

コーラスの腕はソフトな自然体

伊丹市 平 井 富 夫

慣習としきたりなんぞいつ出来た

酔ったふりいハグする時は若い方

毎日が妻との暮らし修行です

ラブコール昔毛筆今メール

久々に賀状を出せる幸を知る

餅腹で体重計が踊り出す

乍ら族そのまま主婦をこなしてる

ツイッターでアメとムチふるトランプ氏

篠山市 長 澤 喜 弘

ラジオ聴く一人手酌で深々と

戸籍追う遠い先祖に思い馳せ

遺産争いできる近所が妬ましい

電車乗り途端にスマホ依存症

篠山市 長谷川 善 輔

老いすすみ時も加速し過ぎてゆく

鏡台が映す妻なく淋しげに

脳みそがスマホ頼みでスカスカに

外交は笑顔の裏を読む作業

篠山市 藤 井 美智子

年の暮れ黒豆うまく炊きあがる

遅れてる賀状の友が気にかかる

おだやかに無病息災望む春

につこりマークいつも心に持ち合わす

三田市 幸 田 厚 子

君の名は祖母は熱弁真知子まき

遊びまで妻は口出しプロデュース

あああれも今年だったか流行語

すっぴんで囲む家族のおでん鍋

三田市 宗 福 清 司

禁煙二年どっしり座せば吸いたなる

栄養価満点でなく五分で良い

やってみたい滝に打たれて五七五

自分との戦いでした古希過ぎは

三田市 辻 開 子

古希迎え仲良く暮らす術覚え

転ぶたび四角三角角とれる

回覧板自治会ニュース知らせ役

三が日過ぎたお餅がたいこ腹

三田市 東 内 美智子

髪の毛で縫い針しごき母に似て

磨いたら光りそうだなこの子なら

まいどで入りまいどで帰る得意先

すべらない砂送ったが返事こぬ

三田市 馬 場 貴美江

議員さんカジノ解禁なぜ急ぐ

クリスマス光溢れる街通り

また一葉友の旅立ち知る師走

紅白のテレビ見ながら夢をみる

三田市 松 本 ゆかり

どないだすさっぱりですわと口合わす

柚子の香に天女になってお湯の中

クリぼっちケーキ一つと老婆買う

クリぼっちあんぐりチキンにかぶりつく

宝塚市 丸 山 孔 一

大雪山熊も夢見る雪の中

オバチャンはプールの隅で座談会

さつま芋焼いてバターで昼の飯

地の底がどうなってるか見てみたい

西宮市 福 田 正 彦

輝く日プラス思考が弾けてる

笑い合いストレス消して明日の糧

日の本のほこりを胸におもてなし

地球儀に平和を祈り回し見る

三木市 山 口 久 子

昼寝して夜はこたつでねこ相手

九十われ家族の助け感謝する

秋夜長ビデオの番を楽しんで

戦時中モンベ姿がなつかしい

和歌山市 倉 橋 悦 子

お堀端春が目覚めてねこやなぎ

乾燥に夜来の雨の助け舟

決断の我を見守る福の神

柴又にまだアナログの寅さんが

和歌山市 鍋 嶋 澄 子

紅梅の梢で語る夫婦もず

あたたかさ庭を彩る山茶花よ

大根の旨さがわかるお年頃

コンサート若さのシャワー浴び嬉し

岩出市 村中悦男

倉吉市 岡崎美知江

冗談も交えて楽し共白髪
医師のことば薬いらぬ程に効き
痛み止め効くまで時の長いこと
肅々と青い地球へ初日の出

鳥取市 大前安子

若菜摘みやがて少女に戻りつつ
難関をくぐり抜けよと絵馬結ぶ
とにかくもオープンドアよ酉年へ
お年玉よろこぶ顔を浮かべては

鳥取市 奥田由美

卒寿だと恩師がくれた賀状拒否
おめでとうと積もる話の電話代
杖頼り歩みつづける介護靴
梳き髪の白さが我の老い語る

鳥取市 高原かおる

老いた眼が段だん本を遠くする
段ちがいはめた釦に気がつかぬ
母親の愛を知らない子は背く
立前と本音の違う人が居る

鳥取市 津村律子

ご褒美か仕事始めに一円拾う
お正月数の子いらぬ老夫婦
ライバルが助走の風を押してくれ
慎重に後期高齢免許証

やさしさにひやひや心こぼれそう
ごめんねがきつかけ絆深くなる
この家で生きているしかないひとり
あなたへの気持ばかりが焦りだす

倉吉市 田中紀美恵

末長く御神酒德利子だくさん
風呂の栓すつかり忘れ裸んぼ
登山道湧き水吞んでレッツゴー
肩書きが一つ減るたび友が去る

倉吉市 田中けいこ

小さい口御苦労かける歯医者さん
こんにちは散らかっている靴元気
立ちあがりちよつとよたよたやはり歳
原発に想定外は許されぬ

倉吉市 堀かずこ

初日の出夢を追います今年こそ
生きていりや色いろあるが負けません
くよくよと考えるより笑顔だよ
健康を年の始めに誓いたて

境港市 中井虎尾

下手な字も白筆個性の年賀状
昭和の子今平成のおじいさん
君の名は春樹真知子と思う古い
トランプが一言言えば世界ゆれ

米子市 生田和之
いそいそと妻が乗り込むデイのバス
車間距離しっかり取って後期行く

鼻風邪を引いて三日も炬燵番
根葉に泥を残すも売らんかな

米子市 川本美津子

のら猫とお見合してる春日和
飛行機の音が気になる日曜日
川柳の蕾が固く花咲かず
集まれば終活の事話す年

米子市 田村周子

生きてれば何かしなくちゃ身がもたぬ
正月もあつという間に過ぎ去った
寒の入りやはり寒さが違ってる
シクラメン咲いて新春華やかに

米子市 永井三津子

人生を亀の歩みで生きている
脛かじり今は骨までしゃぶりだす
この拳涙の雨を幾度吸う
万華鏡覗く向こうに夢を見る

鳥取県 飯野菖子

悔しさを朝の光に跳ね返す
人形が罪もないのに箱の中
地球から戦をやめて丸くなれ
なぜ急ぐまたあの友が天国へ

鳥取県 門村幸子

鳥取弁愛すされどもチトダサイ
朝夕に仏と会話して静か
今年また縁が切れずに歯科医院
ふいに来る腓返りに小さく耐え

鳥取県 下田茂登子

頼りないワラ一本に縋りつく
自由になって自由になれぬ一人者
癒しとはビール一本飲んで寝る
その先は見えております八十余歳

松江市 相見柳歩

スポーツに夢中こころの壁溶ける
松山と松江ごっちゃにしないでね
アメーバがルーツなのかよ進化論
白い服ミートソースが欲しくなり

松江市 山根邦代

今日もまた元気をもらう日の光
年賀にはそれぞれの愛添えてある
ごまの粒入れ菌くすぐるいけず好き
ふる里の自慢が出来る嬉しい日

出雲市 黒目英男

生きている自分自身と対峙して
才能が道を拓いて花が咲く
晩成のこれから向かう大勝負
今年こそ夢が羽ばたくいい年に

安来市 原 煩惱児

空元氣でも米寿の力瘤
退院の夢あれこれとその続き
数の子で人口増という日本
幸福感孫が来ているその間

瀬戸内市 片 島 秀 月

老いて尚咲いて見せたい句の花を
我が家ではタクト振るのは俺が役
運命と思い女房の介護する
不便だろ田舎暮らしは子が訪ね

玉野市 片 岡 富 子

初日の出今年も無事にやって来た
ユニクロで夫のセンス上昇中
酉年に鴨を見る目が柔らかい
週二日鍋よ鍋よと湯気上がる

竹原市 六 田 半 徳

しだれ梅メジロ二羽来て下見する
寒アヤメ今年の開花何時だろう
赤ヘルの六新人のキャンプ入り
ゆつくりと氷が溶ける時を待つ

府中市 岸 田 武

何回も盃上げて互礼会
元日をしずかに老いとにらめっこ
信ずべき道を進めと初みくじ
マスクしておらずマスクに囲まれて

府中市 田 辺 和 子

包丁を持てば機嫌のよい夫
冬囲い隙間の多い家ゆえに
いつよりか長生きすると決めている
考えるよりも動けと人は言う

広島県 日 谷 寛

美しいわなだどこにも棘がない
美しい影だどこにも無駄がない
美しい嘘だどこにも罪がない
美しい夢だどこにも法螺がない

宇部市 高 山 清 子

老い独り生きるよすがの句をひねる
ありのままだから好かれる嫌われる
毒舌の先に弱気の虫がいる
同窓会最後は軍歌戦中派

下松市 有 海 静 枝

凹んでも再生機能付きココロ
海渡る光の帯に邪が消える
海鳥が飛び立つまでの忍び足
潮騒が脳内清掃中と言う

松山市 郷 田 み や

寂しさが紛れるように吊るし柿
リハールしたはずなのに笑えない
皆勤賞休みたい日もあったはず
縄飛びが呼んでいるのに入れない

松山市 近藤修二

雲の切れ間陽光注ぎ虹を見る
角刈りをしている様な神社の木
曇りのち晴れ善行重ね歳を取る
ことわざも若者たちに死語となる

今治市 渡邊伊津志

ひび割れた鏡餅から春覗く
角取って丸く生きよう鏡餅
福寿草ほのかに春を醸し出す
舟虫が散れば波音高まりぬ

大洲市 花岡順子

約束を丸く忘れてくれる妻
まだ固い蕾が秘密抱いている
立ち位置がまだ決まらない舞台裏
ゴミ箱が消えて公園ゴミが減り

高知市 三谷松太郎

追善にあの人もおり春はすぐ
老木も気持若木のままでの影
同窓の住職も老い皆で喝
七十五 仕切りなおして初老なり

北九州市 小松紀子

今日不調でも明日は頑張れる
婆ちゃんは会計する人ご馳走さま
アナタに言われたくないは腹の虫
私にも希望の朝はやって来た

山鹿市 中山好汰

箱根路を母校背おい力走す
Uターン心はいつも故郷に
おだやかで心豊かに一年を
初もうで皆幸あれと願をかけ

山鹿市 前田幸子

門札が息子に変わり安堵する
ゆず風呂でそーっと口ビル寄せてみる
昔はと口説いて子等に返される
白髪が並んで笑うデイサービス

山鹿市 柳田白沙

主婦業も卒業式があればいい
あたり前その常識が想定外
いい人生棺の蓋が物語る
しっこ出来た得意げの孫一大事

佐賀市 清水園實

正月も息子買い出しパーベキュー
七草をゆでてかゆ入れひとり朝
寒に入り電気毛布の世話になり
ボケ防止パズルならべて解く傘寿

沖縄県 あらさくら

名を馳せたガキ大将も社長の座
ごめんねとしおれた花に水をやる
荒海に耐えたおかげで今がある
ふしくれの手が物語る母強し

(禱) キヨさん、島村つばきさん、宮すみれさん、上村夢香さんの句は44頁にあります

新川柳鑑賞

(61)

麻生 路郎

教室の窓へ小使さんの猫

(不二)

教室の窓へチョコナンと猫が座つて日向ぼっこをしている。漱石の猫は屏伝いに、よくあちこちへ出かけて、いろんな観察を報告してるが、この猫は教室の窓へ来ていることを思うと、ひそかに教師の勤務評定をしているのかも知れない。

檻の鶴又眼を閉するほかはなし

(薫風子)

檻の鶴を覗てのスケッチの句である。こうして檻の中に閉じこめられてはどうしようもないという気持が、又してもかんねんの眼をジッと閉じるのである。この句作者が、自分の境遇に比較して見て、檻の中の鶴に同情するというよりも、むしろ自分を憐れんだという諷刺の句と見るところにいのちがあると言えよう。

飛んでも飛んでも鴉夕日に追つつけず

(野甫)

単に自然を詠んだというのでなく、何かを諷した句としてうけとれる。鴉は作者自身なのであろう。鴉が夕日を追うていると観ずるのも、作者の主観に外ならない。人生の果を思わされる静かな句である。

動物園みな就職をしてるなり

(山雨楼)

動物園の動物は入場料を稼いでいる。その意味から言えば、みんな就職をしていると言えるだろう。それなのに、自分は今、職を失っていると思うと、淋しい感情が身内を流れない訳に行かなかったのであるという句のウラを観ねばならない。

冬陽背に鰐一耗も動かさる

(七面山)

冬のにぶい陽を背にうけて鰐はビリ動きもしない。別に死んでる訳ではない。動物園を訪れた人も、佇立したままジッと鰐を眺めて動こうともしない。鰐からうける淋びしさを噛みしめているのであるう。

近づけば山羊はゆっくりり道をあけ

(水客)

田園風景のスケッチである。実感でなければ、こんなにも、静かな、ゆとりのある句は生まれるものではない。

作者の詩情の豊かさがおもわれる。

なめくじがモダンアートの線をかき

(どんたく)

なめくじが這い廻ったあとの、ギンギン光ってる線の美しさはモダンアートの線を佇立させるに充分であらう。なめくじは時にモダンアートそのものの線を描くからである。

巻物の様に秋刀魚を猫くわえ

(花村)

写生句であらう。猫がサンマをくわえたところは、たしかに巻物をくわえたように猫好きでなくても、なんだか、ほほえましい情景である。

勝手口猫が来犬が来鼠が来

(義風)

勝手口風景をこういう角度から詠んだのは珍しい。どことなく地方の素封家のゆつたりとした勝手口を思わさせられる。

この句は単なる猫や犬や鼠の写生句ではなく、勝手口から出入するいろんな人物を猫や犬や鼠に擬人化した諷刺句である。ジャック・ロンドンが野生の狼の生活を藉りて社会主義を諷したように、猫のような犬のような鼠のような人間の出入りを描出したところにこの句の面白さがある。

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

ここでまた 税吏 女将にとぼけられ
正直へ税吏が助言してくれる
追いつちをかけるは 金のことらしい
でぼちんを叩いて金を借りて去に
金貯める主義には少し若過ぎる
税金を甘く見ている人に会い
埃っぽい男 あれあれ 立候補
名を挙げてからはちよくちよく帰郷する
知恵の輪を抜くよう汚職無罪なり
力士 いま 自分の汗の上に這い
真人間だったばかりに 死を選び
逆臣といわれし人と同じ紋
前身を知る朋輩を寄せつけず
近道を本人だけがしたつもり

つっ立ったままで物言う弟子になり
道遠し 師弟二人つきりとなり
施設の子盛り切り飯のほか知らず
参観日 この秀才の親が来ず
鶏も飼うてる島の測候所
この島も 情話を抱いて寝しずまり
故郷を出た日もこんな雲が浮き
その頃の市電 乗換券があり
新聞小説 仲居が先に目を通し
仏様 青いバナナを供えとき
別荘は犬小屋だけが焼け残り
ステッキの先でくらはげは突つかれる
松毬を拾うて楽し 山の燭
帯きゅつと鳴るも嬉しい見合の日
煎餅を割って食べるも見合の日
何もせぬのがヨット部に籍を置き

俳風柳多留一二篇研究 45

小栗 清吾・細井 龍夫

伊吹 和男・山田 昭夫

石川 道子

清 博 美

367 鍵がせつかん針が出てとりさへる

小栗 取り支えるは、争いなどを、とめる。
しずめなだめる（「江」）。

遊里句。鍵は遣り手、針はお針のこと。遣り手が新造などを折檻していると、見かねたお針が出てきてなだめるという光景を、「鍵」と「針」の対照で詠んだ所が手柄。

身にしみやよさとお針ハ縄をとき 九 38
御針さん御はりさあんとむこひ事

安四仁 3

細井 面白い句です。小さな針が大きな槍を制するとは。

清 賛。

368 木綿つり京だんをいふいらぬ事

小栗 京談は、京ことば。京都弁（「江」）。

江戸の高級呉服店の従業員は基本的に上出身者だったから、話す言葉も京談であり、それが高級店の象徴にもなっていた。

番頭が江戸言葉でハげびるなり 一三 16
主題句の「木綿売り」は、いわゆる「高荷の木綿売り」と呼ばれた行商のことであろう。そういう零細な商売人が京言葉を使うのは、

上等品とのイメージを出そうとしているのかもしれないが、何とも似合わぬ無用な事だといふのである。

木めんうりどうじやわいなハいらぬ事

安八礼 5

清 賛。

369 おかしさハ夫婦けんくわを狎がほへ

小栗 夫婦喧嘩の傍で狎が吠えているのが可笑しいというのであるが、なぜおかしいのかよくわからない。ふだんと違う雰囲気を感じ取って吠えているのが、何となく可笑しい光景だねというだけの句か。あるいは「夫婦喧嘩は犬も食わない」という諺を踏まえて、吠えるところを見ると狎も一人前の犬のつもりかい、と可笑しがついているということか。

昼間する処を見付て狎が吼へ 蓼 26

伊吹 後説に賛。無視する筈の犬が参加している。

山田 引用句と同様の場面ではないだろう

か。

清 礎稿後半というところでしょう。

370 こわいもの見たし生酔嬢のぞき

細井 生酔が大声を挙げたりしているのを、「こわいもの見たさ」で嫁はこわごとと物陰からぞつと覗いている。

こわひもの見たし万歳嫁のぞき 安五福引
こわひもの見たし持参をのぞくなり

天六 12 5

こわひもの見たし先妻口によせ

天五 信 4

伊吹 賛。家に来た客が酔ってしまったのだろうか。

山田 賛。成語を使ったまでの句。
清 賛。

371 女さかしくてもみちもつれぬなり

細井 利口な女房にはすっかり見抜かれてしまっているので、遊所へ行くのに紅葉見物と言っても、もうそんな口実は通用しない。「女賢しくて牛売り損なう」という諺の援用である。

女さかしくてもみちうりそこない 一四二
もみちとハ古句と女房でんにせず 一八四
清 賛。

372 のびをするそばを通るとかまへる

細井 腰元か小姓が側を通りかかると、わざと伸びをしてバツと袖をつかんだりする、殿様毎度のおふざけ。老人が孫を、あるいは、若い男女の戯れとも。

のびをする手にこし元ハついと迹 初31
のひをする手をかんさしてつつ、かれ 宝13 智4
のびをした手で空中をひん握り 七五31

伊吹 賛。状況は様々。

山田 賛。伸びをして上げた手を下げるタイミングになる。

小栗 賛。限定しない方がいい。
清 同右。

373 二十けん茶代をやると不人シそう

細井 浅草寺境内の水茶屋を二十軒茶屋というが、そこには美人の茶汲女を見当てに寄つて来る客も多く居た。茶屋女たちは客が代金を払うまでは愛想よくしているが、心付け無しで茶代だけを置こうものなら、渋い顔をする。

あひそこのい、ハ茶代をやらぬ内

百遣るところこびついて居ル二十軒 安九仁3
五文ではとひのいて居る廿けん 安五満2
伊吹 賛。五十文や百文ならニツコリしてくれるが五文では。 一〇19

清 賛。

374 みりん酒を入れてひいどろすゝぐ也

細井 味醂酒を飲むのに、当時はまだ貴重品だった秘蔵のガラスの酒器を使ったので、後

でそのべた付きを濯いでいる。

ひいどろをさかさまにして婢ハしい

みりん酒がきいたで婢ハ琴を出し

ひいとろて二はいあをつて婢ハひき

伊吹 礎稿のように解するより仕方がないのかもしれないが、句を素直に読めばビイドロを濯ぐのに、味醂酒を用いているように思えるのだが。

山田 礎賛。今のワイングラスあたりでしょうね。
みりん酒も茶わんてのめばすこく見へ 宝13仁2

小栗 礎解では、何ともしようのない句で、そうですかという他はないのだが、別解も立てえない。

「みりん酒」は女性が好むことになっており、「ひいどろ」は、また美女の示唆でもあるので、何とかこじつけたのだが、「すすぐ」が処理できない。

清 礎稿のようにしか解しようがないか。
伊吹説の味醂酒を用いてビイドロを濯いで、効果はあるまいと思う。

愛染帖

新家 完司選

(投句 280名)

呆け防止もう折鶴が箱いっぱい

西宮市 福島 弘子

(評) 指を動かし頭を使うので脳の活性化に最適の折り紙。せっせせっせと頑張った結果、段ボール箱に一杯、さて、どうする？

健康茶焼酎で割り飲んで

奈良市 森中 博一

(評) 老化防止、肝機能向上、血糖値を下げる等々と宣伝している健康茶。焼酎で割るとは名案！ 効能が失せなければいいのだが。

今までに人を呪ったことがない

鳥取県 山下 節子

(評) 憎しみの余り「災いあれ！」と念じる「呪い」。マイナス感情の中でも最悪のもの。できれば誰も呪うことなく生涯を終えたい。

おみくじは信じたいから引き直す

唐津市 仁部 四郎

(評) 凶で「大難に遭う」だったのか。それを信じて「無理をするな」というのが託宣だと思ふのだが。次も凶だったら落ち込む。

絶え期餅も夫もカビだらけ

紀の川市 宇野 幹子

(評) カビだらけの餅と一緒にされているご亭主。無精髭を剃って、ドブネズミ色のジャージを脱いで、浮気でもしてやろう！

腰痛を隠し化粧は念入りに

大阪市 津守 柳伸

(評) その心意気や良し！ 痛いところがあれば表情が曇るのは当然だが、それを見せないようにするのもエチケットだろう。

日本一住みたい町に住んでいる

鳥取市 岸本 安章

(評) 住みたい田舎ランキングでいつも上位の鳥取市。住んでいる人にとっては嬉しい評価だろうが、実感はないのではないか。

トニー谷かと老母が訊くピコ太郎

尼崎市 清水久美子

(評) 「アポーベン」で名を売ったピコ太郎。確かにトニー谷そっくり。だが30年前に亡くなった芸人を知っているのは高齢者だけ。

なかなかあなかつまらんお正月

三田市 上田ひとみ

(評) うまく言えないが、なんとなくつまらない。どうしてなのだろう？ 子供の頃の楽しかった記憶が残っているからかも。

霊安室から葬儀社が引き継ぐ

青森県 松山 芳生

(評) 闘病の甲斐なく病人から死体になって

しまった後は、プロの手でマニュアル通りし

堺市 内藤 憲彦

ずしずと仏さまになる段取りが進む。

生きているかぎり出します年賀状

東かがわ市 川崎ひかり

掃除機もきれいに掃除する晦日

鳥取市 夏目 一粋

ガンバルと言ってるうちに除夜の鐘

神戸市 細川 花門

正月は体内時計OFFにする

大阪市 田中ゆみ子

テレビ消ししみじみひとりお正月

府中市 岸田 武

正月の顔して餅を食っている

松山市 郷田 みや

手間かけたキントン残るお重箱

松江市 中筋 弘充

正月になると書きたくなる日記

倉吉市 大羽 雄大

のり付けをしてから渡すお年玉

八王子市 川名 洋子

お年玉弾んだ後は寝正月

豊中市 松尾美智代

一時間並んで二分初詣で

三田市 辻 開子

神頼み次から次とある頼み

私だけお願いします初詣で

米子市 竹村紀の治

三田市 上垣キヨミ
欲連れて神社ハシゴで湿布薬

松山市 神野きっこ
開けるまで夢いっぱいの福袋

羽曳野市 宇都宮ちづる
個人情報絵馬にも紙が張つてある

芦屋市 竹山千賀子
独り居に皆々様と来る賀状

鳥取県 細田 裕花
正月なのに終活の話など

八尾市 山根 妙子
三ヶ日過ぎて缶瓶収集車

香南市 桑名 孝雄
折角の賀状しょんぼりして戻る

日高市 根岸 方子
お歳暮の鮭持て余し寒に入る

大阪市 森 廣子
正月が済めば変わらぬ昨日今日

札幌市 三浦 強一
大はしゃぎやがては消える雪だるま

札幌市 三浦 強一
酔い上手いて宴会が盛り上がる

岡山県 田中 恵
バックカスと鍋を開んでいる至福

岡山県 田中 恵
薔薇の花活けてテンション上げている

高良 秀光
昼寝してころっと変わる予定表

堺市 矢倉 五月
未熟者ですと謙遜できぬ医者

紀の川市 辻内 次根
観終わってまた純な恋したくなり

岡山市 藤成 操江
水音もひとり男の台所

岡山市 藤成 操江
グーグルで家が裸になつてゐる

尼崎市 山田 耕治
おみくじを去年と同じ木に結ぶ

鳥取県 齊尾くにこ
バスツアー行けるポイント溜めてゐる

鳥取県 齊尾くにこ
つんつんの肩をだまて揉んでやる

笠岡市 藤井 智史
おせんべいポリポリ午後サスペンス

笠岡市 藤井 智史
進化追う車その目の恐いこと

大阪府 米澤 俣子
正月は終わりビールは発泡酒

大阪府 米澤 俣子
チーパッパ タタの粗品に並ぶ列

大分県 米澤 俣子
ボクの芸いつもバナナの皮を踏む

大分県 米澤 俣子
近すぎて夫の愛に気づけない

大分県 米澤 俣子
畳み方知らぬ娘の長い脚

弘前市 高瀬 霜石
立ち食いの蕎麦もどんどん進化する

沖縄県 あらざくら
恋の矢に救われキラリ更年期

松山市 栗田 忠士
〇×の×が日毎に増えていく

河内長野市 原熊知津子
売れ残る高級品の自己過信

倉吉市 牧野 芳光
ことなかれ主義の言葉で味が無い

豊中市 池田 純子
書棚からスマホに転居広辞苑

神戸市 山口 光久
堅物へ柔軟剤を二三滴

河内長野市 山岡富美子
のんびりと下流老人しています

和歌山市 平田 元三
喜寿越えた米寿見えるか遠眼鏡

米子市 後藤美恵子
マイカーの葱の臭いが消えません

沖縄県 森山 文切
手を抜いた衣装で目立ち過ぎてゐる

岡山市 永見 心咲
カラオケの点も負けたくないアイツ

神戸市 奥澤洋次郎
馬鹿をする男少なしせちがらし

シドニー 坂上のり子
無農薬もう気にしても先が知れ

鳥取市 山下 凱柳
脳細胞十七文字がかき乱す

三田市 久保田千代
選というさだめの中に消えゆく句

長野県 丸山 健三
成仏が出来ぬ没句をまた洗う

倉吉市 中村 毅
とんどさんへ没の句供養お願いし

京都市 都倉 求芽
こんな句も作ってたのだ古句帖

三田市 多田 雅尚
江戸川柳読んで得する知恵袋

大阪市 若本 安代
杉玉で新酒知らせる灘五郷

大阪市 佐藤 忠昭
お正月妻のお酌で二日酔い

三田市 村田 博
箱根駅伝吞みつ見えば出来上がる

桜井市 安土 理恵
好きさだけ吞みたかったわ三ヶ日

三田市 堀 正和
飲む話断る理由見当たらず

河内長野市 梶原 弘光
ノレンくぐれば押し寄せて来るメニュー

海南市 小谷 小雪
自由度の高さへ酒を飲んで

鳥取市 前田 楓花
笑い上戸今夜は酒が過ぎました

三田市 福田 好文
少しずつ減らすつもりが増える酒

山口市 青木 隆子
もう無理と言いつつ猪口を出すお客

羽曳野市 中川ひろ介
一升瓶漏れとるのんとちやいますか

大阪市 平井美智子
泣いた分ビールで補充する涙

藤井寺市 鈴木いさお
近ごろの肥満は酒の副作用

弘前市 高森 一吞
手ののびるところにワイン置いてある

大阪市 津村志華子
白鶴を供えて仏花見酒

鳥取県 松川 行男
星の下宴会帰り傘忘れ

河内長野市 中島 一彌
仏滅か電球が切れ酒が切れ

枚方市 寺川 弘一
古代にも酔いどれが居たホモサピエンス

大阪市 奥村 五月
飲みたいと誘った友は家族葬

河内長野市 谷 久美子
同窓会逢いたい友は仏様

大阪市 谷口 義
こんな字も知ってたんかと遺書を見る

岡山市 丹下 凱夫
葬式に数珠とのど飴持つて行く

下松市 有海 静枝
ご臨終なくなりそうな医の進歩

高槻市 松岡 篤
風呂にまでスマホ持ち込む依存症

京都市 清水 英旺
スマホ以外眼中にないという風情

岸和田市 雪本 珠子
縁側で猫と一緒に船を漕ぐ

明石市 梶谷 和郎
家を出る背中に妻の深呼吸

河内長野市 木見谷孝代
野良仕事終えたその手で茶を点てる

男鹿市 伊藤のぶよし
七輪で焼けば目刺しも高級魚

横浜市 川島 良子
平凡な一日でよし三六五日

唐津市 坂本 蜂朗
年金があり減塩で生かされる

三田市 尾崎 一子
ひとつ病みひとつ怠ける事覚え

豊橋市 藤田 千休
労働にそぐわぬ歳費政治費

沖縄県 宮 すみれ
インコのピョお茶目にしゃべる男の子

宝塚市 太田としお
パチンコは何故か博打と騒がない

箕面市 中山 春代
マニュアルについて行けない老眼鏡

寝屋川市 籠島 恵子

友達もみな穏やかになっている

藤井寺市 田付 絹枝

軽い靴軽いリュックで待つ誘い

広島市 岸本 清

振り返りや香車みたいに生きてきた

河内長野市 大島ともこ

ええ話や膝を叩いてはまる罨

豊中市 藤井 則彦

今日もまた眼鏡を探し合う夫婦

河内長野市 穂口 正子

譬え話通じん夫を持て余す

那覇市 前川 真

変顔を孫と競って顔がつる

大阪市 柴本ばつは

無駄話これがわたしの胃の薬

三田市 北野 哲男

札東に万能薬と書いてある

鳥取市 大前 安子

だるま様白目のままでこつち向き

奈良県 谷川 憲

賢治訪ねイーハトーブを探してる

東京都 川本真理子

今晩の月は何かを産み落とす

豊中市 水野 黒兎

妻までがしぶ後期高齢者

大阪府 高木 道子

私め改めまして准高齢者

奈良県 安福 和夫

関白の座なら生前退位ずみ

神尾県 島尻 卓

断捨離で身軽になって買ったも買う

倉吉市 山中 康子

身の程を知っているから無理はせぬ

生駒市 飛永ふりこ

しょばくれを払うマジックピコ太郎

福井市 伊藤 良一

忙しい言いつつ嬉しそうな愚痴

河内長野市 辻村 ヒロ

通帳と向かう余生の持久戦

河内長野市 藤塚 克三

年金で河豚ちり妻へ努力賞

富田林市 中井 アキ

素手のまま雪合戦をした昔

堺市 村上 玄也

輪郭は分かって書けない漢字

芦屋市 黒田 能子

いらいらを扇ぐ扇子が忙しない

大阪市 高杉 力

夕刊がなくて日曜だと気づき

和歌山市 武本 碧

おばあさんと呼んでも誰も振り向かぬ

神尾県 禰 キヨ

巻く帯で腰痛みとれ医者いらす

河内長野市 森田 旅人

ビル夜景中に過労の新人も

神戸市 富永 恭子

カサカサと黒豆乾く音を立てて

大阪市 坂 裕之

百円が目いっぱいのお賽銭

鳥取県 門村 幸子

復調の兆し鏡に笑む稽古

福井市 伊藤 良一

自由でも自適にならぬもどかしさ

藤井寺市 若松 雅枝

お隣りが空家になって三年目

篠山市 酒井 真由

炊きたての御飯に生みたての卵

大阪市 宇都満知子

亭主はソース私醬油で目玉焼き

橋本市 石田 隆彦

鬼の顔裏を覗けば淋しがり

神戸市 松井 文香

女にも七人の敵いざ化粧

瀬戸内市 宮宅比佐恵

平和だな犬にも赤い服着せて

安来市 原 煩悩児

出雲弁になると本心曝け出す

海田市 堂上 泰女

お日様の値うちを知れと寒気団

神尾県 島村つばき

一日の会話うんいやそうかだけ

箕面市 出口セツ子

景気良くなれとビリケンさんなでる

共選欄

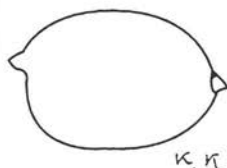
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 355名)



「手頃」北野哲男選

お手頃なランチのお店主婦ばかり
千円でおつりが付いてくるランチ
自分のは手頃な値段と言う家内
手頃だと値踏みをされた気がします
ワンコイン以内で食べる昼ご飯
スーパードで手頃を籠に選って主婦
身の丈に合った暮しで心地よい
お手頃を財布の紐に聞いてみる
年金で手頃な物がまだ買える
年金暮し手頃を探す春財布
結局は妻の手頃に合わせとく
家族減り手頃な家に移りたい

豊中市	松尾美智代	大阪市	平井美智子	池田市	奥園 敏昭	上尾市	中村 伸子	堺市	村上 玄也	鳥取県	門村 幸子	箕面市	大浦 初音	松山市	栗田 忠士	貝塚市	吉道あかね	和歌山市	上田 紀子	藤井寺市	太田扶美代	藤井寺市	若松 雅枝
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	------	-------

「手頃」安土理恵選

ワンコイン以内で食べる昼ご飯
お手頃の価格キャベツのハーフ売り
路地裏の波長が俺に合っている
福袋二千円なら手が届く
百均で足りるものなら百均へ
千円でおつりが付いてくるランチ
手頃だが義母も私も同じシャツ
天国への手頃な梯子見つけた
思い出をしまおう手頃な箱がない
商店街友も買ってた同じ品
踏み台にするには丁度良い男
妻の手で転げ手頃な丸い石
担任がこれが手頃と志望校
介護ロボット手頃になれば買う予定
お手頃を過ぎて高騰する私

堺市	村上 玄也	鳥取市	加藤 茶人	高槻市	原 洋志	大阪市	江島谷勝弘	倉吉市	牧野 芳光	大阪市	平井美智子	米子市	池田 美穂	和歌山市	武本 碧	東京都	川本真理子	大阪市	原田すみ子	三原市	鴨田 昭紀	堺市	坂上 淳司	大阪市	奥村 五月	松江市	中筋 弘充	佐賀県	真島久美子
----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

宝くじ手頃な夢を買いに行く

お手頃ネすぐに手を出しすぐ飽きる

B級グルメ手頃でうまく大人気

一流のシェフより母の玉子焼き

八十路ゆく手頃な夢を編みながら

マイウェイ手頃な道を歩んでる

お手頃の価値観持つて生き延びる

お手頃と思えたはずの荷が重い

手頃がいい上も下にもキリがない

ひと鉢のポインセチアでクリスマス

初バーゲン手頃な値段サイズなし

OKを財布が出している値札

お手頃な終の棲家というチラシ

骨董市手頃な茶器を掘り起こす

妻の旅レンジメニューの酒の当て

私には居心地の良い四畳半

湯豆腐に落ち着きホッとする財布

質よりも量で補う食べ盛り

一寸だけ貧乏なのが馴染みよい

お手頃を探す何かに妥協して

瀬戸内市 東横ますみ

枚方市 小林 わこ

大阪市 磯島福貴子

弘前市 福士 慕情

吹田市 木下 敏子

大阪市 藤原千恵子

奈良県 渡辺 富子

那覇市 前川 真

大阪市 宇都満知子

弘前市 今 愁女

三田市 幸田 厚子

富田林市 山野 寿之

高槻市 初代 正彦

枚方市 丹後屋 肇

篠山市 酒井 健二

鳥取市 児玉 規雄

米子市 竹村紀の治

尼崎市 清水久美子

神戸市 奥澤洋次郎

海南市 小谷 小雪

老いたれば小さな鍋とベティナイフ

お手頃を並べ冬眠しています

妻の腕手頃な杖にして伊勢路

お手頃な夫でわくわくから遠い

万歩計手頃な坂を覚えてる

人間が好きで手頃な列にいる

花道に手頃なポスト空きがない

宝くじ手頃な夢を買いに行く

スーパリーのちよこつと嬉し一人用

値引きシールつけば今夜はトコ握り

私だから夫もあんなもんでしよう

甘えたい時に手頃な妻のひざ

分相応な暮しで肩が凝りません

丁度いい温度になつてから夫婦

ジャンボより手頃な夢の福袋

お手頃なコースで燃えたフルムーン

農継いだ子に早乙女の嫁が来る

ブライトが手頃をするり見落した

進めそう手頃な風が吹いて来た

一寸だけ貧乏なのが馴染みよい

手頃さを大事にしたい余生の譜

終焉はお手頃で良し家族葬

母無敵もやしレシビの百通り

橿原市 居谷真理子

和歌山市 古久保和子

倉吉市 中村 毅

下松市 有海 静枝

堺市 柿花 和夫

瀬戸内市 片島 秀月

河内長野市 中島 一彌

瀬戸内市 東横ますみ

堺市 矢倉 五月

羽曳野市 徳山みつこ

奈良市 大久保眞澄

松原市 森松まつお

紀の川市 楠原 富香

鳥取市 前田 楓花

箕面市 出口セツ子

豊中市 藤井 則彦

田辺市 岡本 昇

大阪市 榎本日の出

芦屋市 竹山千賀子

神戸市 奥澤洋次郎

大阪市 升成 好

大阪市 津村志華子

大阪市 栃尾 奏子

お手頃な本を一冊旅かばん

日帰りの旅にも好きな文庫本

お手頃で済ますあなたの留守の膳

野菜高騰白菜代わりモヤシ買う

お手頃の野菜の並ぶ道の駅

お手頃な役者で作る昼ドラマ

鮎より鮎が手頃なお正月

川柳は手頃な趣味と思つてた

鬼コーチ手頃加減が絶妙だ

大きさが手頃で買った飯茶碗

有難い重さも手頃電子辞書

私の句集手頃な厚さです

沖繩が手頃な基地で手放せぬ

相応な幸せであるブリ大根

昼ごはんうどんかそばに決めている

秀句

二人きり手頃な鍋に買い代えた

ダイソーもセリナも孫の百貨店

割れ鍋にとじ蓋ですがいい夫婦

堺市 近藤 治子

大阪市 川端 一步

鳥取県 斉尾くにこ

篠山市 長澤 喜弘

大阪府 畑中 節子

豊中市 上出 修

鳥取市 池澤 大鯨

神戸市 能勢 利子

鳥取市 中村 金祥

和歌山市 楠見 章子

大阪市 平賀 国和

沖繩県 森山 文切

鳥取県 竹信 照彦

橿原市 居谷真理子

三田市 上田ひとみ

堺市 齋藤さくら

神戸市 細川 花門

尾道市 大本 和子

結局は妻の手頃に合わせとく

お手頃と勝手にきめられた無念

お手頃な長方形を探してる

密談をするに手頃な店がある

お手頃な人です逢うてみませんか

消しゴムは手頃で油断ばかりする

お手頃な終の棲家というチラシ

ウチだって居酒屋だって冷奴

手頃な話題何一つないスキ間風

世渡りはガラガラポンが手頃だろ

場が和む手頃な嘘を光らせる

暇つぶし手頃な相手二三人

悪友が逝って手頃な棒が折れ

双方が手頃と思いとまった

OKを財布が出している値札

住み慣れた町で大きく深呼吸

湯豆腐に落ち着きホッとする財布

身の丈の暮らし清貧それでよい

ほどほどに空気を抜いていく老後

秀句

触れ合えば鬼も手頃になるご縁

競争はしない手頃な靴でいい

八十路ゆく手頃な夢を編みながら

藤井寺市 太田扶美代

池田市 栗田 久子

青森市 守田 啓子

藤井寺市 鈴木いさお

弘前市 浅田 隆樹

鳥取市 夏目 一粹

高槻市 初代 正彦

弘前市 高瀬 霜石

寝屋川市 岡本 勲

西脇市 七反田順子

池田市 上山 堅坊

和歌山市 喜田 准一

堺市 遠山 唯教

四條畷市 吉岡 修

富田林市 山野 寿之

大阪府 神野千恵子

米子市 竹村紀の治

鳥取市 吉田 弘子

枚方市 海老池 洋

八尾市 宮西 弥生

藤井寺市 高田美代子

吹田市 木下 敏子

英語 de Senryu ⑥

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

落第か そうかと親は云つたきり

facing failure

parents just say

"is that so"

裸の外に うらやまれるものを 持たず

I have nothing

to be envied

except my body

face (嫌なことに) 直面する *failure* 失敗 落第 *parents* 両親 *is that so* そうなのか
have nothing 何もない *to be envied* うらやまれる *except* 以外は *body* 身体

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句 ③

2016 年はガーナで初めてのハイク集の出版や、アフリカハイクネットワークが誕生しました。アフリカで日本の短詩形を源にしたハイクやセンリユウが誕生したことは、日本人にとって驚きとともに、刺激的な現象です。8 月にセレスティン・ヌダヌ (Celestine Nudanu) の『ハイク詩歌—ガーナからの詩』*Haiku Rhapsodies-Verses from Ghana*、そして 11 月にはアジェイアゲイバー (Adjei Agyei-Baah) の『アフリク：ガーナのハイクとセンリユウ』*Afriku-Haiku & Senryu from Ghana* が出版されました。Afriku とは (アフリカのハイク) を意味し、アジェイアゲイバーらアフリカの詩人によって作られた造語です。日本と全く異なる風土から生まれたハイクやセンリユウから、アフリカのひとの暮らしを知ることができます。作品の一部をアジェイアゲイバーの『アフリク』から紹介しましょう。(ここでは外国語の作品は、ハイク、センリユウと表記しています)。

dry savannah/ the dotted castles/ of anthills サバンナは乾き点在する蟻の塚

*Harmattan winds/ crossing the border/ with leaves** アルマタン木の葉引き連れ国を越ゆ

*アルマタンはアフリカ西海岸の砂混じりの熱風

black coffee/ white sugar/ I stir the world into oneness

黒いコーヒー白い砂糖 世界は一つ混ぜ合わす

mama's soup---/ trying to adjust/ to my wife's

妻の味に似せようとする母ちゃんのスープ

「わざわざ」

(投句 219名)

吉 村 久仁雄 選



よろしくとお隣さんへ年賀状
わざわざをついでと言つて母の下駄
新鮮とわざわざ書いてある魚
イエスノーわざわざ返事告げに来る
90度のお辞儀新入りのわたしに
手土産の鮎妻と子を揺り起す
いい人と言われわざわざ仮面脱ぐ
絵馬にルビ振つて神様怒らせる
ことさらに危険いとわぬ好奇心
ひと手間をかけてお皿が冷めている
メール見たかと親はわざわざ電話かけ
遠いけど投句は験の良いポスト
瘡蓋の縁をこそげて元の傷
遠回りしても会いたい人がいる
縫い代を表に見せて着るおしゃれ
プーチンの威嚇を示す遅刻癖
尊大は貴方だけにのおもてなし
惚けてないか時どき脳をノックする
レシビまで付けてご馳走してくれる
悪態をわざわざついて振り向かせ

奈良市	森中 博一	奈良市	奈良市	大久保眞澄	富田林市	関 よしみ	富田林市	関 よしみ
豊中市	松尾美智代	豊中市	中村 毅	尾崎 一子	長岡京市	山田 葉子	茨木市	藤井 正雄
倉吉市	中村 毅	三田市	尾崎 一子	山田 葉子	三田市	尾崎 一子	富田林市	関 よしみ
三田市	尾崎 一子	山田 葉子	葉子	葉子	神戸市	山口 光久	紀の川市	辻内 次根
富田林市	藤井 正雄	富田林市	藤井 正雄	藤井 正雄	富田林市	藤井 正雄	富田林市	藤井 正雄
河内長野市	梶原 弘光	河内長野市	梶原 弘光	梶原 弘光	河内長野市	梶原 弘光	河内長野市	梶原 弘光
堺市	坂上 淳司	堺市	坂上 淳司	坂上 淳司	堺市	坂上 淳司	堺市	坂上 淳司
上尾市	中村 伸子	上尾市	中村 伸子	中村 伸子	上尾市	中村 伸子	上尾市	中村 伸子
海田市	小谷 小雪	海田市	小谷 小雪	小谷 小雪	海田市	小谷 小雪	海田市	小谷 小雪
三田市	堀 正和	三田市	堀 正和	堀 正和	三田市	堀 正和	三田市	堀 正和
富田林市	山野 寿之	富田林市	山野 寿之	山野 寿之	富田林市	山野 寿之	富田林市	山野 寿之
明石市	梶谷 和郎	明石市	梶谷 和郎	梶谷 和郎	明石市	梶谷 和郎	明石市	梶谷 和郎
堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也	村上 玄也	堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也
米子市	後藤美恵子	米子市	後藤美恵子	後藤美恵子	米子市	後藤美恵子	米子市	後藤美恵子

犬つれて散歩に誘う老い仲間
見ない振り出来ずわざわざ買う苦勞
親の席用意されてる入社式
支払いを細かく分ける小封筒
食い意地が二時間並ぶ労に勝つ
欲しい物教えてくれるコマーシャル
セーターを編んだが孫に追いつけず
水たまり好んで歩く幼子等
追伸の本音の為に書く手紙
買物に隣町まで行く過疎地
花の香の方へわざわざ車椅子
ありがとうわざわざ会いに来てくれて

佳 句

年金がまだ生きてるか聞きに来る
風運ぶ聞きたくもないうそほんと
道聞くと紙に地図書き給もくれ
取り寄せておひとり様の誕生日
穴あきのジーンズも穿く粋な人

人

鈍行に乗つて日本を謳歌する

地

過疎にまで五十二円でやつてくる

天

アツアツを食べさせたくて見る時計

軸

回り道寄り道をして墓地はまだ

河内長野市	辻村 ヒロ	河内長野市	辻村 ヒロ	河内長野市	辻村 ヒロ	河内長野市	辻村 ヒロ
和歌山市	上田 紀子	和歌山市	上田 紀子	和歌山市	上田 紀子	和歌山市	上田 紀子
大山市	関本かつ子	大山市	関本かつ子	大山市	関本かつ子	大山市	関本かつ子
大阪市	藤原千恵子	大阪市	藤原千恵子	大阪市	藤原千恵子	大阪市	藤原千恵子
豊中市	水野 黒兎	豊中市	水野 黒兎	豊中市	水野 黒兎	豊中市	水野 黒兎
樺原市	居谷真理子	樺原市	居谷真理子	樺原市	居谷真理子	樺原市	居谷真理子
姫路市	古川 奮水	姫路市	古川 奮水	姫路市	古川 奮水	姫路市	古川 奮水
大阪府	磯島福貴子	大阪府	磯島福貴子	大阪府	磯島福貴子	大阪府	磯島福貴子
枚方市	寺川 弘一	枚方市	寺川 弘一	枚方市	寺川 弘一	枚方市	寺川 弘一
山口市	青木 隆子	山口市	青木 隆子	山口市	青木 隆子	山口市	青木 隆子
和歌山市	土屋起世子	和歌山市	土屋起世子	和歌山市	土屋起世子	和歌山市	土屋起世子
沖繩県	島尻 卓	沖繩県	島尻 卓	沖繩県	島尻 卓	沖繩県	島尻 卓
堺市	内藤 憲彦	堺市	内藤 憲彦	堺市	内藤 憲彦	堺市	内藤 憲彦
下松市	有海 静枝	下松市	有海 静枝	下松市	有海 静枝	下松市	有海 静枝
高槻市	松岡 篤	高槻市	松岡 篤	高槻市	松岡 篤	高槻市	松岡 篤
八王子市	川名 洋子	八王子市	川名 洋子	八王子市	川名 洋子	八王子市	川名 洋子
高槻市	初代 正彦	高槻市	初代 正彦	高槻市	初代 正彦	高槻市	初代 正彦
弘前市	高瀬 霜石	弘前市	高瀬 霜石	弘前市	高瀬 霜石	弘前市	高瀬 霜石
倉吉市	牧野 芳光	倉吉市	牧野 芳光	倉吉市	牧野 芳光	倉吉市	牧野 芳光
三田市	上田ひとみ	三田市	上田ひとみ	三田市	上田ひとみ	三田市	上田ひとみ

「ブーム」

紫 しめの 選

(投句 219名)



韓流ブーム去つても妻はベ・ヨンジュン
年寄が見たらがっかり「君の名は。」
ブームから離れお茶飲む老い二人
ブームとは無縁こつこつ畑を打つ
流行に未だに乗ったことがない
稼げるだけ稼げばいいよビコ太郎
過熱したブームに乗って丸裸
世の中の風に背を向けマイブーム
ブームなど気にしていない俺の道
威張るなようまくブームに乗っただけ
気が付いた時にはいつも乗り遅れ
私だけスマホしてない専用車
呆け防止ちよつとブームに乗ってみる
ブーム去り倉庫で欠伸フラフラ
押入れに過去のブームが昼寝中
初孫に世界のブームそっちのけ
御朱印を集めて廻るマイブーム
文春も所詮しばしの火付け役
少子化を横目に増加するペット
駅長が二代も続く猫ブーム

藤井寺市	鈴木いさお
鳥取県	竹信 照彦
唐津市	坂本 蜂朗
奈良県	渡辺 富子
倉吉市	中村 毅
神戸市	上田 和宏
神戸市	山口 光久
大阪市	長高 俊雄
岡山市	丹下 凱夫
堺市	羽田野洋介
河内長野市	大島ともこ
尼崎市	清水久美子
大阪市	柴本ばつは
唐津市	山口 高明
富田林市	山野 寿之
西宮市	緒方美津子
大阪市	藤原千恵子
大阪市	森 廣子
明石市	穂谷 和郎
堺市	内藤 憲彦

マイブーム猫の家出で沈下する
餓えよりは楽だと思ふダイエツト
日本食ブームが上げる魚の値
怪しげなスシが世界のあちこちに
ブーム去り各種サブリの瓶ゴロリ
ネバネバも乳酸菌も摂ってるが
セールスにブームになると言われても
値下がり待ってるうちにブーム消え
ポイントが付く健康法マイブーム
芸人が芸をしなくていいテレビ
煽られて行つて並んで食べました
ふるさとの納税をして余禄待つ

佳 句

ボケモンGO猫も杓子もわたくしも
私も担ぐブームのお先棒
飽きられる運命込みで来るブーム
狙い目はきつとブームの過ぎた頃
おばさんが着るとブームは幕になる

人

地

天

軸

岡山県	永見 心咲
篠山市	酒井 健二
大阪市	平賀 国和
鳥取県	児玉 規雄
大阪市	原田すみ子
青森市	守田 啓子
倉吉市	牧野 芳光
四條畷市	吉岡 修
加西市	山端なつみ
弘前市	高瀬 霜石
櫻原市	居谷真理子
横浜市	菊地 政勝
弘前市	稲見 則彦
河内長野市	梶原 弘光
下松市	有海 静枝
那覇市	前川 真
高槻市	富田 保子
大阪市	古今堂蕉子
三原市	鴨田 昭紀
佐賀県	真島久美子

初級教室

題 — やれやれ

居 谷 真理子

原 手術後の定期検診異状なし 紀 雄

原 紀雄さん、よかったですね。自分の気持ち

を押しまししょう。

参 手術後の検診結果はつと聞く

原 仕舞風呂除夜の鐘聞く大晦日 一 彌

除夜の鐘と大晦日、重なりました。

参 除夜の鐘遠く聞いている仕舞風呂

原 娘を嫁にやれやれ夫と淋し茶 澄 子

参 嫁がせて淋しいお茶を飲む夫婦

原 七草を済ませやつとマイペース 開 子

参 七草を済ませてやつとマイペース

原 やれやれと便座の上の小宇宙 こすえ

小宇宙よく使われる言葉ですがこの句の

場合は大げさな気がします。

参 やれやれと便座の上で息をつく

原 マイタイムテレビにとられ今日も終え 秀 光

参 マイタイム今日もテレビに乗っ取られ

原 泥舟を漕ぎたどりで着く金婚式 俊 雄

下六になりました。

参 泥舟で金婚式にたどり着く

原 揉め事はかやの外良しやれやれだ 明 子

こちやこちやしてます。整理しまししょう。

参 揉め事をやれやれと見るかやの外

原 お年玉やれやれ終わるお正月 (高) 弥 生

参 お年玉配って終わるお正月

原 重箱を拭き上げわたしとりもどす 旅 人

正月の余韻を消す表現、句の前半はお見事

です。(わたしとりもどす) はややオーバー。

参 重箱を拭き上げ普段とりもどす

原 やれやれ年金月だそれ使え 紀 美 恵

やけつぱちともとれる威勢良さが面白い。

上五にしましよ。

参 やつと来た年金月だそれ使え

原 都会の子田舎を捨てて墓終い なつみ

参 故郷を捨てる決意の幕じまい

原 バラサイト白馬あきらめ春は来る 知 津 子

言いたいことは分かりますが、十七音字に

詰め込みすぎました。

参 白馬来ぬバラサイトにも春は来る

原 直したら又一箇所と馴れた家 敬 子

参 直したらまた一箇所という我が家

原 お節出来やれやれ座るテレビ前 治 子

参 お節出来テレビの前にどっこいしよ

原 張り終えた障子に猫が飛び込んだ 風 露

実際にあったことだと思いますが…。

課題の言葉をそのまま句の中で使うことを「読み込み」といいます。「読み込み不可」と付記されている場合は使つてはいけません。何も但し書きがなければ自由です。もちろん当欄も自由。課題「やれやれ」を読み込まず、色々なやれやれを描くのも楽しいことです。ちなみに今回一番多かったのは、子供や孫がやつと結婚してくれた「やれやれ」でした。

(原は原句 参は参考です)

原 やれやれと一日終えて床につく 英 男

原 締切日やれやれ出来た五七五 寧

両句ともひねりが欲しいです。佳句の中の

恵子さん、厚子さんの句をご参考に。

原 やれやれと祖父歟かつぎ畠行き (山) 久 子

参 やれやれと歟をかついでおじいちゃん

参 張り終えた障子に猫が飛びついた

原 幾山河越しても安堵しておれぬ 律子

参 幾山河越しても安堵まだ遠い

原 やれやれ無事に今年も暮れて祝う会 のり子

参 事も無く今年も暮れて祝う会

原 四捨五入やれやれ5での滑り込み 崇明

こころは5より5の方が落ち着きます。

参 四捨五入やれやれ5です滑り込み

原 やれやれと布団干したり叩いたり 里子

面白味を加えてみました。

参 やれやれと干して叩いた客布団

原 春三月一浪の孫サクラサク 福貴子

春、三月、サクラサク。喜びのあまり言葉

がくどくなりしました。

参 一浪の孫に今年のサクラサク

原 喜寿傘壽去りて米寿とはやれやれ 勝治

面白い句ですね。ご自分のことでしょうか。

参 喜寿傘壽越えて米寿とはやれやれ

原 やれやれと他人ごとなれどトランプだ 満寿恵

参 やれやれと他人事なれどトランプ氏

原 少女像またも持ち出すお国とや 安子

参 少女像またも持ち出す国事情

原 やれやれと寝床についても夢が攻め 勝正

参 やれやれと床についても夢が攻め

原 やれやれと乗った終電逆コース 敏昭

残念、よくある着想です。表現で個性をだ

しましょうか。

参 アッアッアッ乗った終電逆コース

原 再発をし易い癌ももう九年 隆子

「し易い」は正しい表記ですが、ひらがな

の方が句の姿がなだらかです。

参 再発をしやすい癌ともう九年

原 それなりの五感のおとろえ秋日和 まさる

参 おとろえた五感ぬくめる秋日和

原 「紅白」はさつと切り上げ高枕 門幸子

参 「紅白」に見切りをつけて高枕

原 味噌作り終えて静かに春を待つ 失名氏

大阪府の方です。次回から句箋にお名前を

お忘れなく。

参 味噌作り込み終えて静かに春を待つ

原 久し振るギブスが取れて入る風呂 修平

参 ようやつとギブスが取れて入る風呂

原 餅送りやれやれ安堵昼寝する 見温子

参 餅ついて送って今日は昼寝する

原 やれやれと元日の朝発泡酒

参 元日の朝もやれやれ発泡酒

ミヨノさん、こみつさん、課題を思い違い

なさったようです。掲載できませんが悪し

らず。

【佳句】

やれやれの果てに待ってるデイ通い 和之

やれやれと思う余生に金が無い 孔一

口癖になったやれやれどっこいしょ 雄大

提出日良くも悪くもポストイン 厚子

やれやれも束の間だった妻の乱 紀美代

我が家から放送局が近すぎる 前洋子

やれやれも半分混じり恋終わる 良一

やれやれとよくぞやったの混じる老い 真

嫁姑中に立つのはもう止めた 博一

一日の疲れ枕に高寝 恵子

合格の最後に聞いた子の名前 由美

【今月の推せん句】

成人の日やれやれ母もこの辺で 神野きつこ

子を降ろしやれやれ次は親を背負う 池田 美穂

やれやれに牽制球が投げられる 高木 道子

川柳塔鑑賞

同人吟 片山 かずお

— 2月号から —

不器用で本音ばかりを吐いている

菊地 政勝

この世は、本音ばかりではグクシヤクすることが多いだろう。人付き合いの潤滑油になるお世辞の一つも言えたら、もつと気楽に世渡りできるのであるが…。

大切な事は一言だけがよい

金子 美千代

上手に言おうとして言葉飾ると、言葉数だけが増えて、言いたい事がちゃんと伝わらないことが多い。大切な事を伝えたいときには、一言で言うに限る。

おばちゃんは聞くのが苦手よく喋る

内田 志津子

熟女達は、他の人が喋っているときは「私は次に何を喋ろうか」と考えていて、人の話は聞いていないことが多いらしい。ということとは、話を聞くのが苦手なのではなくて、聞く耳を持っていないということかも知…。

風の子が消えてブランコ寂しそう

若本 安代

最近の若いママ達は、公園のブランコやスベリ台は不潔だからと、幼い子を遊ばせない。小学生になると、お家でゲームか塾通いで公園には近づかない。かくして、ブランコは…。

忘れたかとぼけているか分からない

奥 時雄

歳をとると、なにかと忘れることが多くなるが、年の功でとぼけるのも上手くなる。「忘れていいのか、とぼけているのか」周りの人だけでなく、本人も定かでないのかも知れない。

声だけは良いとカラオケ褒められる

横山 捷也

要するに「歌はあまりお上手ではないですよ」ということ。ならば、一人カラオケで練習を重ねて、次は皆をアツと言わせるしかない。

データどおり行けば寿命にまだ余裕

木見谷 孝代

平均寿命まで生きられるとしたら、まだまだ余裕があまりのようですが「人間六十を過ぎたら、いつ何があっても不思議ではない」と言われている。どうぞ、ご自愛ください。

単四で開くでつかい広辞苑

岩佐 ダン吉

紙ベースの広辞苑は、重くて嵩張って持ち歩きには不向き。その点、単四の乾電池で動いてくれる電子辞書は便利。誤字防止のためにも、大いに活用しよう。

古日記過去を悲しいほど喋る

伊達 郁夫

古い日記を読み返すと、鮮やかに過去が甦ってくる。「悲しいほど喋る」という言葉に、その甦り方が凝縮されている。

落葉掃く風の気儘を恨みつづ

安芸田 泰子

晩秋から初冬には、意地悪しているのかと思うほど、掃いても掃いても風が落葉を連れて来る。風は「ごめんね。でも落葉を吹き飛ばすのが私の仕事だから」と、手を休めてくれない。

小粒だが甘い蜜柑が父の便

若松 雅枝

故里のお父さんが、丹精込めて作った蜜柑。小粒だが、甘さでは誰にも負けない。お父さんが元気で、その時季になると送ってくれるのが、何より嬉しい。

豆腐ねぎ白菜常備今日も鍋

広島 巴子

寒くなると、温かい鍋はごちそう。でも、野菜の値段が高かった今年の鍋料理は、大変だったのでは…。

諭吉だと没収されるお年玉

能勢 利子

小学生のお年玉。英世さんを貰ってもママは知らん顔だが、諭吉さんを貰ったから「子どもが大きなお金を持つていてはダメ。貯金しておいてあげるから」と没収される。没収だから、後で子供さんに通帳を見せることはない。

錯覚でもいいの幸せなんだから

愛されているので愛しつづけます

松井 文香

これだけ惚気られると、もう「ご馳走さま」と言うしかない。

どうぞ、これからもお幸せに…。

老いの知恵たまには出して見直され

金川 宣子

生活の知恵なら、ご飯を食べた回数が多い年寄りがたくさん持っている。ときどき小出しにして、若い者を驚かせてやる。

人間が面倒になり冬籠り

堀 正和

とかく人の世は、煩わしい。みんなほったらかして「もう嫌だつー」と、冬籠りができたら、どんなに楽だろうか…。

相談と言うが聞いて欲しいだけ

秋元 てる

女性が「相談…」と言ってくる時は、すでに自分で結論を出していて、それを誰かに話してみたいだけのこと。だから「相談」と言われたからと真に受けて、こちらの意見を言うのと「聞いて欲しいだけなのっ！」と叱られる。

看護師は笑顔のプロだなと思う

岡本 昇

病院などで看護師さんを見ていると、職業とは言え、よくあれだけ元氣と笑顔が出せるものだと感心する。あの笑顔はどんな薬よりも患者を元気にさせる。

生き上手近くの他人大切に

吉田 弘子

遠くの親戚より近くの他人。いざというときお世話になるのは、向こう三軒両隣の方々。平生から、仲良くお付き合いしておこう。

鐘に苦情煩悩何処に捨てようか

池田 美穂

除夜の鐘の音を、喧しいと言う。保育園、幼稚園に対しても、園児の声が喧しいと言う。確かにそうかも知れないが、なかなか納得できない。

意識した時から透明度は落ちる

成田 雨奇

人を見る時、好きだと思ったり嫌いだと思ったり瞬間から、好き嫌いの色眼鏡を掛けてしまう。だから「アバタが笑窪」に見えたり、その人の悪いところばかりが目についたりするようになる。

能率を旨とし乱雑なる机上

三浦 強一

他人には、散らかっているように見える机の上。でも、当人は何処に何があるか分かっているの、全く支障はない。このままにしておこう。

水煙抄鑑賞

— 2月号から

亀岡哲子

張り詰めた空氣緩める大くしゃみ

野川宣子

ハークション・アツハツハと笑った昔の長老の氣配りが懐かしい。このごろはこのようなスケールの大きな方も少なくなりました。

見るよりも見られる心地冬の月

小栢こずえ

悩みごとを打ち明けようと見上げると月は大丈夫、そんなこと悩まないでとやさしく笑ってくれました。冬の月であればこそ凜として、心に滲みわたります。

六十路坂脳が縮む日弾ける日

川島良子

これからのまだまだ長い歲月、思い切り縮んで弾み、元気で知恵のあるすばらしい脳になって下さい。ストレッチをすればどんどん成長してゆくのが脳です。

もう二度と逢えない今日という平和

笹重耕三

今日という平和はもう二度とないのです。心穏やかに一日一日を大切に過ごしたいものです。未来を託す人達の為にも。雲のよう悩みは湧いてまた消える

宮村満寿恵

青空の中いろいろな雲のように湧いては消えて行った小さな悩みごと。たとえ暗雲が立ち込めても明日はきっと晴れです。

妥協して丸は歪になつていく

吉道あかね

ぶつかり合つて妥協しながら歪になつた丸は、ごきんごんと上手に転がりながら、どこまでも進んで行くことでしょう。

謎かけのように誘われ妻となる

貝塚正子

世界中の女性の中からどうして私だったの。どの夫婦にもある謎です。きつとすてきなプロポーズだったのですね。

幸せの位置を動かすのは私

郷田みや

幸せは私の心の中で育ちます。日々に新鮮な喜びを見付け、幸せの数を増やしながら育てて行きましょう。

雨の日のブランコとてもさみしそう

木藤こみつ

ブランコに列を作ってはしゃぐ子も少なくなりました。まして雨の日のブランコはほんとうに淋しくてかわいそう。

何とかなる卵を使う料理なら

田中けいこ

卵は優等生。冷蔵庫に卵が並んでいるだけで幸せです。おじいさんもおばあさんも子供でも、なんとかなるのです。

ぶつつけた分あなたは楽になつたかな

有海静枝

ぶつかった痛みはいつか忘れていきます。でもぶつつけたあなたの心は、疼き続けられるかもしれません。

米代の何倍もいる灯油代

高野不二

この冬は例年に増しての豪雪でした。三月号が届く頃なら、森羅万象の芽吹く春がキラキラと輝き始めているでしょう。

照れ笑いどなたがしても素敵です

穂口正子

ほほえましくてうれしくなります。いくつになっても恥じらいを忘れず、オホウフフと穏やかに過ごしましょう。

■句集紹介

「苦句八十一歳」

奥 時 雄 著

水 野 黒 兎

堺市在住の川柳塔社同人奥時雄さんが川柳句集を上梓された。全編軽妙洒脱さに満ち溢れた句集です。

迫力満点の表紙、中扉のイラスト、扉の墨書などご家族のコラボがまた見事に句集にマッチしていて、楽しい句集に仕上がっています。

兜煮に無駄を残さぬ浜育ち

朝日新聞大阪版に「なにわ柳壇」という川柳欄があり、かつては橘高薫風先生が初代選者の一人であって、今は西出楓楽先生が後を引き継いでおられる大阪の川柳人にとって重要な投句欄です。ここで上位入選されたこの句には、新聞掲載当時、選者西出楓楽先生の

「人間はさまざまな物の命を頂いて生きています。それらを無駄なく食するのは頂いた命に対する礼儀というものであり、

浜育ちなればこそその魚への愛着といえましょう」とのコメントがついていました。さらに

ご近所の人と整骨院で会い

そろばんの塾だけだったよき時代

は西出選の特選や年間の十秀に選ばれた句です。

このように「なにわ柳壇」での活躍のほか、本社句会、地元堺での句会などでも秀句を発表されておりますが、なかでも「川柳塔さかい」の名物コーナーとでもいうべき折句の出題に対する句がまた素晴らしい出来と感嘆します。

どうなるか一度蜂の巣突いてみる

あげまんの手職あつて寝て暮らす

泣いた子もごんたした子もやがて親

それぞれ、「ど、い、つ」「あ、て、ね」

「な、こ、や」の折句です。

いずれもほればれる軽妙な句です。

パン啜えネクタイ締めて時計見る

もう五分早く起きればいいものを

などは会社勤め現役バリバリの頃のことでしょう。一方

じわじわと家事分担をさせられる

朝帰りだった時刻に目が覚める

などは、定年退職後の男たちの状況を如

実に表現されています。特筆すべきは酒にまつわるあれやこれやの愉快な、しかし万感こもる傑作の数々です。

ここからが毒と言いつつ飲んでる

肝臓に感謝はするが休ませず

神様に下駄を預けて飲んで寝る

酒量なら今年もキープできそうだ

晩酌は神に誓って怠けない

熱燗にどよめいているピロリ菌

前向きになるには少し酒が要る

死んだなら酒のせいだと言われそう

まさに羽化登仙、春風駘蕩の境地で羨ましい限りです。

立っていた乗客ばかり降りていく

池越えのホールは古いボール出す

あははと大笑いして、そうだなあと同意

できるこのような句も多く収載されています。さらにまた

ます。さらにまた

ドア開けた途端に止んだ笑い声

同じこと聞いてびっくりしてあげる

といった日常の微妙な状況や

寂としてふるさとはただただ緑

古い曲聴いてみようか雨の午後

といった情感溢れる句も見受けられ、ほ

のほのとした幸福感に浸ることのできる

句集です。銘酒にカンパイ！



(投句218名)

少し前に、今年は寒さが厳しいですねと書けば、今度は例年に無い大雪だとかで、特に西日本に集中している様子。



以前に泊まった鳥取の旅館で、目が覚めたら二十センチを越える雪が積もっていて随分難儀したことを思い出しました。見ている分には美しいだけの雪も、生活がかかれば大変なことが多いですね。自然に対する畏敬の念を改めて認識しつつ、今回もよろしく願います。

棲みつけば花になりそう花の虫

米子市 八木 千代

(評)花の虫も、ずっと棲んでいれば花と同化してしまうかも知れません。何だかロマンチックですね。

触つてはダメよ古代の管楽器

横浜市 川島 良子

(評)幻のような古代の管楽器は触れたり

すればホロホロと崩れてしまいそう。どんな音がするかは想像の世界です。

四条畷市 吉岡 修

新しいカジノでお目にかかります

(評)国が認めたカジノ、本当に出来るのでしょうか。外貨が稼げるといういいことばかりではないのでは。

大阪市 榎尾 奏子

悪口は竹輪蓮根からもれる

(評)竹輪に蓮根、穴が開いていたのは見通しがいだけでは無かったのですね。悪口をもらっていたなんてひどい。

松江市 石橋 芳山

落とし主はたぶん必殺仕事人

(評)よく見たなあ、あのテレビドラマ。人知れず悪人を始末してくれる仕事人に溜飲の下がる思いでした。

奈良市 宇賀 史郎

味の素掬った匙は資料館

(評)何だかズーッと懐かしいものになってしまったように思える味の素、昔は卓袱台の上には必ずあったのですが…。

弘前市 高瀬 霜石

いずれ行く道徘徊か逆走か

(評)高遠道路を逆走するのもコワイ、徘徊するものなんだかミジメ、あいだに救いになるものが一つ欲しいです。

河内長野市 山岡富美子

特大の耳掻きトランプにあげる

(評)トランプさんに少しは聞く耳を持た

せたい、そう考える人は多いはず。せめて大きな耳掻きでも、ね。

寝屋川市 籠島 恵子

お土産にするには丁度いい軽さ

(評)持ち運びするのに苦にならないほどの軽いものでなければ大変。たかがお土産なんですものねえ。

八尾市 村上ミツ子

円を未だうまく描けないほくです

(評)円だけを描き続けた芸術家もいるほど、それは難しいものだと言えるでしょう。円から派生するもの多数です。

吹田市 須磨 活恵

少年のスプーン夢がてんこもり

黑白をじっと見守る母の目で
お掃除は三分で済む独り部屋

奈良市 山本 昌代
三田市 堀 正和

タンポポのような私のような春

おみじが大吉だったか不安
体内を自由に進むカテーテル

佐賀県 真島久美子
河内長野市 黒岩 靖博

さよならをずっと昔に聞いた耳

死ぬるまで女きんきらきんでいる
背なの垢さっぱり流すひとり者

紀の川市 辻内 次根
尼崎市 清水久美子
香芝市 大内 朝子

大内 朝子

大内 朝子

東大阪市

佐々木満作

如意棒を操る妻の笠にいる

枚方市

小林 わこ

聞こえないふりしないでねプレゼント

島取市

吉田孔美子

宇宙ステーション2これで行く

長野県

丸山 健三

この奥に小さな嘘があるようだ

大阪市

内田志津子

イエスノー決める時には匙役

生駒市

飛永ふりこ

蕎麦の花くすぐる私の昼寝どき

神戸市

富永 恭子

実を食べに来たのか鳥のはしやく声

塩竈市

木田比呂朗

圏外に安堵しているストラップ

橿原市

居谷真理子

余命とは言うまい影はくつきりと

河内長野市

中島 一彌

太棒が津軽の雪を舞い上げる

箕面市

出口セツ子

時止めて楽しい秘密ウフフのフ

神戸市

細川 花門

縁談に父似の鼻が邪魔をする

大阪市

石橋 直子

人生に耳かき程のスパイスを

和歌山市

鍋嶋 澄子

古希もすぎ大器晩成まだ蕾

枚方市

海老池 洋

サヨナラの美学と思う流れ星

弘前市

高森 一香

道化師になったつもりの雪だるま

羽曳野市

中川ひろ介

沈黙の宇宙地球はようしやべる

青森市

守田 啓子

ふさふさの方へ方へと進みなさい

堺市

矢倉 五月

身の丈で生きた証の小さい花

神戸市

山口 光久

ピンマイク内緒事まで喋りだす

大阪市

江島谷勝弘

エイサーは三味と指笛あればいい

三田市

尾崎 一子

三猿になるのもいいがもの足りぬ

松山市

栗田 忠士

着地したところで生きていく綿毛

藤井寺市

鈴木いさお

午後二時で止まったままの腹時計

男鹿市

伊藤のぶよし

耳掃除しても変わらぬ馬の耳

大山市

金子美千代

おみくじに恋は成就とあつたけど

島取市

倉益 一瑠

玉かんざし母にもあつた修羅の数

海南市

堂上 泰女

二島返還よりも本州危ないぞ

弘前市

稲見 則彦

全自動居眠り防止機能付き

京都市

三宅 満子

里帰りシャワー全開気がねなく

藤井寺市

鴨谷瑞美子

やわらかいパフが傷口そつと撫で

堺市

澤井 敏治

内緒だが小野小町の虫メガネ

島取市

谷口回春子

手が出せぬところへそつと助け舟

和歌山市

古久保和子

不時着をしたのは母のお針箱

河内長野市

木見谷孝代

落とし物取りに行けないわけがある

藤井寺市

太田扶美代

よく見てこの絵の中にボクがいる

奈良県

渡辺 富子

ポケットのピンがあの夜の恋語る

三田市

村田 博

ノロウイルスの特効薬がまだ出来ぬ

吹田市

山本希久子

今を生きる私の過去に触れないで

奈良市

森中 博一

青空へ妙なる音を風に乗せ

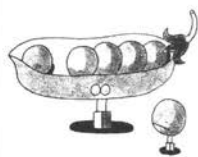
上尾市

中村 伸子

内緒ごと知っているのは私だけ

5月号発表

(3月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箒に2句



自分を褒める

現代川柳のメインテーマの一つは「自分を詠う」こと。その中でも目に付くのは「自嘲」でしょう。自らの欠点や失敗を率直に述べた句には「私も一緒!」と共感を覚えます。しかし、自嘲も度が過ぎると「自虐」になって、嫌味に感じることがあります。たまには「自分の良いところ」を褒めてやってもいいでしょう。褒め過ぎると「自慢」になってしまいますが、疲れた心を軽くマッサージする程度の褒め方は、読者にとっても心地よい癒やしになります。

前向きな今のわたしが好きである
ふつつつと湧き出る学ぶエネルギー
拘らずフリーサイズで生きている
人好きの私退屈させません
心にはいつも桜が咲いている
「見るべきほどのことは見つ」と壇之浦で自害したのは平知盛ですが、いささか負け惜しみ気味。いつも「前向き」で「学ぶエネルギー」を持続していきたい。総ての物事や人物に対して先入観や固定観念に縛られず、誰でもウエルカムで「心はいつも花園」と言える心境でありたいものです。

耐えることだけに自信持っている
諦めがいいのは長所かも知れぬ
ガチャンとは切らぬセールス電話でも
齒科の椅子でうとうとできるのも特技
キッチンで生きる力を生んでいる

鴨谷瑠美子
吉道あかね
北田のり子
加藤 峰子
倉益 一瑤

誰にも欠点がありますが長所もあります。いや、欠点イコール長所でもあります。耐えることも諦めがいいことも長所。迷惑な電話でも丁寧に対応できること、歯医者椅子で居眠りできるのも大いなる長所でしょう。また、炊事洗濯は外で働くのと同様に誇りに持てる大切な仕事です。

飛んで来た石をバクリと食べました
鮮度なら毎に負けぬ舐れてみて
自分との闘いたまに僕が勝つ
六十点つけて今夜もよく眠る
がんばってきたから影はワイン色
飛んで来た石とは「悪口」でしょうか。バクリと食べてしまいう元気があれば、心身共にいつもフレッシュ。怠け心という強敵に「たまに勝つ」というのも「六十点」というのもご謙遜でしょうが、まずまず「人並み」という自負が感じ取れます。また、頑張った人だけに見えるワイン色の影です。

太らかと褒めてもらった大雑把
褒められてやつと持ち味だと気がき
褒められて嬉しくなつてホーホケキヨ
忘れない誉められたこと褒めた人
褒め言葉一歩下がって聞いている

松井 文香
岸本 宏章
渡辺 菩句
坂牧 春妙
丹後屋 肇

自賛が心のマッサージとしますと、他人からの褒め言葉は全身マッサージ。自分の持ち味は自分では分かり難く褒められて気が付きます。大雑把も角度を変えて見ると「太らか」褒めてくれた人のことは恩人と同様に終生脳裏から離れません。褒め言葉には世辞も混じっていることを忘れぬように、一歩下がって謙虚に受け止めるのが成熟したオトナ。

本社二月句会

◇二月七日(火)午後一時
アウイーナ大阪

寒の戻りを思わせる七日、二月句会は一八名(投句五名)の参加で開催された。句会に先立ち、過日亡くなられた参与林瑞枝さん(米子市)に黙持を捧げた。

今月のお話は新家完司理事長。題は「楽しんで苦しい川柳」。川柳を始めた頃は「坊さんのお経聞きつつ句をひねる(玲子)」ほど楽しい。しかし、経験を積むにつれて「鉛筆を舐めても知恵はもう出ない(和子)」苦しみを感じるようになる。以前のレベルでは満足できず、実力が上がった証ではあっても、「全没という挑戦が続く(哲男)」と苦しみは増すばかりである。「全没は明日の糧だ気にするな(奏子)」の気概で、川柳を楽しむ苦しもうではないかと「お約束」の歌で元気づけてお話を終えられた。「ミカンの花咲く丘」の合唱で会場は大いに沸いた。(眞澄)

月間賞は海老池洋さん(枚方市)。
(司会―蕉子・真理子)(協取―すみ子・奏子)
(受付―ひろ介・満知子)(清記―憲彦)

席題「響く」

西出

楓葉選

真心が素直に響く糸電話

山本 進

お隣のドタンボタンに何かある
お隣の新築工事響く日日

指宿千枝子
津守なぎさ

元氣よくおはようびき合う駅に
落ち込んだ心に響く師の意見

小山 紀乃
石田ひろ子

二日酔い妻の叱咤が響く脳

原田すみ子
山岡富美子

母さんが怒ると地響きになった
寒いなあそうですなあ飲み仲間

内藤 憲彦
榎本 宏子

ぼそつと言うつぶやき響く子の本音
少子化へ声響く子も煙がられ

中岡 妙
大久保眞澄

3回めのツいでようやく返るカー
春風のノックが響く窓あかり

上垣キヨミ
小山 紀乃

さりげないひと言響く末席に
当っているからこ指摘がよく響く

萩原 狸月
川端 六次

去年まで打てば響いていた右脳
忠告が胸に響いてから素直

大内 朝子
石田ひろ子

響き合う友を宝にして生きる
凍てついた心に響くみつをの詩

木本 朱夏
田中 章子

雪の下根つこは春を響かせて
ベル響き愛しい娘くれてやる

中川ひろ介
小島 蘭幸

コンサートの余韻が妻と手をつなぐ
体臭が同じで響き合う心

片山かずお
渡辺 富子

胸に響く美談に酔っているピアス
声がよく響くシャッター街通り

藤井 宏造
鈴木いさお

ラブコール君の心に響くまで

鈴木いさお

いい天気仲間の声が良く響く
がんばるね君のひとこと響いたよ

新家 完司
田中 章子

人間らしく足音たてて生きている
深夜便心に響く語り口

前 たもつ
田中ゆみ子

氷瀑の扉をたたく春の音

関 よしみ
山田 耕治

響き合って二人羽織のような仲
いつまでも君のハートで響きたい

米澤 徹子
石田 隆彦

軽口がこんな反響巻き起す
加齢です空しく響き夢萎む

山口弘泰智
柿花 和夫

この星に軍靴の響き似合わない
今日打った太鼓が明日へ響きます

三宅 保州

佳

空きつ腹に響く年金減る話
隠しても胸の高鳴り洩れ聞こえ

吉岡 修
中村 恵

響き合っていますね年金日です
「ありがとう」何と響きのいい言葉

山岡富美子
市坪 武臣

古里に木霊返してくれる山

北野 哲男

人

君からの風だ胸の琴が鳴る
砲声の響く国にも呱呱の声

居谷真理子
萩原 狸月

天

あなただけ聞こえる鈴を響かせる
鬼太鼓が響き日本海荒れる

伊達 郁夫

兼題「鶏」 田中 章子 選

鶏鳴に町内会の許可が要る
今もつて一番鶏で起さる母
にわたりの鳴かぬ都会の宵つ張り
鶏よ恋知らぬまま生む卵
くたびれた鶏冠家長の顔をする
妻怒る軍鶏の親戚かも知れぬ
神様は養鶏場を見ましたか
焼き鳥屋年に一度の鶏供養
負けること覚えてからは風見鶏
何思う風のない日の風見鶏
晴れの日には亡母にならうて鶏五日
お祭りのたびに鶏一羽減り
放し飼いのにわとりだけどあるノルマ
親と子の命いだかく親子丼
疎開先鶏の玉子が温かった
東天紅聞けば思わず出る元氣
酉年に鶏インフルという悲劇
悠悠と飛ばせて見た尾長鶏
横取りの卵へ鶏の威嚇
産みたての卵かけめし最高だ
願いごと背負っています絵馬の鶏
見舞といえは卵でしたよ昭和初期
にわとりが目覚ましかった野良仕事
損得ですばやく変わる風見鶏
一番鶏聞いたことないマンション群

仁部 四郎
福田 好文
山本希久子
山田 耕治
大久保眞澄
伊達 郁夫
山田 耕治
金川 宣子
藤井 文代
升成 好
栃尾 奏子
山本 昌代
籠島 恵子
柿花 和夫
山根 妙子
澤井 敏治
出口セツ子
坂上 淳司
立蔵 信子
山本加お里
宇都満知子
足立つな子
萩原 狸月
黒岩 靖博
中川ひろ介

メンドリが鳴いて始まる一大事
鶏が卵を生んでくれた生家
鶏舎から空に羽ばたく白昼夢
コケコッコウ夜勤明けにはいい響き
ヒヨコ貰いとさか出た鶏恐くなる
コケコッコウ家のオンドリまだ寝てる
赤いとさかに私の主張抱いている
鶏口にもなれずちまちま生きている
やき鳥をしこいて愚痴を捨てている
若冲の軍鶏に睨まれ立ち竦む
鶏肉の隣に特売の玉子
デモ隊の真ん中辺は風見鶏

住

鶏糞のお陰菜園無農薬
コケコッコウ夜店で釣ったあのひよこ
ありがとう今朝も玉子とお味噌汁
鶏もマスキつきたい流行り風邪
お社の鶏しやなり内股で

人
精つくと三ツも飲んだ生玉子

地
鶏一羽捌く妻ですおそろしい
天
若冲と暮らす鶏誇らしげ
軸
垣根越し鶏も恋していた昭和

木本 朱夏
上田 和宏
松浦 英夫
山口 光久
榎本 宏子
今井万紗子
小山 紀乃
岩佐ダン吉
緒方美津子
初代 正彦
谷口 義
山野 寿之
村田 博
柴本ばつは
坂 裕之
海老池 洋
小川賀世子
太田としお
柴本ばつは
山田 葉子

兼題「ポイント」 安土 理恵 選

チャームポイント誰に見せよか春はそこ
ポイントをと二つ変えればキミ美人
すっぴんのチャームポイントですエクボ
ポイントに発火装置のある線路
守られることがポイント米傘下
説教をするポイントが掴めない
神さへポイント稼ぐお賽銭
千里眼にも盲点はあるのです
お手伝いのポイントためて月旅行
平日の午後がポイント女子の会
駅裏のポイントざつとおさえてる
呆け防止キープポイントは好奇心
黙っているだけでポイントを上上げる
花束の花になりたいわたしです
魚釣りのポイント僕の秘密基地
虚飾みな脱げば要点たわい無い
寡黙だが母はポイント外さない
ポイントを絞って探る子の未来
淋しいは禁句ポイント切り替える
ポイントは盃おいたタイミン
老春に必携笑顔金と足
この壺を押せば赤鬼泣くらしい
容赦なく老いはポイント攻めてくる
ターニングポイントの数数の数
ポイント貯めて質素に生きてます

今井万紗子
田中 章子
田端 六点
津守 柳伸
石田 隆彦
津守なぎさ
新家 完司
山本 進
柴本ばつは
立蔵 信子
吉岡 修
北野 哲男
籠島 恵子
榎本日の出
大内 朝子
島田 誠一
伊達 郁夫
鈴木 栄子
関 よしみ
市坪 武臣
榎本 宏子
山本 進
中村 恵
山岡富美子
三宅 保州

ポイントが溜まる頃には黄泉の国

ポイントのために閻魔にお見せする

ポイントが過密ダイヤを援護する

温故知新縄文杉に辿り着く

ポイントは錆びて耳鳴りまだ止まず

ポイントは錆びて耳鳴りまだ止まず

頑張らぬのがポイントという介護

子育てのポイントきゅつと抱きしめる

ケチくさいポイントカード大嫌い

ポイントは最終章に結めてある

ポイントを絞ると見えた現在地

ポイントを貯める男で その程度

佳

二枚目の舌でポイント稼いどく

ポイントは掴んだあととは迫るだけ

ポイントなど要らぬ無償の愛欲しい

やわらかい口調で急所はすさない

未来図へここでポイント切り換える

人

梅だより春のポイント打って行く

地

ポイントを切り替えるのはあなたです

天

決定のキーポイントに僕がいる

軸

生き方を変えるポイント何処ですか

兼題 「つたつた」 佐々木満作 選

とうとうと流れる川の如く生き

逃げていたオベを孫から励まされ

とうとうと黄河は人の道諭す

方舟へ急ぐ地球最後の日

分水嶺一滴の旅海に会う

二十年かけて百名山制覇

ガス電気とうとうお水まで出ない

お茶に水やがて空気も買う時代

四コマ目やつと大きな花をつけ

とうとうと流れる滝にない妥協

とうとうの大河も雨の滴から

とうとうと鼓打つ音芽え渡る

ケチケチと貯めてとうとう逝きはった

奔流となつて滔滔たる大河

滔々と落ちる私の中の滝

臍繰りが尽き筆筒預金に手を付ける

辛抱もここまで手足出すダルマ

生き上手全部遣つて逝きはった

旅なれや沈む夕日を見届ける

天国に引越しますとある賀状

逆鱗にキヤベツ一玉微塵切り

待ち人は来たらずおばあさんになった

苦も楽も二人で越えて五十年

立て板に水のごとくに回る舌

命とや滾り続けている血潮

喜田 准一

仁部 四郎

米田 恭昌

海老池 洋

中里はこべ

鈴木 栄子

あまのこーな

升成 好

海老池 洋

西出 楓楽

山根 妙子

西川ひろし

松本あや子

中村 恵

平井美智子

前田 紀雄

あまのこーな

田中 章子

津守 柳伸

澤井 敏治

栃尾 奏子

田中ゆみ子

原田すみ子

山野 寿之

平井美智子

努力努力とうとうやった綱を張る

爛漫のバラもとうとう朽ち果てる

脳味噌も手首も膝も固くなる

限界大海馬かさかさ音がする

花嫁の父に無情の朝が来る

雪解けの水とうとうと春はそこ

滔滔と輪廻転生抱き大河

煩惱の火はとうとうと悟らせる

耐えかねてとうとう牙をむく自然

最後にはあの世でやろウクラス会

人工知能あれよあれよという進歩

亡母の歳とうとう越えて恵方巻き

佳

滔滔と読んでではならぬのが弔辞

とうとうと初心貫く目が熱い

とうとうと大河歴史を識る流れ

独りよがりの埋み火でした紅を拭く

とうとうと夢を語っている瞳

人

夜明け前産道越えて吾子の声

地

どん底で忍の一字と手を結ぶ

天

とうとうと流れた月日への自愛

軸

懸念したことが見つかった診断

吉岡 修

中村 恵

新家 完司

柴本はつは

山本 進

木本 朱夏

村上 直樹

鴨谷瑠美子

木本 朱夏

太田としお

初代 正彦

藤原千恵子

澤井 敏治

藤井 宏造

小山 紀乃

野口 晶子

山本 昌代

内田志津子

島田 誠一

鳥田 誠一

籠島 恵子

籠島 恵子

籠島 恵子

籠島 恵子

籠島 恵子

兼題「傾く」 柿花 和夫 選

箸とめて傾聴させる良い話
大勢に寄り添っている身を恥じる
婆ちゃんも小首傾けはいポーズ
右下がりの癖字ですけれど筆まめで
いつからか影もくの字になってきた
立ち飲み屋半身になって酒を飲む
傾いて見てもわからぬ抽象画
うちの夫千鳥足でも無事帰宅
バラマキで傾く国の屋台骨
世間話に耳が傾く電車内
芯だけは曲げない傾斜した背骨
酒のある方へ傾く羅針盤
傾きかけた国技に待った稀勢の里
傾いて春夏秋冬ある地球
傾いても倒れはしない夫婦独楽
大勢に傾くやはり君らしい
モデルルームにそっとビー玉持つてゆく
同情を愛へと傾けた不覚
松山は傾斜しつかり読み切った
形だけ耳傾けて聞くポーズ
傾向と対策老いと認知症
少し傾いてあなたの愛試す
どちらにも傾くまいと踏んばった
斜めから見るとあの人男前
傾いて世界遺産になる斜塔

山口弘委智 坂 裕之 大坪 一徳 村上 玄也 籠島 恵子 藤井 宏造 升成 好 指宿千枝子 村田 博 山本 昌代 山野 寿之 新家 完司 松浦 英夫 上山 堅坊 山口 光久 岩佐ダン吉 緒方美津子 島田 誠一 村田 博 中村 恵 石田 隆彦 西出 楓楽 太田扶美代 酒井 紀華 能勢 利子

傾いた社運銀行から社長
沈みそうだが沈まない日本丸
逢うたびに傾くあなたへの思い
陽が傾くと元気が出てくる僕
傾いたわたし支える杖が無い
大勢が傾いてから手を挙げる
内情は一千兆の赤字国
保護主義に傾き出した主要国
油断から傾きだしてきた積木
陽は西にわたしに帰る家がある
行き違う傘を斜めに譲る道
正装のわたしにボチが首傾け

佳

首傾げ何で何でと攻めてくる
美辞麗句にくらり傾くヤジロベエ
ダリ展を出てから首が戻らない
告白にピサの斜塔となる私
人妻に傾く僕をゆるされよ

人

お銚子を傾けながら肩たたき
地 ゆつくりと西へ夕陽もわたくしも
天 チョコレート傾き加減知っている
軸 大国が右へ右へと舵を切る

兼題「結局」 小島 蘭幸 選

萩原 狸月 新家 完司 大内 朝子 石田 隆彦 中村 恵 水野 黒兎 江島谷勝弘 坂上 淳司 海老池 洋 木本 朱夏 山野 寿之 石田ひろ子 藤原千恵子 木本 朱夏 清水久美子 栃尾 奏子 酒井 紀華 松岡 篤 山本希久子 立蔵 信子

結局は白一枚に還る旅
一歩一歩それがいちばん近道だ
結局は空しさ貫く遺産分け
とどの詰まり石原さんに辿りつく
結局は大河になったひととしく
居心地はやっぱり妻の掌
結局はハイネの詩集借りたまま
華麗なる遍歴キミに辿り着く
若者も離れ箱物だけ残る
結局は綿入れを着た猫になる
人生八十年煎じてみれば一行詩
結局は自分ファーストです他人
ホットひとつ穴のあくほどメニュー見て
お伽話最後は善が勝っている
定職に付かず結局主夫になる
本一冊読んでしまった待ち惚け
結局は青い鳥など居なかった
お節介でした無駄骨折りました
高く高く伸びて結局折れた鼻
風止んでからの外野が姦しい
育つたらやはり蛙の子は蛙
迷った拳句二つとも買いました
あれこれと言うが総理の戦好き
有象無象がいつか夢見る無為徒食
口ポットが何とかなると魔灯処理

平井美智子 川端 一歩 能勢 良子 江島谷勝弘 松本あや子 川端 六点 鴨谷瑠美子 大久保真澄 米澤 俣子 酒井 紀華 細川 花門 西出 楓楽 片山かずお 清水久美子 松尾美智代 太田扶美代 山本 進 川端 六点 小川賀世子 宇都満知子 山本希久子 岩佐ダン吉 吉村久仁雄 堀 正和

結論は春の便り待つことに

木本 朱夏

呼ばんでも金が無くなりや家へ来る

鈴木 栄子

しつけ糸ほどけぬままの総絞

津守 柳伸

最後までいやと言えずに握手した

坂 裕之

花は散る雲は流れる人は往く

山岡富美子

詰まるところ汗の量ではないですか

岩佐ダン吉

あがいても壺に入れるだけの嵩

藤井 宏造

病室に寂しく残る千羽鶴

古今堂蕉子

厳正な拙せんでした外れです

三宅 保州

金だけで決めるトランプきつと泣く

上山 堅坊

結局は水に結局は土に

安土 理恵

無で生まれ欲にまみれて終って無

升成 好

住

遊び疲れて川柳に舞い戻る

新家 完司

トランプといつ時狂う他はない

荒川 鈍甲

その内にいずれみんなと雲の句座

山岡富美子

よっぱらいおうちに帰るはかはなし

新家 完司

耕耘機三男坊が乗っている

山田 耕治

人

吸って吐くただそれだけのことで

田中ゆみ子

地

愛されて愛するために居るこの世

居谷真理子

天

最後には砂へと還るピラミッド

海老池 洋

軸

負けたまままで終わるいいではないですか

句会 燦 燦

一月句会を読む

岩 崎 眞里子

路地裏の地べたも温め初日の出
花マルを付けた男と生き延びる

とーな 富子

お正月は各家庭毎に微妙に違うが、初日は相等しく優しい。
そんな新年を迎え、花丸殿と無事に生き延びた喜びに乾杯。

冬の空なんでも聞いてやると言う

ダン吉

「どうしたんだい」と鈍色の空が下りて来る冬の情景が浮か
び、ちよっと嬉しくなった。でも、聞いてやるだけなのよね。

団栗の余裕どつちに転んでも

富美子

団栗は転ぶことを前提に生きているのかと気づき、転ばぬよ
うに注意して転んでばかりいる我が身から鱗が落ちた。

改札で父が待つている里帰り

ひろ子

明日の虹見えるか父の肩車

郁夫

帰省の度に駅まで迎えに来てくれた父を思い出した。肩車の
記憶はないが虹が見えるよう守られていたと、今にして思う。

補助線を一本引いてから余裕

朱夏

安心するために取りあえず引いた一本の線。余裕が生まれ役
目を果たしたが今度はなかなか消すことが出来ない。うむ。

底辺をゆつくり歩く好きな道

日の出

三十年程前、三角形の底辺に目を据えて詠めと言われた。
ゆつくり見渡せば、暮らしの中の心根まで見えてくる気がする。

春ですよ私に触れてみませんか

奏子

雪解け一番乗りで咲くクロッカスや角ぐむ花芽達の賑やかな
声がある。でも陽気な春を纏った人達も触れて欲しそうだ。

殻脱いで踏み出す勇氣から希望

朝子

守ってくれた殻を脱ぐと希望の明日が来ると思っていたが、殻
を脱ぐ覚悟からパワーが生まれるのだ。踏み出した数歩はまだ
双葉で根を張るのはこれから。希望は風雨の中でこそ育つ。

老地神壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

スマホが主流取り残されている傘寿 希久子
主婦五人寄れば亭主の棚卸し 浩二
戦争のおこらぬ世界主に祈る 紀子
そのむかし僕もあるじと呼ばれてた げんえい
天の神地の神吹雪凍えつく 照子
馬の足初めて浴びた紙吹雪 昭
撥の音も掻き消す北の猛吹雪
咲く日まで吹雪を耐えて待つ桜
風吹雪砂丘の芸術変化する
言い勝って吹雪渦巻く胸の内
スクープも裏付けなければ罰になる
救助よりカメラが走る事故現場
一面のスクープ記事が誇らしげ
スクープで天から地獄著名人
国が賭場開帳するというカジノ
柚子を採る手にささんかはらはらと

満作 集一 舞夢 楓楽 善之 眞澄 敬子 公平 恭昌 理恵

良い夢を見れそうが丸いから
出来ない時は出来ないど割り切つて
安請け合い雨天中止でホッとする
シワシミも輝く熟女忘年会
握力の落ちてお金が逃げてゆく
どじばかり踏んでわたしの昨日今日
篝火がはせてシテワキ今佳境
生老病死我手にあつてあらずもの
タンポポの綿毛になればまた逢える
木枯がボトリと落とす喪のハガキ
富子

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

野暮用はメールで送り間に合わす 和子
嗚呼歓喜赤ヘル軍団わが命 文道
酒呑んで歌をうたつてああ愉快 盛桜
嗚呼いのち特攻隊で散つた友 螢
嗚呼卒寿戦中戦後が走馬灯 実満
嗚呼妻よ数十日の命とは 重忠
除夜の鐘縮む命の伸びる音 照彦
神経が縮む試合はハイライト 弘子
背は縮み体重だけがが増えていく
ノーベル賞縮む命をりサイクル
晩学に見栄張り縮む未来地図
縮んだね柱のきずが叫んでる
一杯のワインのラブは薄つべら
赤と白ワイン揃えて独りでです
みさ子

捷也 みつ子 和夫 すみ子 弘子 志華子 正雄 蕉子 日の出 富子

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

お転婆もしつとりなつてお嫁入り
湯上がりはしつとりピンクまだ女
ころ和ます残花一輪ひっそりと
霧雨に苔しつとりと坐る庭
しつとりと八十路潤おす旅に出る
柔くなれしつとりなれと雨が降る
目隠しの手ハンドクリーム塗っておく
塗り変えて生きて行きたい人の道
塗つて塗つて親にもらつた顔がない
落ちた壁塗りなおして立ち上がる
造作は何を塗つても変らない
壁塗りのサンコは伝統工芸士
金箔を塗ると仏像らしくなる
一振りの球が場内塗りかえる
何度でも塗り替えるする夢半ば

赤ワイン嘘のひとつを飲み込んだ
熟成のワインのように年をとる
おばあちゃんワインレッドが似合つて
地球儀を丸く納める術がない
嫁さんが父子のけんか納めてる
泥棒にあつたつもりで税取め
税金をやつと納めて財布空
年貢など納める気無し老夫婦
カラオケにワイングラスを友にして
かおる

小鹿 美ツ千 京 すみれ 蟹郎 恒 八重 拓庵 かおる

節約とケチの境目とこだろう

三世代使ったものを再利用

酒だけは節約できぬ生きる元

遍路に節約したが酒に化け

マヨネーズ振り切り口で吸って出す

バス賃を節約しよう徒歩二キロ

けちけちと貯めて年末ジャンボ買う

節約を五輪のゴジラ食い荒らす

風呂トイレ電球切れてそのまんま

アツ冷た便座の電気切つてある

牛肉から豚肉になり鶏肉に

節約にゴーヤのすだれ雪明り

南大阪川柳会

津守

柳伸報

手切れ金早く出しなと妻怒鳴る

廃屋にまだ居直つてゐる鬼瓦

居直つた嫁の口から河内弁

駄目押しで勝名乗りあげ殊勲賞

一発で負けた駄目押しまで食つた

お年玉ねだる駄目押ししてねだる

言いのがれ二度されぬよう駄目を押し

夕ごはんいりませんかと念押しされ

アホ問抜けカス馬鹿ボケとめつた斬り

駄目押しをされて我が身の老いを知る

料見は狭いが態度デカイ奴

くだ巻いて狭い心をさらけ出す

公恵

貴恵

義人

道子

紀美恵

清

紀の治

くにこ

野蒜

照彦

芳光

重利

保育所も介護施設も狭き門

大きな声で見狭いわがトッブ

ねちねちと叱る姑の総入れ歯

ねちねちと嫌みたっぷりスカンタコ

ねちねちとこぜり合つてる嫁姑

ねちねちと端からと金攻めてくる

コンビニ弁当買ったスーツの無表情

ボランテア集るやる気手弁当

子の笑顔浮かべキヤラ弁作ります

テキにカツ受験弁当豪華版

二時間目弁当食べて昼はパン

一人旅水了軒を道連れに

避難所でおにぎり一つ水で食う

弁当に夕べごめんとメモを入れ

キヤラ弁で試されている親の愛

はい今日の弁当代とワンコイン

駅弁が消えてトンネル増えている

だし巻きがやや崩れてる父子家庭

柳塔みちのく(青森) 稻見

雪一面を駆け回つてたシロと僕

残照の染みてトンボの真つ赤つか

じたばたと腕回しています冬の蜂

燃え尽きるまではじたばた恋してる

白無垢に育児の労が染みていく

国和

たもつ

郁夫

武臣

更紗

一步

栄子

恭昌

弘子

直子

裕子

高志

昌紀

実

篤

俊雄

克己

ダン吉

あさ子

則彦報

重虎

のぶよし

武

一吞

隆樹

富士慕情選

飯盒を見ると青春キユンとなる

被災地のブルーシートは眠れない

片つけた部屋が他人の顔をする

居ることは居る貧相な福の神

決断の女の海へ潮満ちる

ふる里を吞んでしまった鶯囀

降る雪の一片が詠む北の詩

無事な顔見たら説教したくり

ひと言が優しい風になる介護

いい人ね二目で犬が甘えてる

満子

安子

富子

雨奇

敬子

和子

きよし

伸

武彦

順子

佳句地十選

(2月号から)

山本 希久子

選

淋しくて影をピンクに塗つて見る

安心はできない亀がいる限り

たんぽぽも私も翔んだ自由席

昔昔ランドセルは赤だった

世は豊か老人会もおしゃれして

山の色も海の匂いも冬である

乱調のピアノは本心の嘆き

一つだけ許して春を呼び込もう

一行詩脳に雑草生やささい

割れ物と老躯に貼つてみたくなる

廣子

桂子

澄子

笑子

栄恵

比ろ志

慶子

理恵

淑子

洋

御破算で願ひましては銀世界

美鈴

一花

兄ちゃんと同じオレと言う二歳

史子

アイターン津輕に馴染み終の町

洋子

一線を越えた男の太い肚

和香子

ワカメちゃんてまだ通つてるとこ会

武本

碧報

吐き捨てた言葉に重い雪積もる

芳生

久

太虚報

輕口を言える距離まで漕ぎ着ける

美羽

備忘録あふれ要点探せない

風来坊

記念樹の高さ恩師が笑っている

蘭幸

ランクなど付けないみんな私の子

あき子

わたくしの老後雨・みぞれ・吹雪

規子

師のことばにんげん力が研かれる

寛

被災者がランク付けされ思案顔

かず子

神様の恩も一緒に忘れ去り

龍馬

森羅万象みんな恩師だありがとう

一徳

ランク付けされて気になる蛙の子

義雄

トニーザイラーが待つているよな銀世界

初枝

友逝きて恩師の涙有難し

宣之

ランク付けしたがるヒトという阿修羅

倫子

満月を砕きあなたを忘れます

黙人

荷が重く結び目直して又歩く

淑子

ランク外意地は捨てない球拾い

起世子

忘却をたどつてゆけば橋の上

小とみ

介護士と結ぶ温い手老ひとり

弘子

ハイランク目指して進む好きな道

みね

句碑建立あの青空を忘れない

井蛙

結び目がゆるんだらしい紅葉散る

幸子

人間のランクを決めるのは心

明子

雑巾にされてじたばたせぬ古着

慕情

軽率なひと言結び目が緩む

昭紀

魚にもレッテル貼つてブランド化

敏照

人情を忘れたくない老いの道

京子

トランプと疑心暗鬼の手を結ぶ

輝恵

家族葬できるぐらいは置いといて

昭枝

銀世界の底で眠っている民話

益

お人好し断る勇気いる会合

千代美

傘を出て家族の愛が見えてくる

知香

ひとりふたり・さんにな雪だるまが消える

霜石

アイラブユニなかなか勇気いるもんだ

笹舟

子には子の家族があつてそれで良し

菜摘

熾火にも未練が残るいろり端

則彦

アンパンマンにもらった勇気百倍に

比呂子

何回も仕切り直してきた夫婦

みつ江

じたばたはしないつもりの手帳買う

柳子

いじめつこほんとの勇気教えたい

汎美

一人から家族の時計時差がある

宏夫

トロフィのリボンに染みたあれやこれ

吹喜

孫が言う跳び箱五段跳ぶ勇気

規代

めいめいに家族の時計時差がある

俣子

晩成へ染みた教えて花咲かせ

花匠

母の背のまるみへ勇気ためている

鬼焼

茶の間から今日も家族の笑い声

悦子

子の駄駄もじたばたあたりで眠り出し

きよし

丸木橋渡る勇気を披露する

笑子

さて如何色良い返事待つ長さ

幸子

釣りあげた鯛がじたばた暴れ出す

吞舟

勇気あるなマイベース崩さない

慶子

奔放に生きる女の多色刷り

正治

後継ぎが玉汗噴く家畜米

つとむ

最後まで君を守ると言う勇気

栄香

カメレオン見事な色の七変化

碧

天災は折るしかない空仰ぐ

ふさゑ

免許返納決めた勇気に喝采を

敬子

仏様キンキラキンが好きらしい

日出男

正直な心に戻る酒二合

花峯

最後までカーブの年だ神つて

歩美

そつと手を貸してあげたい白い杖

章子

モナリザの微笑みを持つ友がいる

氏加子

ひ孫くるメールに家中模様が見え

初音

そつと手を貸してあげたい白い杖

昇

森に来てゆつくり森の色になる
秋いろに染まる木の葉も私も
反省の色見られぬとまた叱る
赤ペンで褒められたこと忘れない
トランプと朴で世界が揺れ動く
こころ一番また揺れ出した心電図

揺れながら忍の一字の妻の椅子
心ない風に揺らいでいる火種
切り捨てた尻尾が風に揺れている
ブランコの一揺れ天を蹴り上げる
揺れながらまだまだ続く綱渡り
命ある如く灯明揺れている

京都塔の会

山田 葉子報

弾けるまでに意匠を凝らすシャボン玉
デザインの表紙いかにて繰るページ
まだ少しデザインに凝る老いの見栄
頭から足の先まで母が縫う
デザインのセンスを生かしお重話
ベートーヴェン第九を聴いて多忙なり
メールでは埋まらぬ距離を直筆で
盛者必衰埋めた人も埋められ
だるくとも完走自分褒めてやる
けだるさの午後の詩人になつて
激動の世に生かされてかつたる
湯豆腐とオコタと玉が居てくれる

次根 当代 義泰 よしこ 准一 和子 富香 智三 幹子 ひろ子 純子 保州

銀杏を何も知らずに握る子よ
忠実男忠実が外れて豆男
がむしやらに生きた証だこの血豆
再会に歳月すべて埋めます
願わくは桜の下へ埋まりたい
人はみな一生かけて穴埋める
デザインを活かす殺すは君次第
これからは日日のデザインシンブルに
デザインより色にひかれて試着室
愛憎の狭間を埋める兄の笑顔
寄り添えばなんとかなるさ豆腐汁
タントントンだるさふつ飛ぶもみじの手
神が描いたデザインどおり生きている

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

優しくなろうとみすゞの詩集繰る
どしゃぶりも巻き上げてゆく心の眼
逢える日は心の底も晴れている
三が日晴れ何よりのお年玉
役どころしかと掴んだ晴れる胸
ちぐはぐを丸く治める今日の空
きな臭い地球をよそに祝う屠蘇
屠蘇を飲むまでは普通の人でした
お屠蘇酌む父の両手が笑つて
酌み交わしお屠蘇で辛を折つて
収集車張り裂けそうな年の暮れ

弥生 元一 則彦 泰夫 忠子 保子 光久 宏子 葉子 とな 万紗子 公子 かずお

豪雪と格闘技するショベルカー
残像を集めてきみがかりだす
お年玉笑顔集める貯金箱
集めてる訳じゃないのに小銭増え
母さんは愚痴を集めて食べている
逆光を味方に革命のチャンス
何も無い里にまぶしい星あかり
逆境に耐えて生き抜く父の背な
夫婦仲まぶしい程の車椅子
何時の日も心美人で光りたい

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

引き出物重ねて菓子も皆に分け
思惑が合いわざわざの御会葬
まだ生きて償うことのある傘寿
段差ない畳のへりにけつまずく
逝く前に子らに書き置く感謝状

富柳会(大阪)

関 よしみ報

へたな嘘自分の影に蹴蹴く
見えぬ義理捨ててするーく老いを生き
寝る前のケンカも溶けるおみおつけ
引き汐が残していった去年今年
埋み火の今を盛りと花は知る
今日も又予定に生き甲斐を拾う
肝入りのてつちり鍋を食う無謀

日出男 あきこ まさみ よしこ 克子 知香 和子 准一 弘子 富美子 四郎 實 蜂朗 高明 節子 常男 伸雄 隆充 清 田鶴子 慶子 壽峰

予定日を告げられ絶句する不倫
成し遂げる夢で溢れる春の絵馬
少年は冒険の度強くなり

その先に断じて触れぬ乱れ髪
真つ白な唇に描く夢の城

誰とでもすぐ打ち解けるいい笑顔
予定表余白をうめる明日の夢
振り切った愛と虜になった愛

冒険にベールと暗号が光る
真つ白な唇に暗号が光る

昼寝した月夜の蟹は腹が減り
風邪引きの妻は神さまから休暇
飾り言葉も枯れて一面冬景色

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

豪快な父がビールに飲み込まれ
秋さなか野山を駆ける子がいない
苦勞して得た幸せが宝物
剣山にさした花から枯れてゆく
息をひそめているブルーシートの下
肩書をなくし疎遠な部下上司
やれやれのおかけで生きて延びる
ひとことと思つた地震受け止める
笑つても泣いても待つてゐる明日
震度六耐えた狍犬あつぱれだ
乱世です民はヒーロー待つてゐる

陽子報

高 驚 澄 子 朋 子 仁 武 人 惠 一文 寿 之 ア キ よし み 晴 美 欣 之 森 子 海 希 信 子 節 子 章 子 みちこ 和 之 菜 美 和 代 和 郎 花 蓮 百合子

善悪は鉛もらおうと動かない
ラストダンスをしよう支え合いながら
若者の本音スマホが知つてゐる
喝采にちよつぱり嫉妬混ざつてゐる
年金を溜めてカジノへ勝ちに行く
ブランター枯れてオールドタウンだよ

ブラザ川柳(大阪)

梶原 弘光報

相性のおかげで交わす祝い酒
愛犬もオレの扶養に入れたいが
借金形矯めつ眇めつ鑑定士
若冲の本物ならと足が向く
本物のダイヤも曇る指のしわ
本物の京懐石は目で食わす

修

投打とも妬みたくなる二刀流
甲子園生え抜き達の晴れ舞台
赤い糸老いた夫婦の命綱
本当を見抜いた妻の千里眼
税金で格上げ第3のビール
トランプの勢い誰か止めてくれ
墓花の瑞瑞しさに手を触れて

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

年寄りの身に有難いミニランチ
連れ添つてゐるいろあつたルビー婚
踊りながら歌う若いエネルギー

夕方の三割引きで買う刺身
子期をせぬトランプブーム株価上げ
ブチ家出あしたに伸ばすゴミ出し日

川柳塔なら

大久保眞澄報

散骨の海白い波白い花
真珠湾海は濁つたままである
空にして海の心の師空海

スマホ手に母なる海が荒れている
広辞苑言葉の海に底がない
明日の飯探す船出の荒れた海
アベノミクス我が家の家計火の海に
海よりも深い愛だったかわたし
あたたかい命はぐくむ母の海

成子

情報樹海に迷う右ひだり
後もどりしない覚悟の風見鶏
好きですとずばり言われた長寿会
婚活でズバリ聞きたい齡と金
AIが頼みの綱の地震予知
今日の日をずばり生きたか問う夕陽
黙祷のまぶたに消えぬ黒い海
小気味よくずばりと見えぬ世間体
宝くじズバリの的中た夢か

稔

神楽舞巫女は輝く今日二十歳
神さんと共に喜ぶ巫女の舞
黒髪に白衣緋袴舞う神楽

史 博 紀 子 一 郎

おん祭り巫女の湯立てに人だかり
受験子へ巫女の鈴の音降り注ぐ
孫娘覚えた干支はコッコちゃん
十二支の上に君臨猫ブーム

鶏の命時には思う玉子焼

聞き役の位置で干支を考える

尾長鶏凜としてゐる止まり木に

あらまあと干支は一緒に静と動

落ちこぼれ戦嫌いの軍鶏でよし

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

ゆらゆらと火影おだやか和ろうそく

心からシヨパンの和音聞き惚れる

孫見れば怒り和らぐおじいちゃん

居酒屋の女性一人に和む席

AIと同居が進む未来像

箸進む回復してる気分する

ご馳走の後は茶漬けに箸進む

目覚ましを5分進めて待ち合わせ

体調と仲良く進むことにする

右の道進むと地獄かもしれぬ

アルバムのふくらむ厚さ子の歩み

温かった祖父の分厚い手を想う

袋だけボクに残ったお年玉

のし袋野心も入れて厚くなり

ダウンのコートふわり羽織って風の中

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

白髪増え自分の姿母に似て

自分だけ知らないことのある我が家

初デート互に本音明かさな

自分だけ生き残ってる古写真

損得もわが身となれば本音でる

自分流貫き通し平で終え

自分だけ助かりたいと蜘蛛の糸

自分色出して不評の罰を受け

親しいが本音の本音いえませ

年重ね笑顔美人になれたらな

なみなみと注いで本音をこぼさせる

勇気だせ自分にぐつと言ひ聞かせ

日に三食だれか作ってくれたなら

はびきの市民川柳会(大阪)永田

章司報

ぎゅうぎゅうの鶏舎で一羽空を見る

お節からこぼれる笑顔亡母の影

やあやあと男出会えば酒になる

焼き鳥に父と息子が肩並べ

孵卵器のひよこが母の夢を見る

やあやあと割って明日を引き寄せる

鶏冠の御蔭で伸びたキンチョール

朝鶏の声だけ響く過疎の郷

鶏鍋に祖父母の笑顔味添える

お客さん見えたら一羽減っている
年賀状仲睦まじい親子どり
やあやあと騒ぐので観る「君の名は」
重箱にとんかつ焼き肉いれてほしい

酉年だ鶏たちも胸を張る

それぞれの意味かみしめてお節食べ

トランプがトランプになる予感大

ささやかにワイン乾杯クリスマス

元旦だけおせち料理が出るらしい

やあやあと同窓会が盛り上がり

昔ながらのお節に母は腕ふるう

また鶏か言うていた頃思ひ出す

庭で飼う鶏自由に恋をする

ご先祖の知恵がつまっているお節

やあやあと掛け声が要る五十代

寂しいな一人でお節年はじめ

高級お節来年分も予約する

やあやあと会釈交した知らぬ人

高級おせち食べてみたいな腹一パイ

空を飛ぶ夢を捨てない老いの鶏

やあやあの再燃元彼元彼女

やあやあと気安く言うな初対面

川柳塔さかい(大阪)

村上

メキシコの壁トランプの腕見もの

本心に触れてそれから好きになる

光男

アヤ子

ちづる

圭以子

清

久仁雄

かつ美

美喜

真一

美代子

シルク

さくら

ヨシ枝

みつこ

冬のト

雄太

ひろ介

いさお

フジ

一文

欣之

章司

唯教

健吾

唯教

ニッポンの水です安心して飲んで何回も壁をのりこえ年をとりしみやしわ消すべたべたの厚化粧壁のやつ私追いつめ追い落す式を挙げそれから知った嫌な癖親切もほどほどにするそれからそれはからが次々とある長電話改行のそれから後が続かないいろり端のんびりしてよ馳走あるいい言葉ノートいっぱいちりばめる長寿少子化壊れてゆくニッポンそれから夢に梯子をかけてみる訳も無く万歳が出る皇居前肩書きが取れたら誰も寄ってこぬ壁薄い隣の話良く聞こえ奇ちありのんびり屋あり丁度良いいい音色のんびり聴いて茶の時間それからと帰りがけたがまた座る編てられそれから調子取り戻す日本に生まれ感謝の花の下いやしめてのらりくらりと調書とるいただきますのんびりしましよチョコパフェ生きるとはそれから先の無いドラマあれ以来昼寝慎んでるウサギそれから風は微妙に向かい風今ごろは呑気な妻で丁度よい

五 月 光 雄 敏 治 富 夫 佳 子 さくら 妙 子 ゆみ子 シルク 扶美代 志津子 若 芽 誠 一 憲 彦 舞 夢 八千代 月 子 ひろ子 清 寂 子 世 紀 子 ばつは 和 夫 玄 也 澄 空 ヨシ枝

一瞬を逃し二度とはチャンス来ず一年目はのんびりでできぬ着任地神つてたそれから掴む優勝旗一面に載る記事読まずチラシ見る今やもうのつびきならぬ地球危機死刑囚判決下りてから長い目に見えぬ壁に何度も鍛えられ

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

にんげんとにんげん愚痴のネタ無限太陽が笑うと泣いた雪ダルマ愚痴はもう止そう夕日が沈むから笑おうが泣こうが明日はやつて来る笑い声みんなが使うはひふへほ可愛くて嫁には言えぬ愚痴小言羽ばたいてみようか八十路輝かせ愚痴だけは誰にも負けん我が女房鳶がとび生んで平和な暮らし向き指一本十三万の蟹を食う道の駅王者の蟹がまだ動くいい風呂だ愚痴もなかった日が終わる正月も愚痴はよしましよお前さま何事も笑って済ます亡母の知恵里帰りする度母の愚痴を聞く荒海を生きた蟹にも上中下川柳を始め幾歳まだひよこ

みつ江 みつこ としお 憲 好 時 雄 天 笑 完 司 重 忠 一 粹 一 瑤 天 翔 茶 子 公 子 清 信 美 恵 子 蟹 郎 た ぬ 菖 子 幸 安 敏 子 雅 女 弘 子 節 子

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

乾杯の音頭短いがよろし核ゼロで今日が地球儀宴だね宴盛んになるとでてる河内弁宴果ててととは帰る影法師九条の御陰宴に酔いしれる車座の上下区別の無い酒宴旅立ちに父の涙を見た宴宴席の飲みっぷりではいつも天傘寿米寿ひ孫連れる福の神新年会下戸さえどこか華やいで達者でと熱い拍手で去る宴手酌する父にまぶしい披露宴宴たけてトサカ色した千鳥足うたげには酒と演歌があればいいほろ酔いの宴に酔ってもう一杯宴会に紛れこんでた山の神異性から気配りうれし宴盛中被災地へ少し遠慮の小さい宴冬を耐え春の宴を待つ桜

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

しみじみと足撫でている老いの幸足元の紙屑笑う当たりくじ自立する足をきたえて一人住む 幸 子 とも子 久 絵 一 歩 ダン吉 シマ子 美代子 紀 雄 六 点 信 二 英 夫 喜代子 育 代 キーキー フジ子 絹 子 アヤ子 一 文 雅 枝 瑠美子 扶美代 いさお

足萎えてできなくなつた内緒ごと

足手まといになつても俺は生きてやる

金色のわらじをまずは独り編む

生きてやる気迫について来ない脚

足腰の弱り世間を狭くする

足湯でね井戸端会議ひらいてる

足首が細いとモテるそうですよ

いろいろがもれてアモーレになつた

いろいろと試す独りの砂ほこり

机上論交わすトツクリ増えている

いろいろな願望たちが余生まで

カジノやらまだ好奇心覗き見派

いろいろがあれど束ねて主婦天下

いろいろと言いたい俺もすねに傷

ボーイソプラノお風呂から果立つ春

美しい言葉「雪国」読んでます

惚れているオカメの顔も楊貴妃だ

美しい話に飢える活字欄

大根も豆腐も無欲美しい

一匹の金魚と聞いている演歌

八代亜紀に言われぬめの爛にする

身にしみる演歌で破局乗り越える

日本人演歌を聴いてホッとする

お別れの曲は愛燦々にして

物忘れする度爺の呆けたんかッ

忘れよう「SMAPロス」は他人事

涼子

みちを

瑞人

朋子

邦代

紗季

柳歩

芳山

畔

たけし

あきら

哲子

妙子

堂太

草庵

知恵子

七七

雪代

美智子

桂子

弘充

左余

俊子

寿代

昌枝

熊四郎

記憶がなくなつていく恐怖あり

忘れ物あわてたけれどちこくした

約束を忘れ寝食忘れない

長柳会(大阪)

辻村

趣味の会活力もらう事始め

戦後派で私の好きな半のつる

女房に指示はされても指示するな

金積めば生えてくるかな禿げ頭

饒舌家本音ちらり見え隠れ

老木も新芽育み春を待つ

耐えて咲く覚悟水仙冬に生え

鑑定に出そうか迷う壺一つ

事始めまず病院へ化粧して

妻からの小言元旦から発射

二番目を選んでしまふ癖がある

生涯現役臨終が定年

本物の自分カジノで見失う

本物に触れて感性磨かれる

夢を持って明日の来ない夜はない

推敲を重ね落選句に光

初句会脳の回転音がする

事始め孫の年玉包む祖父

生え際はばらす烏の濡れ羽色

後継がぬ田んぼが増えて生える草

私色通して悔いもたと有り

輝山

ひすい

ゆき

ヒロ

旅人

正博

たけし

靖博

洋二

三和子

ともこ

正美

和代

知津子

純風

隆彦

孝代

辰男

和子

光弘

弘美

淳司

幸子

ふみ

冗談を本気にさせる罪な人

孫世代さて難読のみんなの名

本物の愛を介護に試される

川柳あまがさき(兵庫)

大浦

ほろ酔いでスポーツ見てた三が日

酒呑んでやつと開いた腹もある

三ヶ日明けた途端に医者通い

腹八分酒は八分じゃもの足りぬ

お年玉論吉以外はいいりません

うそがばれ謝る以外術はない

また一ツ輪を運んだ初日の出

腹割って話し醒めたら皆忘れ

この苦勞実るだらうか夕日見る

災害時頼りになるは両の足

よそ様の息子をもらい頼つてる

散歩行く夫にトーフ頼んどく

健康と年金以外話題無し

スマホから白痴化する近未来

この部屋はスリッパ以外お断り

子等集い優しい風に包まれる

灘五郷福寿で交わす酉の春

騒音と言われ泣いている除夜の鐘

美籠さんは弁天尼の福の神

君以外目に入らぬと言うておく

ハイハイと妻の用事は逆らえず

英美

一男

直樹

初音報

正和

健二

修平

紀恵

佐紀子

初音

比ろ志

靖鬼

紀乃

りこ

雪菜

芳香

富夫

紀華

奮水

千賀子

つな子

祐康

花門

まつお

行兵衛

直虎の切腹作法見てみたい
かあさんが間違つた時教えてね
酉年の飛躍を頼む宮の鈴

メルケル以外といつもこいつものトップ
自由の女神移民の風を頬に止め
見え透いたお世辞脇腹こそばゆい
農園は作物以外よく育つ

キミのハート今夜七割いだいた
両の手に力が入る初日の出

陽を浴びて闊歩してます冬木立

駅伝のたすきをつなぐ白い息
ご来光まだ善人であるつもり

コタツから立ったついでを頼まれる
生き様の手本を父の背に見る

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

手も足も出せぬ達磨にある焦り
年重ね姉妹で祝う皺の数

ピコ太郎髭がなければ只の人も
がり笛童話紡いでなきやまぬ

もう少し笑いまししょうよ冬木立
頑張りを朝日に貰い今日一歩

わたくしの童話は今も多色刷り
表裏見据え白寿の悟る顔

雉の声響いておらかな大地
どの神にしようか迷う初詣で

哲夫

ひとみ

キヨミ

勝弘

晶子

美籠

哲男

宏造

章子

ヨシエ

こみつ

久仁雄

耕治

いさお

地域には隠れ童話がてんこもり

除夜の鐘聞いて蠢く煩惱や

ライバルの笑顔がわたし焦らせる

神様が時々顔を出す童話

童話からひょいとジャンプをして大人

帰り道今日も感謝の縄のれん

カンパイの声新春の三世代

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

幸福は待つていないで取りに行く
お互いに福の神なら喧嘩せぬ

七福神お布施が不足地震来た

体形が福福過ぎてしただ

豆まいて努力もしたが福は逃げ

何が福買う気がしない福袋

行き詰まりあれやこれやと知恵が湧く

悪知恵が湧くうちはまだ大丈夫

によきによきと花芽も湧いてくる陽気

大鯰鎮まり湧いてくる希望

すっかり老い何がめでたい喜寿米寿

公約を忘れた顔が空々し

シミとしわすつかり仲が良い鏡

置いた場所すつかり忘れまた買った

お年玉老後資金が底をつく

貯めた金すつかりはたく青い屋根

神様に御神酒飲ませて願ひ事

朋子

両文

恵

耀一

森子

清

欣之

照彦報

玲子

萩江

紀美恵

智恵子

日出子

けいこ

風露

石花菜

龍枝

茂夫

鬼一

次男

康子

瑞子

野蒜

由紀子

御神酒だと罰は当らぬ二日酔

御神酒飲み真つ赤に熟れた孫娘

棟上げの御神酒も飲めぬ棟梁で

死の戦飾る御神酒はもうごめん

初釜に御神酒で乙女頬を染め

愛や恋湧いて下さい子らが減る

豊中もくせい川柳会(大阪) 初代 正彦報

食わぬと意地張つても腹の虫が鳴く(永玲子)

山彦を追つて山道軽い汗

訣別へ雑踏を追う目に涙

路地風に追われたゴミの憂さ晴らし

夢追うて夢で終つた独り酒

墓参り遺産分配垣間見る

姑への意地夫好みの節作る

父逝つてのびのびしすぎ肥えた母

ライバルの挙げ足取りはしない意地

落日の意地が真つ赤に染める海

窮屈な人の世意地を通すから

追いかけて虚しさ残る胸の底

顔のシワ脳にまわれと言ひ聞かす(岩玲子)

顔に出さぬそれがわたしの意地である

同窓会意地悲したネ泣かせたネ

意地はって今日一日の無言劇

妻の愚痴相づちも打ち聞く度量

雄鶏が天に初鳴き春を呼ぶ

雄大

重忠

妻子

美知江

祐子

照彦

正彦報

玲子

求芽

肇

時子

健二

武彦

美津子

真理子

雅美

美佐子

歌留多

ヨシエ

玲子

久子

武臣

耕治

正彦

黒兎

主張です意地ではないとまたゴネる
身も心も綺麗になつたどんど焼き
笹揺らぐ付いておいでよ福の神
雑草と意地を張り合う春の庭
欠点を感じさせないいい女
アスリートの意地で走つた雪の古都
途切れた記憶追つてさまよう風の中
宇宙への旅はあの世にとつておく
若冲の鶏の産毛を覗き込む
指で追う点字に笑顔沸いている
生きるためもう欠かせない一行詩

城北川柳会(大阪) 近藤

喜怒哀楽どこかにひそむ初ごよみ
ハルカスで大阪一の初日の出
初日の出とても無理ですビル谷間
皜白髪増えて絆が深くなる
川柳を自由に書ける国に住み
神様が気付いてくれるまで叫ぶ
鶏鳴の律律しさうつろ吹っ飛んだ
虚ろな目笑顔に変える呱呱の声
笑いこそ実によく効くサブリです
神様から頂くサブリ孫笑顔
釈迦超えて生きるサブリのおかげかも
サブリ等頼るものとスクワット
人間の弱味を突いてくるサブリ

見清 則彦 千鶴子 宏子 由一 満子 美智代 満作 靖鬼 きらり 堅坊 正報 洋志 克己 求芽 賢子 たもつ 郁夫 志華子 野鶴 弘委智 高志 寛昭 榮子 朝子

美女にしか効き目はないというサブリ
いい予感いい靴が二つある
戦なき世へ九条というサブリ
多言語の中で詣でる宮参り
あれこれ飲んでるのでボケません
めでたさよ今日も生きてる欲がある
枯れなくていまだ煩悩増すばかり
明日がある無いかも知れぬ松飾り
幸せが増えますようにまず笑顔
生きたとは何か問いつつ生きている
三回忌墓にマフラーそつと掛け
恋というサブリを抱いて百目指す
長生きに感謝句が増え友が増え
年輪を重ねて増えた顔のしわ
ありがとうその一言がサブリです
老々の介護の涯をふと思う
天秤に加齢とサブリ乗せ咀嚼
赤ちゃんの百面相は見飽きない
プリン体ゼロのビールがサブリです
万博はカジノ誘致の呼び水か

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

決算のつかぬ命を持てあます
正直で喜怒哀楽がすぐ顔に
受験子にきつい大雪寒波風邪
仏の顔しても心に住むサタン
新しい命むさぶりつく乳房

博 一歩 いさお 実 節子 直樹 俊雄 柳弘 杵香 義昭 素子 堅坊 集一 あさ子 千恵子 満洲夫 麗 修 勝弘 正 恵美子 榮子 久美子 浩子 シマ子

落ちてなお異彩を放つ寒椿
風受けて洗濯物がダンスする
出ておいで光つてこらん春だから
難民の子の悲しげな大きな瞳
小粒でも発行体の自負がある
両手いっぱい宇宙の恵み初日の出
点字盤光無くすも友は詠む
成人式風もスキップして祝う
今風の略語カタカナ意味不明
新年の生命線が伸びていく
光るもの全部はずして人になる
十億円振り込めサギにあつたよう
借景が小さな家を光らせる
新春ヘクリーニングをすることろ
老いたので光るものから遠くいる
火葬場からお骨赤ちゃん抱くように
風になりたくて肩書きみな外す
魂だけいつも光らせ生きている
手のひらに喜びも悲しみも
中流が疲弊してます総理殿
とし玉を抱いてにつこり去った孫
栄光の蔭逆光の過去がある
戎さん福を受けずにスリに遭う
廃炉まで兆の飛び交う原子力
夫の顔見れば株価が見えて来る
過労死に気付かぬ振りのビル明り
針千本飲まされ燃え出した生命

穩夫 克己 廣子 喜代志 喜八郎 一志 康信 満知子 福貴子 紀乃 ふさゑ 俊雄 堅坊 朝子 隆昭 英夫 たもつ 茶助 紀雄 ひろ介 義泰 義秀夫 秀夫 篤 公輔 のぶ久

單純な私不快が顔に出る
命の灯ドナーカードに棲む女神
孫来ると顔がくずれるお爺ちゃん

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

孫の手と時に猫の手あればいい
開けゴマ生きたるイロハを届けます
つらいけど耐えねばならぬ冬の天
負けて勝つ歳でもないしケセラセラ
円満だ秘密もないし愚痴もない
たった今この青虫も蝶になる
去年より小さい手帳買って来る
お振袖親の苦勞が偲ばれる
平凡な句こそ人柄にじみ出る
鏡餅願いを込めて飾る部屋
ラグビーを観に行つてますお正月
父も居て母も晴れ着の三が日
日の丸を出すとみーんな見て通る
新年へ誓いをひとつ書き直す
我が家にも一人飼つてゐる宇宙人
少年の夢が羽ばたく宙無限
宇宙行き銀河鉄道初日の出
孫の絵に宇宙人似的じじとばば
無重力夫を尻に敷けません
宇宙から見下ろす地球に憂い増す
新発見で宇宙の謎がさらに増え
告白の真つ赤な顔を手で扇ぐ

希久子
弘子
哲男

弘子
いわゑ
能子
じろう
みよし
紀華
一徳
キヨミ
盛夫
武臣
勝弘
ひとみ
章子
千代
武彦
秋果
和宏
宣子
哲男
正彦
浩司
敦子

先着順ですよと煽る福袋
残り火を扇いで恋の再点火
強風に扇がれ大火街食べる
旅好きの亡兄の御霊は宇宙散歩
入院の妻が夫へ檄とばす

おろおろといつても泣けるプロの芸
さよならにおろおろお詫びしきれない
おろおろと泣いても一人飯を食う
エプロンを叩きつけ出て行つた妻
おろおろとするな行き先決まつてる
どの道を行つても明日はきつと来る
凛とした母にもお産おろおろと
兼題を遣えおろおろ手を加え

川柳大阪 山崎 珠生報

込み入つた話さて置き剥くみかん
夏みかんもう忘れてる恋の味
留守番はみかんと母の置手紙
日帰りと思えぬ荷物持つてくる
出張なら泊まつてきたらどないです
ロケットで月の日帰り近未来
日帰りのツアーがしたい黄泉の国
日帰りの旅はあたかも紙コップ
晴れ姿二十歳の飛躍祈ります
真つすぐに五輪を目指す覚悟の目
iPS待たれる医療への飛躍
定年が炊事洗濯する亭主

正和
光久
利子
りこ
哲子
千賀子
わこ
美津子
宏造
洋次郎
野鶴
順子
光子
鉄心

残り火をやんちゃに燃やし跳んでみる
七五八十路目指して私跳ぶ
元氣出せだらしがいないぞおい野党
中学生大学入試跳んでみる
生きてゆく挑む相手は先ず自分
ぎりぎりまで自分で歩きたい気合
捨て石になつてやろうという決意
老いに鞭うって英会話に挑む
挑みたいが理性がNOと邪魔をする
老いたとて日々挑戦の氣概待つ

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

庭先で軒けたことまで知れ渡る
鈍感な人が長生きする世間
コンドルになつたら古里に帰る
飲み過ぎの境界線がややこしい
美人の湯飲み過ぎちゃったみたいです
カラスくるくるマイムマイムが終わらない
殺処分する鳥何か言いたから
鳥鳴きドキンと君が氣に掛かる
本当はもつと知りたい妻の過去
来し方の苦業ふつと五十年
貧乏神もう沢山だ他に行け
ヒマラヤを超す鶴の群息かすれ
雑巾で拭けばよい靴はいている
行く年に何度かよならしたのやら
世間には神も仏も鬼も住む

俊雄
福貴子
司
美世子
北賢子
朝子
五月
勝弘
克己
雄大
寿代
芳光
紀の治
くにこ
芳山
楓花
幸子
規雄
コスモス
道唱
大鯨
けいこ
風露
由紀子

初詣過去を投げ捨て深呼吸

測溝が気になる夜の猛吹雪

ひとりだとダブルの布団広すぎる

古希過ぎるなんて今頃花粉症

指定席あなたの側をキープする

老いはれたハゲタカばかり飲み仲間

正男

重忠

鈴野

久子

希楽良

完司

交通法規詳しく言えばみな違反

国境の恐さ知らない島の国

私を守る笑顔という鎧

盗撮と防犯カメラ紙一重

カップル誕生弾みて言ったプロポーズ

宗博

益男

みつ江

洋二

義泰

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

破れない写真一枚持ち歩く

人間に詳しくなつて来た傘寿

あかるい最期だからつまびらかにできる

もうあかん言いつつ暖簾守つて

真新しい背広が目立つ春の駅

週刊誌つまらん沙汰を根掘り葉掘り

フレッシュな嫁も三月で様変わり

人叩くなど金槌の説明書

いびつでも採れたて野菜おすそわけ

詳しいこと聞けば食べるの躊躇する

守るためヒロになった事もある

我が家にもバトンを託す子が生まれ

フレッシュさ今なお香る彬の匂

人間に詳しくなると恥ずかしい

詳しいが多くは言わぬ思いやり

6Bのエールで脳をリフレッシュ

詳しく過ぎる枝葉に幹を見失う

フレッシュな魚が美味い岸和田港

私を守る道草をする

この世よりあの世に友の数増える

飲み放題ほくと店との闘いだ

あと一台飲んだら羽根が生えてくる

今にも恋が芽生えそうですロゼワイン

こう見えても必死で今日を生きている

ほろ酔いで別の自分が見えかくれ

最期には言えるだろうかありがとう

ボケットにまだ残つてる好奇心

ちよつと一杯は二日酔いの序曲

トランプを肴に弾むお正月

背を向けてばかりへ酒がなごませる

ひれ酒の底に本心がかくれて

酒の席気になる人がまだ来ない

仲間だものその一言にぐつとくる

ひれ酒は心のひだに染みてくる

川柳さんだ(兵庫) 田中 章子報

房子

久仁雄

昌紀

光久

たもつ

加お里

美智代

扶美代

蕉子

美龍

智恵子

希久子

みつ子

いわゑ

楓楽

食卓で美人のカラス飼っている

新雪を踏み締め仰ぐ御来光

温もりが残っていますこの卵

店先の蛸が這い出す魚の棚

蛸造り足無いタコに睨まれる

新鮮なうちにどうぞと人魚の身

金星をあげた力士の玉の汗

中天に昂明日への勇気湧く

添い遂げる何にも勝る金メダル

頑張った光り輝く皆勤賞

輝いても驕らぬ低い腰

前うしろ子供を乗せて輝いて

猫抱いてラジオ聞き聞き日向ぼこ

ラジオしかなかった君の名は眞知子

寒い朝ラジオ体操操床で聞く

何もないアパート鳴つていたラジオ

青春のリズムうきうきタップ踏む

立春は名ばかりだけど心浮く

受かつても金の算段誰がする

孫が来る日には立ったり座ったり

いつらつしやい妻はしばらく旅に出る

いくらでも在庫は有ると雪止まず

こころ許すたらだ坂で見る景色

雪つもり都育ちが戯れる

人の死はきれいにあらず今が花

今日だけはやまとでし二十歳の娘

車窓から見る冬の景春の景

順子

博

歳子

哲夫

ひろ介

晶子

祐康

健彦

つな子

富夫

迪

耕治

俊昭

美知子

正和

淑子

ヨシエ

勝正

加代子

雅尚

好文

徹

美龍

宣子

一子

花門

野薫

拍手を打つと後期が過ぎていた
ツバメから親子の情を教えられ
珍しく雪降る寒がりの一人
一筋に歩いていきます足二本
ひとことの重さふわつと包まれる

きやらばく川柳会(鳥取)成田

雨奇報

急な遺作句心が悼む月刊誌
あと始末苦手で電気だけは消す
母校消え跡においてと施設来た
昼と夜忘年会が悩ましい
紅葉に「ごめんごめん」雪が降る
大掃除故障するからほどほどに
こつこつと歳に合わせて面を打つ
他人の手素直に受ける老いの道
ワイングラス上げて卒寿のクリスマス
ひざ痛み本読みながら押してみる
八路越え手の震えにも歳を知る
怒られてもうこりこりだお節介
恩人が病んで淋しい句座にいる
秋日暮れ三日月眺めものおもう
一人酒俺も一人だまあ飲めよ
スパームーン今年はおはぎ供えます
本心も世辞にも活かすおしいね
泣き虫の昔に出会う社長椅子
そばに居て何したらいいもどかしい
国が飼う金喰い虫の名はもんじゅ

武彦 修平 千津子 光久 ひとみ
あやこ 雨奇 紀の治 桐子 恵子 正二 多美子 千代 登実枝 初枝 治代 日枝子 ひろこ 宏之 美佐子 瑞枝 美智子 美穂

花達は気候変動越えて咲く
山峡の夕焼け過疎は音もなく
朝起きて居ない夫におはようと

川柳ねやがわ(大阪) 籠島

恵子報

よろこびをまとめて叫ぶ第一子
作戦より一にも二にも押すことだ
逃げる方も生き方もダメ石をケル
おみくじの中吉でよし欲張らぬ
新しい恋の予感の風に会う
被災の地で活躍新しい心
百の運願ひ犯した千の罪
斬新な風と一緒に新社長
運のない亭主と愚痴を食べてます
土下座して敵の戦意を削ぎ落とす
幸運を叫ぶジョーカーを掴み取る
作戦を敵に知らせて裏をかく
おみくじに金運ありとあつたはず
赤い糸もつれながらも今がある
新しい時代の潮目来る予感
新年の御加護を祈るどんど焼
朝帰りあの手この手で逃げ回る
幸運な人生全うして上寿
新しく募集しようか旦那さん
寝たふりがいつか軒になっている
初セリのマグロに聞いている景気
だんまりの作戦時々深呼吸吸

ゆき ゆたか 令以子 博泉 修 薫 ルイ子 朝子 堅坊 壽峰 忠央 郁夫 仁 武彦 啓二 洋 一 鈍甲 麗 高志 高鷺 かすみ 銀杏 寿子 茜

全脳で新しい句に挑む日々
連れ添って共に白髪で運がいい
運の悪さ嘆いてばかり寝てばかり

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

朝の陽を浴びて眩しい通学路
これからのところで何んで目が覚める
夢の海泳いでいますまだ傘寿
夢でなく争いのなき世界たれ
毎日の小さな努力夢ひらく
肩の凝り奴何ですかと母の夢
愚図だった亡父の粘りが解つて来
のんびりとした友達今社長
火山国温泉噴火抱き合せ
おひとりさまその身そのまま明ける年
弱気でも妻に「病」の文字はない
不明者を必死で捜すボランティア
もしかして妻は知つて訊いている
もしかして正夢なるかタイガース
もしかしてはかない夢をおいかける
もしかして富士の来光もう一度
孫唄去つてゆつくり初句会
人生は長い嵐はきつと止む
夢いくつ母の背で聞く子守歌
我が儘が高じて妻の置き手紙
もしかして明日死ぬかもで今生きる
バラ一輪木洩れ日ほどの幸でいい

あさ子 信子 恵子 千賀子 洋次郎 弘 洋一 芳江 敏夫 和宏 保雄 浩司 道子 正彦 武臣 盛夫 博史 邦子 じろう 利子 和郎 美恵子 光久 文香 武彦

第41回 全日本川柳2017年札幌大会

日時 平成29年6月18日(日) 午前9時開場
会場 京王プラザホテル札幌2F エミネンスホール
〒060-0005 札幌市中央区北5条西7-2-11
TEL 011-271-0111

交通機関

新千歳空港駅からJR札幌駅(快速エアポートにて約37分)
札幌駅より徒歩5分

主催

一般社団法人 全日本川柳協会

後援

文化庁・北海道・北海道教育委員会・札幌市
札幌市教育委員会・北海道文化団体協議会
(公財)北海道文学館・北海道新聞社・NHK札幌放送局

課題

第一部 4月15日締切(当日消印有効)
事前投句 一般(高校生も含む) 部門

「領土」尾藤 一泉選 「ジャンプ」鈴木 公弘選
「牛乳」長谷川 幹月選 「ちんちん」田中 新一選

事前投句 ジュニア(小・中学生) 部門
「熊」高橋みつよ選 「牛乳」弘兼 秀子選

「草原」田中 螢柳選
専用紙のない方は2×16cmの句箋一枚に一句を記入、各題二句無記名。封筒の裏面に住所、氏名明記。

投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留を同封して左記宛に
郵送または郵便振替口座へ送金のこと(当日消印有効)。
小中高生は投句料無料。

投句先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905
一般社団法人 全日本川柳協会 宛
TEL 06(6352)2210 郵便振替口座 009701913575

講演 「現代を考える」
講師・作家 小椋山 博 様

宿題 第二部(当日投句・11時締切)
「運河」橋爪まのり選 「大衆」梅崎 流青選
「のどか」菅原孝之助選

各題二句、当日配布の句箋に記入。

第二次選者 本田 智彦 津田 暹 植木 利衛

参加費他 浪越 靖政 森中恵美子

表彰 (参加費二、〇〇〇円・昼食、記念品二、〇〇〇円)
(1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞
(4)大会賞 (5)ジュニア部門は賞状とメダル

全日本川柳札幌大会実行委員長 岡崎 守

〈表彰式典・懇親会ご案内〉
◎表彰式典 平成29年6月18日(日) 午後12時40分から
(川柳文学賞・功労者・大会連続参加者・平成柳多留入賞者)
◎懇親会 大会終了後、同一会場で17時30分開催予定
会場 京王プラザホテル札幌2F エミネンスホール
〒060-0005 札幌市中央区北5条西7-2-11
TEL 011-271-0111

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
大会・懇親会のお問い合わせ先 北海道札幌市東区本町1条4-5-5
〒065-10041 青柳 忠方

全日本川柳札幌大会実行委員会事務局 宛
TEL・FAX 011-785-2328

大会・懇親会の参加費の送金先 4月15日(必着)
郵便振替口座番号 0278001170899
全日本川柳札幌大会実行委員会 宛

〈宿泊のご案内〉
宿泊 (一泊朝食付きお一人様税込み料金、前日・当日泊)
A ノースゲートホテル札幌(札幌市北区北6条西4丁目)
シングル 12,000円 ツイン 11,000円
ホテルルートイン札幌駅北口(札幌市北区北7条西4丁目)
シングル 11,000円

宿泊の申し込み、問い合わせ先 担当 佐藤・近藤
東武トップツアーズ(札幌支店) FAX 011-222-4357
TEL 011-221-0821

※宿泊施設は4月15日までにFAXにて東武トップツアーズへ
お申し込みください。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 軽い・腕・どかどか・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川 柳 たちばな	15日(水) 14時締切 印象吟・運・閉まる・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) TEL06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸 和 田 川 柳 会	18日(土) 12時30分開場 裏・送る・やがて・エブロン	岸和田市立福祉総合センター 南海電車「岸和田」駅より徒歩5分 〒596-0067 岸和田市南町9-17-818 藤井康信
川 柳 塔 みちのく	18日(土) 17時締切 企てる・ずかずか・朗報	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」 TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	19日(日) 12時開場 沈む・器用・インスタント・自由吟	寝屋川市産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	19日(日) 14時締切 帯・愛想・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	20日(月) 13時50分締切 肩・閉める・せめて・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さ ン だ	21日(火) 13時30分締切 人情・信じる・ギャップ 凄い・自由吟	JR「三田」駅前 キッピーモール6階 〒669-1545 三田市扶間が丘5-10-19 谷 祐康
和 歌 山 三 幸 会 川 柳	25日(土) 12時30分開場 生き生き・待つ・火	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川 柳 塔 すみよし	26日(日) 13時開場 点・滴る・アイデア	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
はびきの 市 民 会 川 柳	26日(日) 14時締切 お金・輝く・びよんびよん	陵南の森公民館 近鉄「高鷺」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日) 13時30分開場 金メダル・先手・補う	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	27日(月) 18時開場 どさくさ・重心・ボンボン・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	27日(月) 14時締切 偲ぶ・あやふや・望	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木) 14時締切 円満・とんとん・臆病	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城 北 川 柳 会	4 日(土) 14時締切 押す・邪魔・くどい・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	4 日(土) 14時締切 狂・アタック・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL・FAX0721-25-0603
倉 吉 川 柳 会	4 日(土) 14時締切 すかさず・くるり・踏む	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	4 日(土) 12時30分開場 和・余裕・読む・ラッキー	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川 柳 塔 さ か い	10日(金) 13時開場 触れる・どきどき・折句：めおと	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川 柳 会	10日(金) 14時締切 祈る・生・太陽・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川 柳 塔 わかやま 吟 社	10日(金) 14時10分締切 兼 題 = 満足・今さら・すべすべ 課題吟 = 階段	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪町東2-208-5 柴原道夫
川柳大阪	11日(土) 14時締切 光る・宣言・ルール	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪府都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六 甲 川 柳 会	11日(土) 14時締切 冴える・役割・祭り・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川 柳 塔 打 吹	11日(土) 13時30分締切 メディア・騙す・はつらつ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	12日(日) 14時締切 矢鱈・もっさり・漕ぐ・雑詠	八尾市渋川町・安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川 柳 会	13日(月) 14時締切 大胆・腐る・せかせか・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川 柳 同 好 会	14日(火) 13時30分締切 他・残る・らくらく	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール 堂池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

柳界展望

★「いずも川柳会」
平成28年度 出雲賞

岸 桂子
でこぼこに生きて来た
道振り返る

★「川柳塔なら」

平成28年 最優秀句賞

★「第8回新春たましま
川柳大会」は1月7日玉
島市民会館で開催。同人
成績。

天位 丹下 凱夫

他人さまみな敬つてい
ればいい

天位 永見 心咲

父母の声ふる里今日も
晴れマーク

天位 丹下 凱夫

無精卵だったのか第九
条

★「第36回新春津山川柳
大会」。同人成績。

特選 永見 心咲

いつやるのかと鷹山が
急き立てる

★「第51回藁句碑獲得者」

天位 岸 桂子

突然のことには強い握
り飯

28年末をもって解散した。
高齢化のためクラブ活動
維持困難のため。

○「西宮北口川柳会」役
員交代。新会長に久保田
千代さんが就任。

▽出版△

○奥時雄著『苦句八十一
歳』B6判130頁 私家版。

○川柳合同句集『大山瀧』
発行 大山瀧句座。210頁。

○川柳合同句集『翠洋』
翠洋会発行。序文・太田
昭。四六判127頁。

○澤井敏治著『明日を生
きる』B6判79頁。序文
田中新一・西出楓楽。私
家版。

▽お詫び・訂正△

▼2月号、P96上段末尾
羅天↓路郎。P103上段26
行目、俸禄↓俺様

雲南市 永見 安子

紹介者 松本 昌

常任理事会 2月7日(金)

①第23回川柳塔まつり講

師選者兼題最終確認②春

の誌上大会について③中

間収支報告④定例確認事

項

次回 3月7日(火)AM10時

伊丹市

紹介者

延寿庵野露

江島谷勝弘

新同人紹介

川名洋子

— 蘭幸・完司・楓楽・朱夏推薦

仲谷真一

— みつこ・美代子・いさお推薦

宮野みつ江

— ダン吉・蕉子・蘭幸推薦

創立60周年記念 時の川柳交歓川柳会

日時 5月14日(日) 開場 10時30分
会場 兵庫県民会館9Fホール

TEL 078-321-2131

神戸市中央区下山手通4-16-3

JR元町駅西出口・阪神電車元町西出口より北へ10分

会費 2000円(記念品・発表誌呈)

※昼食は各自でお済ませください(地下に食堂あり)

講演 「父・三條東洋樹を語る」

久家 照世 氏

兼題 各題2句 欠席投句拝辞 選
「深い」 山崎夫美子 選
「公園」 恒弘 衛山 選
「音」 雫石 隆子 選
「石」 小島 蘭幸 選
「覚悟」 田中 新一 選
「煌めく」 赤井 花城 選
「雑詠」 矢沢 和女 謝選

特別課題 1句

「メール」 佐藤寿美子 選

投句締切 12時

主催 時の川柳社

第21回 川柳展望全国大会

日時 4月16日(日) 10時30分開場

場所 ホテル アウィーナ大阪

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12

TEL (06) 6772-1441

参加費 1500円

落語 「百川」

横山きのこ

題と選者

席題 「継ぐ」

佐道 正

宿題 「駅」

太秦 三猿

「叱る」

吉崎 柳歩

「夕方」

鈴木 公弘

「横」

笹田かなえ

自由吟

新家 完司

自由吟

森中恵美子

自由吟

井上 一箇

自由吟

天根 夢草

各題2句 出句締切 12時00分

自由吟は各選者に違う句を出してください

事務局 〒567-0009 茨木市山手台4-6-3-101

TEL(072)649-5226 FAX(072)649-2334

主催 川柳展望社

はばたき100号 記念川柳大会

日時

5月27日(土)

9時から17時30分

会場

(開場) 10時

出句締切 11時

開会 13時

参加費

2500円(大会誌 弁当含む)

講演

「時実新子先生を語る」

兼題と選者(2句)

「わっしょい」

「エール」

「挑む」

「これから」

「ひよっこ」

「イメージ」

事前投句

投句締切

欠席投句

投句先

問合せ先

出雲市荻野町363

柳楽たえこ宛

〒693-0013

〒693-0042

高根県出雲市外園町349

電話・FAX 0853-28-0023



「事前投句」

真野 熱田 渡川 石橋 斉尾 竹治 新家
野田 康乃 芳山 くにこ ちかし 完司
吞熊 四郎 乃畔 山 選選選選選選選

芳賀 博子 氏

編集後記

★番号に悲喜ある日なり

風の中 薫風

★2011年3月11日あ

の日から6年目を迎える。手元の川柳宮城野社編『大震災を詠む川柳』

は震災の年の秋に発行、101人の震災体験が綴られていて。「目に見えぬ敵風評と放射能 じゅん」

「被災して無死満塁の守備につく 比呂朗」

「ドドドド地球が怒っている音だ 恵美子」

「あの日」を決して風化させてはならない。

★イギリスの作家ジョージ・オーウェルの『1984年』は1949年に発表された。ビッグ・ブラザー率いる党が支配する全体主義国家の恐怖を描く近未来小説。国中にビッグ・ブラザーの大きな顔写真のポスターが貼られ、部屋の壁にはテレ

スクリーンと呼ばれる画面が、個人の思想や行動を監視している。

★日記をつけることも

恋愛も違法。「スパイ団」に所属する子供たちが、肉親の思想や行動に目を光らせ、時には当局に親を密告、告発する。国民を支配するために過去の歴史を改竄し、情緒的な言葉も絆もやさしさも、すべて排斥する統制社会の底知れぬ闇の深さに首筋が寒くなる。

★かつて日本にも「治安維持法」があった。その法の元に鶴彬は虐殺されたが、小説の主人公は拷問の果て節を曲げ、生けた。最近日本では、其の罪」が検討され、アメリカでは国益最優先の大統領が誕生。この小説のようなデイストピア（暗黒世界）が誕生すると思いたくないが、長生きをしてこの先の10年後20年

ひとこと

しわやしみは痛くない

しわやしみは痛くない。この言葉と出合ったのは「我が家の内緒話」（三浦朱門・曾野綾子共著）である。膝・腰・肩が痛い、生き過ぎた言うてあちこち医者通いと、川柳句帳をもつて、いそいそ整形外科に日参している。昨日まで感じなかった痛みが、突然やってくる。「どうしました？」い

や、別に「加齢でしような」これに比べると、「皺・染み・髪の毛」は無縁であるし、突然やってくるわけでもない。一諸に暮らす孫たちも生まれたときから見慣れているから揶揄することもない。

川柳って、苦痛ですよなんて言いながら、情熱というか、執念というか、物忘れ良く、句作りに明け暮れる毎日である。（澤井敏治）

後の日本を、世界を、私は見たくはない。

★昨年末、現代川柳点鐘の会主宰・墨作二郎氏が逝去された。享年90。「麻生路郎読本」をお送りしたとき大層お褒めを頂いた。謹んでご冥福をお祈りします。（朱夏）

○将棋ソフトの進化には驚かされる。人が400年余りかけた将棋の理論を人工知能（AI）は10倍以上の早さでものにしたらと言われている。

○トップ棋士の不正使用が持ち上がり、その棋士は出場停止になるが、第

三者調査委員会による「不正使用の疑いなし」の結論に、谷川浩司連盟会長が引責辞任した。谷川浩司といえば、中学2年生でプロ棋士、21歳で史上最年少の名人位と輝かしい棋歴である。

○将棋の盤面には10の30乗という途方も無い可能性がある。AIがプロの域に達するのはまだ先

と楽観があったのではと思われるが、AIの進化は周知の通りである。

○「棋は対話なり」と言う格言がある。人と人が指してこそ生まれる名言や物語が盤上にある。「勝負だけならジャンケンでいい」と羽生善治将聖の言葉に、さもなくとも頷く。

○人工知能は自分で学習しながら進化を遂げる。そのうちに川柳や俳句に進出してきたらどうしよう。

（まつお）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)

地名

市都
道府
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「適当」(3月15日締切)

5月号発表

安土 理恵 選 — 共選 — 北野 哲男 選

B A

--	--

地名

市 都
道
府 姓
雅 号

B A

--	--

地名

市 都
道
府 姓
雅 号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

5月号発表 (3月15日締切)

初歩教室 「氣楽」(3句) 居谷 真理子 担当	一路集 「あなた」 太田 扶美代 選	インスピレーション・ナビ 「主 張」 大西 泰世 選	檸檬抄 「適 当」 安北 哲男 共選	愛染帖 「(2句)」 新家 完司 選	水煙抄 「(8句)」 西出 楓 選	川柳塔 「(8句)」 小島 蘭 幸 選
-------------------------------	--------------------------	----------------------------------	--------------------------	--------------------------	-------------------------	---------------------------

6月号
檸檬抄「沖」
一路集「知恵」「コメント」
初歩教室「傘」

本社3月句会

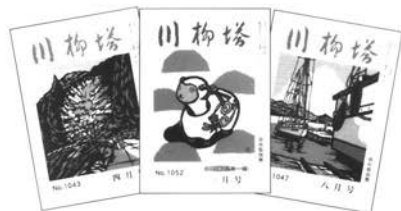
とき 3月7日(火) 13時開場・13時40分締切
 ー開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし「日本人と来世」
 兼題「損」
 席題「リボン」
 「ばつと」
 「似る」
 「怪我」
 会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)
 小島 蘭 幸 選
 川端 一歩 選
 伊達 郁夫 選
 矢倉 五月 選
 大久保 眞澄 選
 宮西 弥生 選
 藤井 則彦 選

本社4月句会
 10日(月) 午後1時から
 兼題「羨」「ランチ」「ぐずぐず」
 「刺す」「意欲」

第35年度 夜市川柳募集

第10回「毒」高瀬霜石選
 ハガキに3句 3月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

川柳・俳句・エッセイ・小説
 新聞・広告・ポスター・伝票等
 あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
 TEL (06) 6372-1178
 FAX (06) 6372-1196
 E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料83円)
 半年分 五千円 (送料共)
 一年分 九千八百円 (同)
 二〇一七年(平成二十九年)三月一日発行
 発行人 小島 和幸
 編集人 木本 朱夏
 印刷所 美研アート
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七番
 花野ビル201号室
 発行所 川柳塔社
 電話 〇六六七九一三四九〇番
 振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

オニザキのプレミアムロースト

つむぎごま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>